

にしばる
西原第2遺跡

ちくいけ
築池地下式横穴墓1991-1号

くだま
久玉遺跡(第4次調査)

まつばら
松原地区第Ⅱ-2遺跡

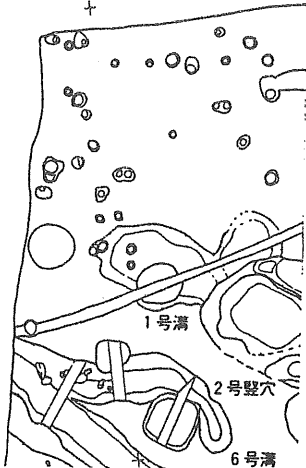
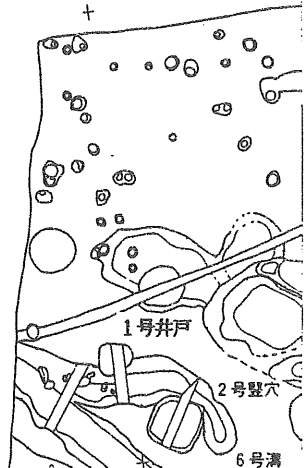
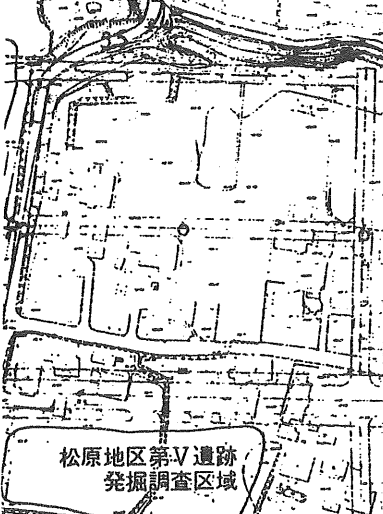
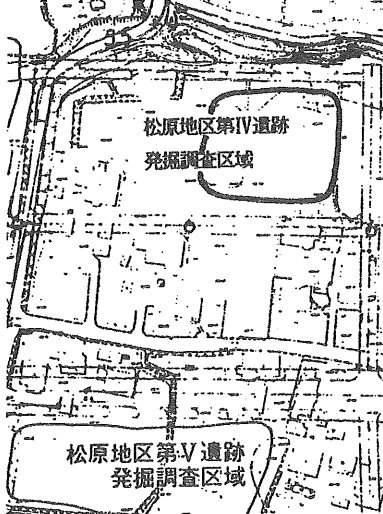
よこおぼる
横尾原遺跡

くろつち
黒土遺跡

1992.3

宮崎県都城市教育委員会

都城市文化財調査報告書第16集 正誤表

箇所	誤	正
5ページ・7行	都城市図書館内	都城市立図書館内
101ページ・図面		
114ページ・表	60と61 U-19 (1号土坑)	U-19 (2号土坑)
125ページ・地図		
145ページ・13行	からは	からは
145ページ・35行	位置づけられている	位置づけられている

序

この報告書は、平成2年度末から平成3年度に都城市教育委員会
が実施した埋蔵文化財発掘調査の本報告並びに概要報告書です。

本報告は西原第2遺跡、築池地下式横穴墓1991-1号、概要報告
は久玉遺跡（第4次調査）、松原地区第Ⅱ-2遺跡、横尾原遺跡で、
中間報告として、黒土遺跡も掲載しました。

築池地下式横穴墓、横尾原遺跡出土の古人骨に関しては、長崎大
学医学部、鹿児島大学歯学部からそれぞれ玉稿を賜った。今回調査
した遺跡は縄文・弥生・古墳・古代・中近世の各時代の遺構・遺物
が出土しています。特に、黒土遺跡では縄文時代末から弥生時代初
頭の貴重な石器や土器が出土しました。

最後に本書が市民の皆様の文化財に対する理解の一助となり、広
く活用されることを願うとともに研究資料の一つとなれば幸いです。
また、猛暑・厳冬の中で調査に従事された方々や調査にご協力・
ご援助いただいた方々に感謝申し上げます。

平成4年3月

都城市教育長 隈元幸美

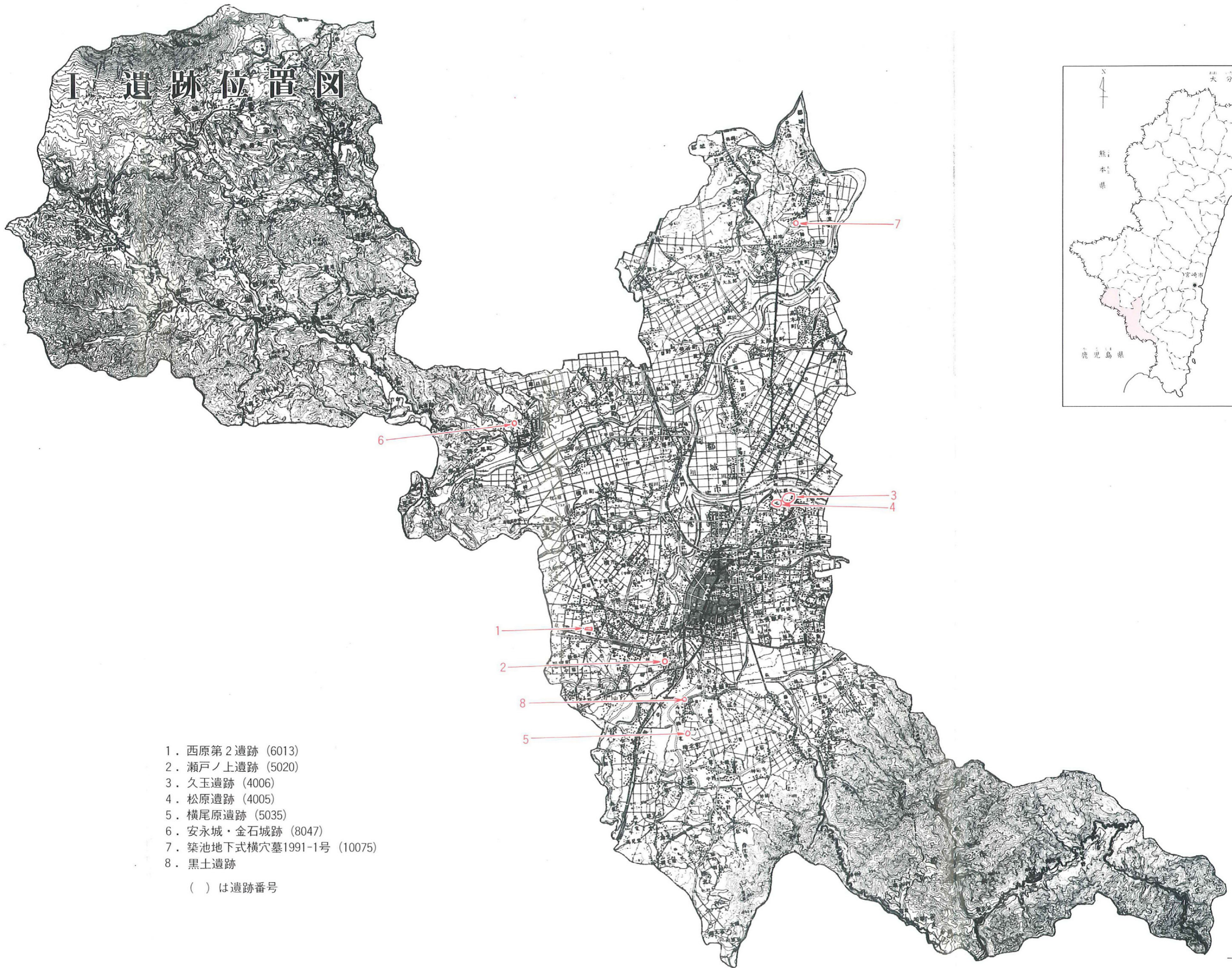
例 言

1. 本書は平成2・3年度都城市教育委員会が実施した埋蔵文化財発掘調査の本報告並びに概要報告書である。
2. 掲載した遺跡のうち、西原第2遺跡・築池地下式横穴墓1991-1号が本報告、久玉遺跡（第4次調査）・松原地区第Ⅱ-2遺跡・横尾原遺跡が概要報告である。また、中間報告として黒土遺跡も掲載した。
3. 久玉遺跡（第4次調査）と松原地区第Ⅱ-2遺跡出土の陶磁器に関しては、佐賀県立陶磁文化館大橋康二氏の指導を賜った。
4. 本書の執筆者は目次に記した。
5. 本書の編集は都城市教育委員会文化課矢部が行った。

目 次

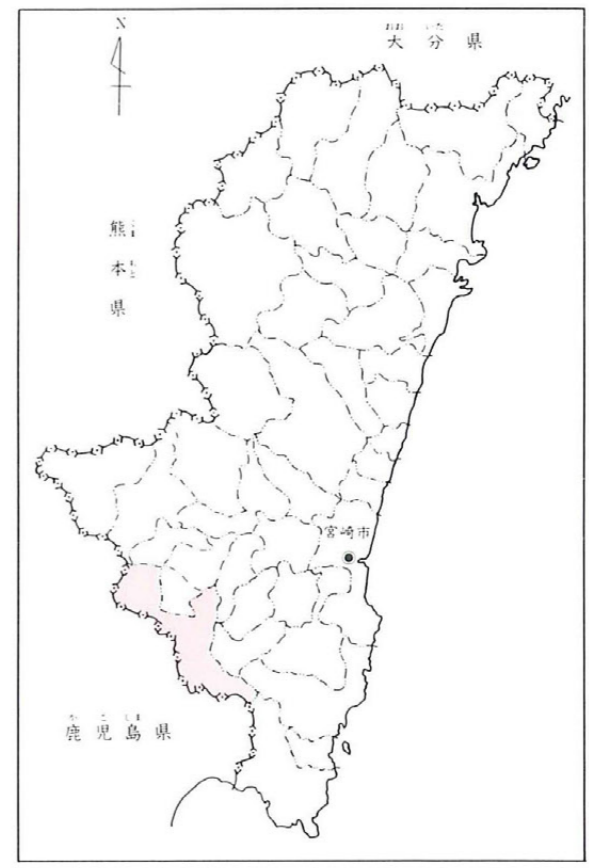
I. 遺跡位置図	1
II. 西原第2遺跡	3
附篇 西原第2遺跡における植物珪酸体分析調査報告	39
(古環境研究所)	
III. 築池地下式横穴墓1991-1号	61
宮崎県都城市築池地下式横穴墓出土の古墳時代人骨	77
(長崎大学医学部解剖学第二教室)	
IV. 久玉遺跡(第4次調査)	95
(矢部喜多夫)	
V. 松原地区第Ⅱ-2遺跡	123
(矢部喜多夫)	
VI. 横尾原遺跡	141
(栗畑光博)	
附篇 都城市横尾原遺跡出土の火葬人骨	147
(鹿児島大学歯学部口腔解剖学第2講座)	
VII. 黒土遺跡	153
(栗畑光博)	
VIII. 都城市内平成3年度発掘調査一覧表	157

I 遺跡位置図



- 1. 西原第2遺跡 (6013)
- 2. 瀬戸ノ上遺跡 (5020)
- 3. 久玉遺跡 (4006)
- 4. 松原遺跡 (4005)
- 5. 横尾原遺跡 (5035)
- 6. 安永城・金石城跡 (8047)
- 7. 築池地下式横穴墓1991-1号 (10075)
- 8. 黒土遺跡

() は遺跡番号



Ⅱ ^{にしばる}西原第2遺跡発掘調査報告書

例 言

1. 本書は、都城市立明和小学校の新設にともなう^{にしばる}西原第2遺跡の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、都城市教育委員会が主体となり、平成3年4月25日から6月9日まで行った。
3. 発掘調査地は宮崎県都城市久保原町8584番地の1外、字栗原である。
4. 発掘調査面積は約3,631m²であり、調査費用は、造成を行った都城市土地開発公社が負担した。
5. 出土遺物の整理作業（水洗・復元・注記）については、都城市図書館内の埋蔵文化財整理作業室にて行った。
6. 本書掲載の遺構等の実測図の作成と写真撮影は、作業員の協力を得て、都城市文化課主事 栗畑光博が行い、遺物の実測とトレースは栗畑があたった。なお、遺跡の空撮は株式会社スカイサーベイに依頼した。
7. 本書の執筆と編集は、栗畑が行った。また、附篇の自然科学分析調査報告は古環境研究所の杉山真二氏に依頼した。
8. 出土石器の石材鑑定は玉竜高校教諭成尾英仁氏に依頼した。
9. 報告書作成にあたっては下記の方々の指導・助言を得た。
河口貞徳（鹿児島県考古学会会長）、長野真一、宮田栄二、弥栄久志、井ノ上秀文（以上鹿児島県文化課職員）、重永卓爾（都城市文化財専門員）
10. 本書に使用した基準方位は磁北であり、レベルは海拔絶対高である。
11. 発掘調査におけるすべての記録と出土遺物は、都城市立図書館内の埋蔵文化財整理作業室に保管している。

本文目次

序文	
例言	
第1章 はじめに	9
1. 発掘調査に至る経緯	9
2. 調査の組織	9
第2章 遺跡の位置と環境	10
第3章 発掘調査の記録	13
1. 発掘調査の方法と経過	13
(1) グリッドの設定と調査区域	13
(2) 発掘調査の経過	13
2. 遺跡の地層	14
3. 遺構	14
(1) 土坑	14
(2) ピット	14
(3) その他	20
4. 遺物	23
(1) 土器	23
(2) 石器	23
第4章 まとめ	26
1. 土器について	26
2. 遺跡の立地と性格	26
附篇 西原第2遺跡における植物珪酸体分析調査報告	39

挿 図 目 次

第 1 図	遺跡周辺地形図	10
第 2 図	調査区域図	11~12
第 3 図	第 1 調査区グリット図	13
第 4 図	第 1 調査区遺構配置図	17~18
第 5 図	第 1 調査区土層断面図	15~16
第 6 図	第 1 調査区遺構平面図(1)	20
第 7 図	第 1 調査区遺構平面図(2)	21
第 8 図	第 1 調査区遺構平面図(3)	21
第 9 図	第 1 調査区遺構実測図	22
第10図	第 1 調査区遺物実測図(1)	24
第11図	第 1 調査区遺物実測図(2)	25
第12図	第 1 調査区遺物実測図(3)	26
第13図	都城市内出土の三万田式期の土器	27

表 目 次

第 1 表	第 1 調査区ピット一覧表	19
第 2 表	第 1 調査区出土土器観察表	23

図 版 目 次

図版 1	土層断面写真および模式図	31
図版 2	上段…〈1〉遺跡全景(北東上空から)	32
	下段…〈2〉第 1 調査区(H・I・J-10・11区)遺構完掘状況	32
図版 3	上段…〈1〉第 1 調査区(K-8区)遺物出土状況	33
	下段…〈2〉第 1 調査区(K-8区)浅鉢形土器出土状況	33
図版 4	上段…〈1〉土坑SC2上面確認状況(西から)	34
	下段…〈2〉土坑SC2完掘状況(西から)	34
図版 5	上段…〈1〉浅鉢形土器(1~9)外面	35
	下段…〈2〉浅鉢形土器(1~9)内面	35
図版 6	上段…〈1〉深鉢形土器(10~11)外面	36
	下段…〈2〉深鉢形土器(10~11)内面	36
図版 7	上段…〈1〉土器(13)	37
	下段…〈2〉石器(14)および剥片	37

第1章 はじめに

1. 発掘調査に至る経緯

都城市教育委員会は、近年、都城市西部の五十市地区において宅地開発が進み、既設の五十市小学校と西小学校では児童生徒数の急増に対応できなくなったために、平成2年に久保原町の畑地に小学校の新設を計画した。当該地区は昭和61年の市内遺跡詳細分布調査によって知られていた西原第2遺跡（市内遺跡番号6013）と隣接しており、遺跡の可能性があった。そこで市教育委員会では遺跡のひろがり把握するために、平成2年11月28日から12月8日まで、都城市文化課主事矢部喜多夫の担当で試掘調査を行った。調査対象地は面積27,799㎡であり、2m×2mの基本トレンチを12カ所に設けた（第2図）。その結果、第8トレンチにおいて、黒色土層から時期不明の土器片が出土し、第11トレンチでは、桜島起源の灰白色軽石層（Ⅲ層）の上面に中世～近世のものと思われる幅約40cmの道路状遺構が確認された。つまり遺構・遺物が造成予定地の南部に認められたのである。この報告を踏まえて、平成3年1月に都城市教育委員会と都城市土地開発公社との間で協議が行われ、埋蔵文化財の取扱いについて次のような取り決めがなされた。

- (1) 発掘調査の原因者は、土地の取得と造成を行う都城市土地開発公社とし、発掘調査費用は同公社が負担する。
- (2) 発掘調査の主体は都城市教育委員会とし、平成3年4月に着手する。
- (3) 永久構築物と認められる建物建設予定地（校舎・体育館・プール）については、記録保存の措置をとる。面積は約4,000㎡とする。
- (4) 運動場や駐車場部分については盛土造成することとし、現状保存を行う。
- (5) 周囲のL型擁壁工・法面工は、発掘調査と並行して行う。

発掘調査は、都城市文化課主事栗畑光博が担当し、平成3年4月25日に着手し、同年6月9日まで行った。

2. 調査の組織

調査の組織は以下のとおりである。

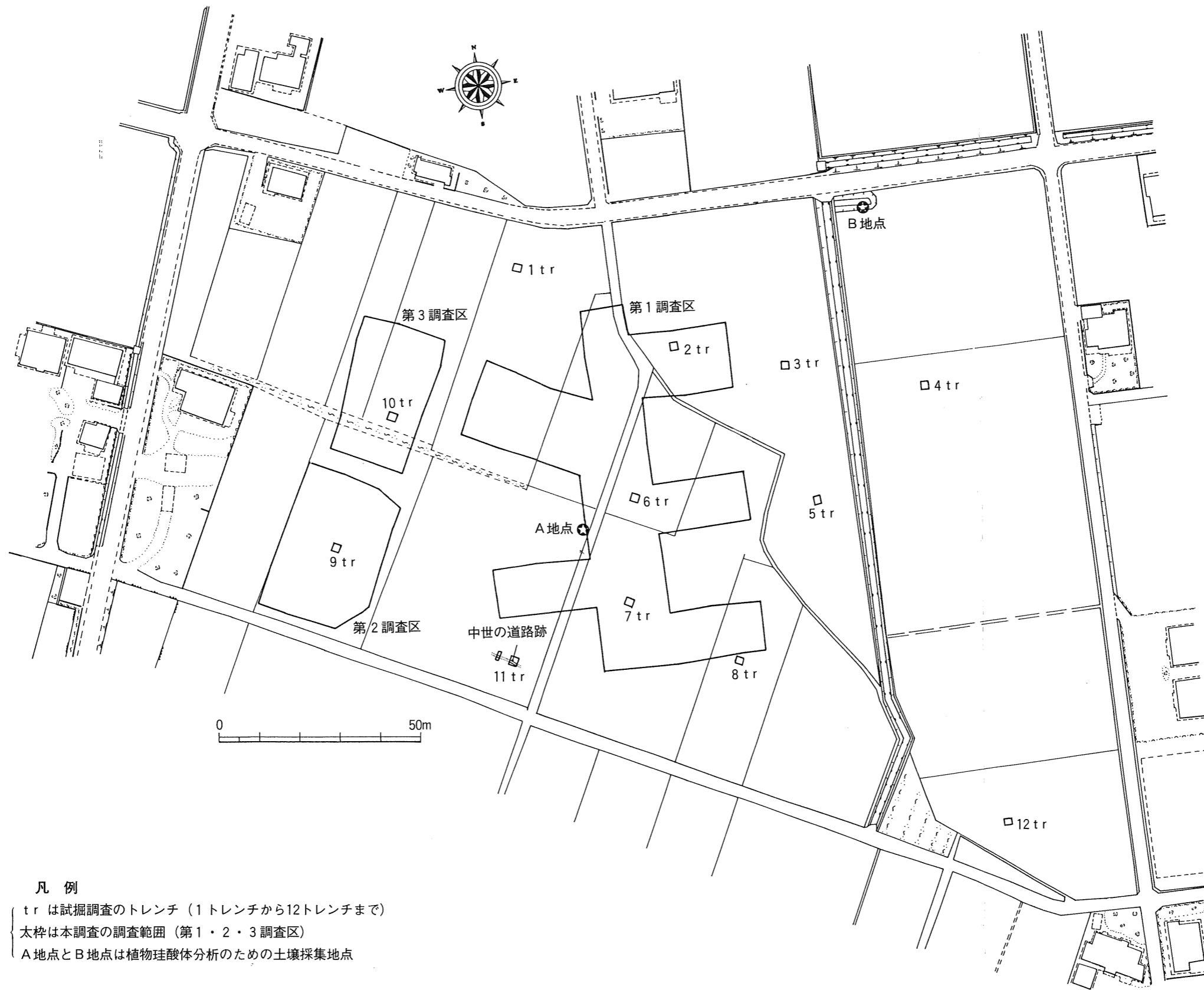
調査主体	都城市教育委員会	教 育 長	久味木福市（平成3年7月まで）
	〃	〃	隅元 幸美（平成3年8月から）
調査責任者	〃	文化課 課 長	成竹 清光
	〃	課長補佐	遠矢 昭夫
	〃	文化財係 係 長	海田 茂
事務担当者	都城市土地開発公社	主 事	江頭美由紀
調査担当者	都城市教育委員会	文化課 主 事	栗畑 光博
作業員	中原武夫，野口虎男，中原貞良，細山田登，和田利雄，壇 清人，柿木 巖， 下田代清海，坂元トミ子，岩切ユキ子，藤田フヂ子，松崎ミエ子，立山君子， 宮元孝子，南スミ子，大山ミツ子，荒ヶ田エダ，吉村イツ子		

第2章 遺跡の位置と環境

遺跡の所在する都城市久保原町は都城盆地の中央部の西側にひろがる起伏の少ない平坦なシラス台地上に位置する。標高はおおむね170mである。第2次世界大戦前は、歩兵第64連隊・歩兵第23連隊の兵舎が置かれ、現在は陸上自衛隊都城駐屯地が設営されている。台地の大半は畑作地帯であったが、最近は新興住宅地として宅地数が急増している。当遺跡の南方約300mのところ到大淀川の支流がシラス台地に入り込んでできた浸食谷が数本みられ、水田として利用されているところもあるが、それらを除けば、周辺に水の得られるところは確認されていない。昭和61年に行った市内遺跡詳細分布調査^{註1}によると、遺跡はそれらの湧水点に近い台地端に営まれる傾向がみられるが、今回調査を行った西原第2遺跡の立地は台地の内陸部であり、特異的である。



第1図 遺跡周辺地形図



凡例

{ tr は試掘調査のトレンチ (1トレンチから12トレンチまで)

{ 太枠は本調査の調査範囲 (第1・2・3調査区)

{ A地点とB地点は植物珪酸体分析のための土壌採集地点

第2図 調査区域図

第3章 発掘調査の記録

1. 発掘調査の方法と経過

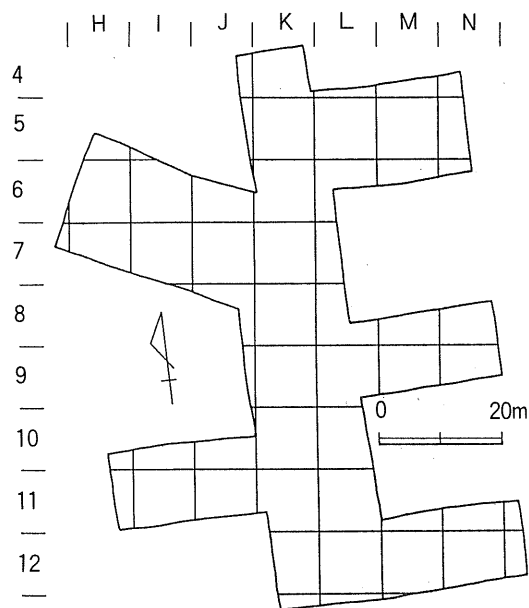
(1) グリッドの設定と調査区域 (第2・3図)

まず、遺跡全体を把握するために造成地の西北端の国土座標 $X = -141890.0$, $Y = 27470.0$ を起点として、10m単位のメッシュを組み、東へA, B, C..., 南へ1, 2, 3...という具合に記号をつけ、両記号の組み合わせによって地点を示すことにした。また、発掘調査は、校舎、プール、体育館の大きく分けて3つの区域について行ったために、それぞれを便宜的に第1調査区、第2調査区、第3調査区と呼ぶことにした(第2図)。面積については第1調査区が2,041m²、第2調査区が928m²、第3調査区が665m²である。

(2) 発掘調査の経過

表土はバックホーを使って取り除き、遺物包含層である黒色土層の上面まで掘り下げた。表土の耕作土層は、おおむね均一な厚さで堆積しており、30~40cm程度であった。第1調査区の表土剥ぎの際に、M-6区で一辺が15cmで、長さが90cmのコンクリート製の角柱が見つかり、「陸軍所轄地」の文字が判読できた。戦前のものであろう。第2調査区と第3調査区については、試掘調査の際にも遺構・遺物がまったく見つかっていなかったが、今回の調査でも遺物の出土はなかった。また、第2調査区で期待された試掘の第11トレンチで検出されていた道路状遺構のつながりもつかめなかった。なお、両調査区はごぼうの植え付けによって、縞状に御池軽石層(VI層)まで攪乱されていた。第1調査区も部分的にごぼうの植え付けによる攪乱がみられたが、桜島起源の灰白色軽石層(III層)は部分的に残存しており、それ以下の土層も比較的良好に堆積していた。遺物は、黒褐色土層(V層)から見つかり、調査範囲のほぼ全域に散在していた。土器片は総数43点を数え、石器および剥片は、合計2点出土している。J・K-8区においては、若干遺物の集中がみられた。遺構はV層から御池軽石層(VI層)への漸移層を検出面とした結果、土坑が9基、ピットが47個見つかっている。なお、自然科学分析調査として、遺跡における古植生の推定および栽培植物の有無を検討するために、2地点(A・B地点)を選んで、各層ごとに土壌を採集し、分析を行っている。

(附篇参照)



第3図 第1調査区グリッド図

2. 遺跡の地層

本遺跡の基本土層は図版1に示したようになる。以下にその特徴を述べる。

I層は暗オリーブ色を呈する砂質土層で、現在の耕作土である。層厚30～40cm

II層は灰オリーブ色を呈し、灰白色の軽石を含む。層厚0cm～15cm

III層は灰白色の軽石層で、桜島起源の降下軽石である。年代は文明年間（15世紀後半）と推定されている^{註3}。層厚0cm～10cm

IV層は黒色粘質シルト層である。層厚30cm～40cm

V層は黒褐色粘質シルト層で黄白色軽石粒を含んでいる。縄文時代後期から弥生時代にかけての土器を包含する。層厚20cm～25cm

VI層は黄白色軽石層で、霧島火山系の御池降下軽石層である。第1調査区では、その上面が北から南へ緩やかに傾斜している（第5図）。層厚50cm～60cm^{註4}

VII層は黒色粘質シルトの腐植土層である。層厚30cm

VIII層は黄色ガラス質の火山灰層である。最下部に黄色軽石と褐色火山豆石が見られる。鬼界カルデラ起源のアカホヤ火山灰層である。炭素C¹⁴による年代測定では約6,300年前という数値が得られている。層厚40cm^{註5}^{註6}

IX層は黒色粘質シルトの腐植土層である。この層の下部から次の層にかけて黄白色軽石粒が多量に含まれており、ザラザラした手ざわりがする。この軽石の噴出源はおそらく霧島火山系と思われるが、詳らかにしえない。層厚30cm

X層は褐色粘質腐植土層である。層厚40cm

火山噴出物を除いた腐植土層のうち、遺物の出土がみられたのはV層のみで、他はすべて無遺物層である。なおVI層以下については、植物珪酸体分析のために土壌を採集したB地点のみについての観察結果であり、第1～3調査区内においてはそこまで掘り下げていない。

3. 遺構

遺構は、すべて第1調査区において検出されている（第4・6・7・8図）。

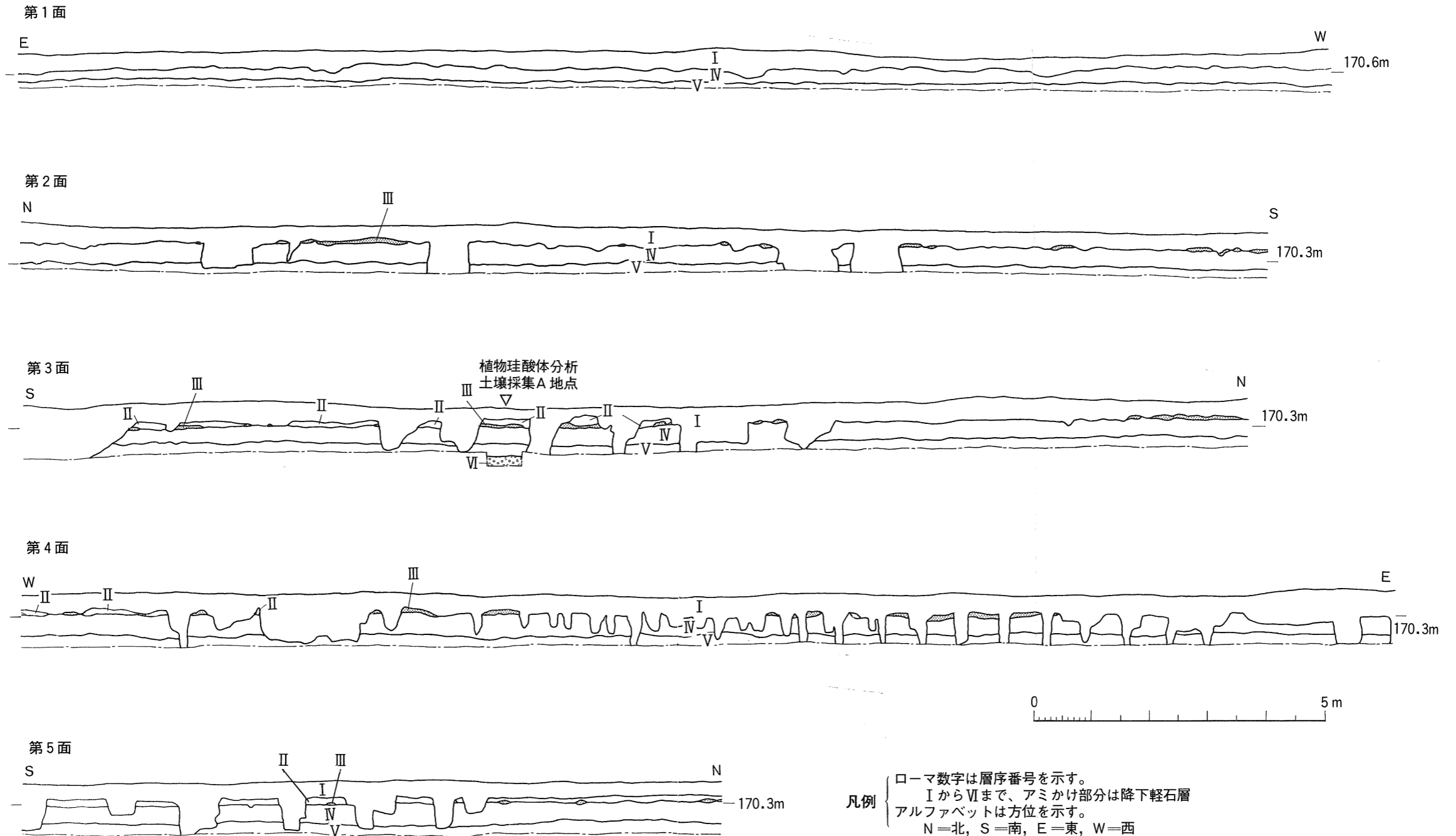
(1) 土坑（第9図）

柱穴の可能性のあるもの以外の落ち込みを一括した。第1調査区の西南部（H～L-10・11区）に比較的まとまって見つかっている。

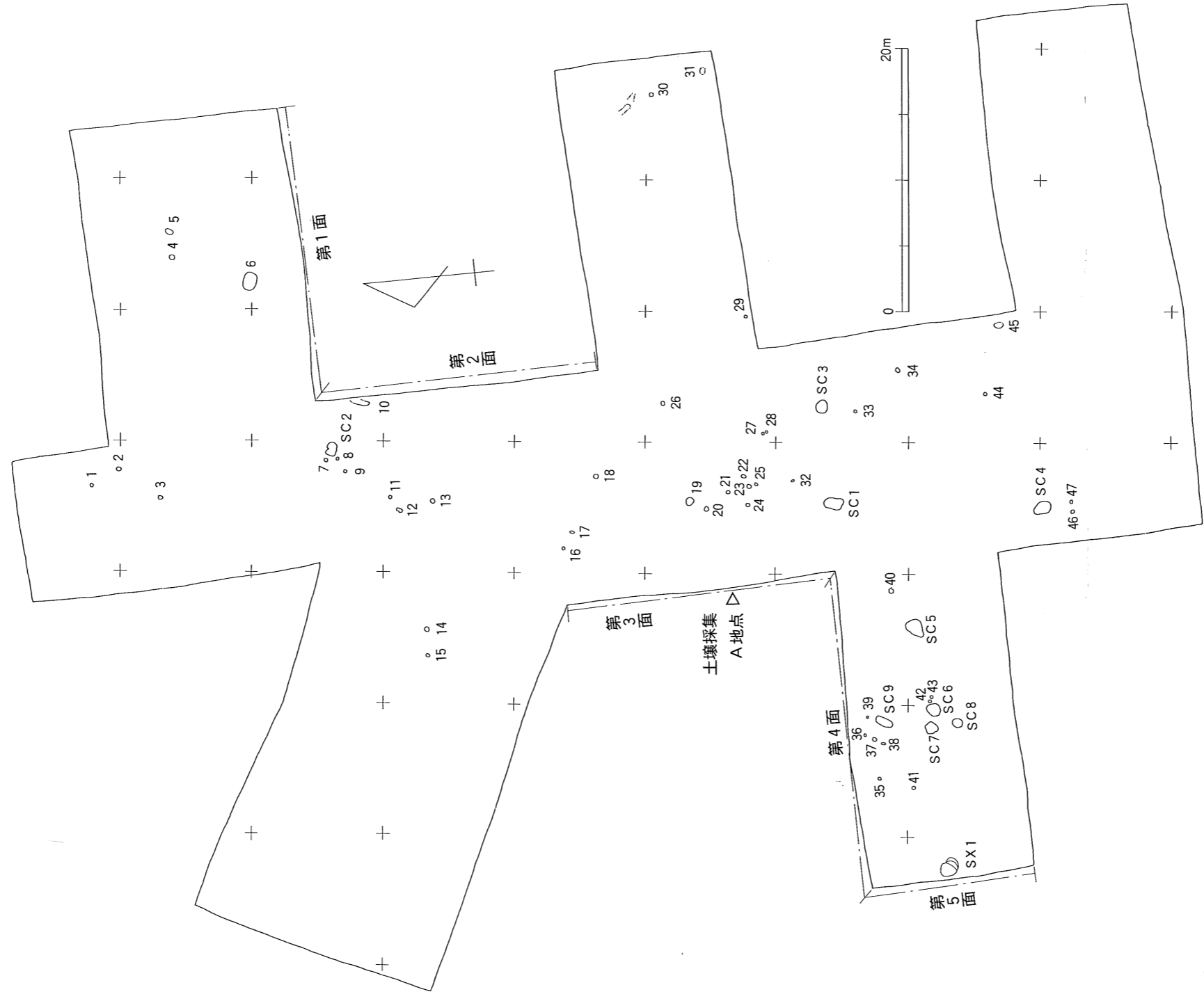
平面プランは円形のもの、楕円形のもの、不整形のものがある。いずれも基本的にはV層土が遺構内堆積土であり、床面は起伏が激しい。SC2は内部に多量の炭化粒が認められ、SC5は遺構上面に炭化材が確認された。炭化物以外の遺物の出土したものはない。なかには人為的な竪穴とは考えられないものも含まれるが、ここではあえてすべての実測図を掲載した。

(2) ピット（第1表）

ピットのすべてについて実測図を掲載することができなかったので、第1表にそれらの規模と埋土の一覧表を掲載した。大半がV層を埋土としており、その深さは、5cmから40cmまで様々であるが、概して浅い。中には柱穴とは認定できないものもある。また、土器や炭化物の出土したものもなかった。



第5図 第1調査区 土層断面図



凡例
 SC = 土坑
 SX = 地層横転箇所
 数字のみはピット番号を示す。
 1点破線は地層断面図を作成した壁面を示す。

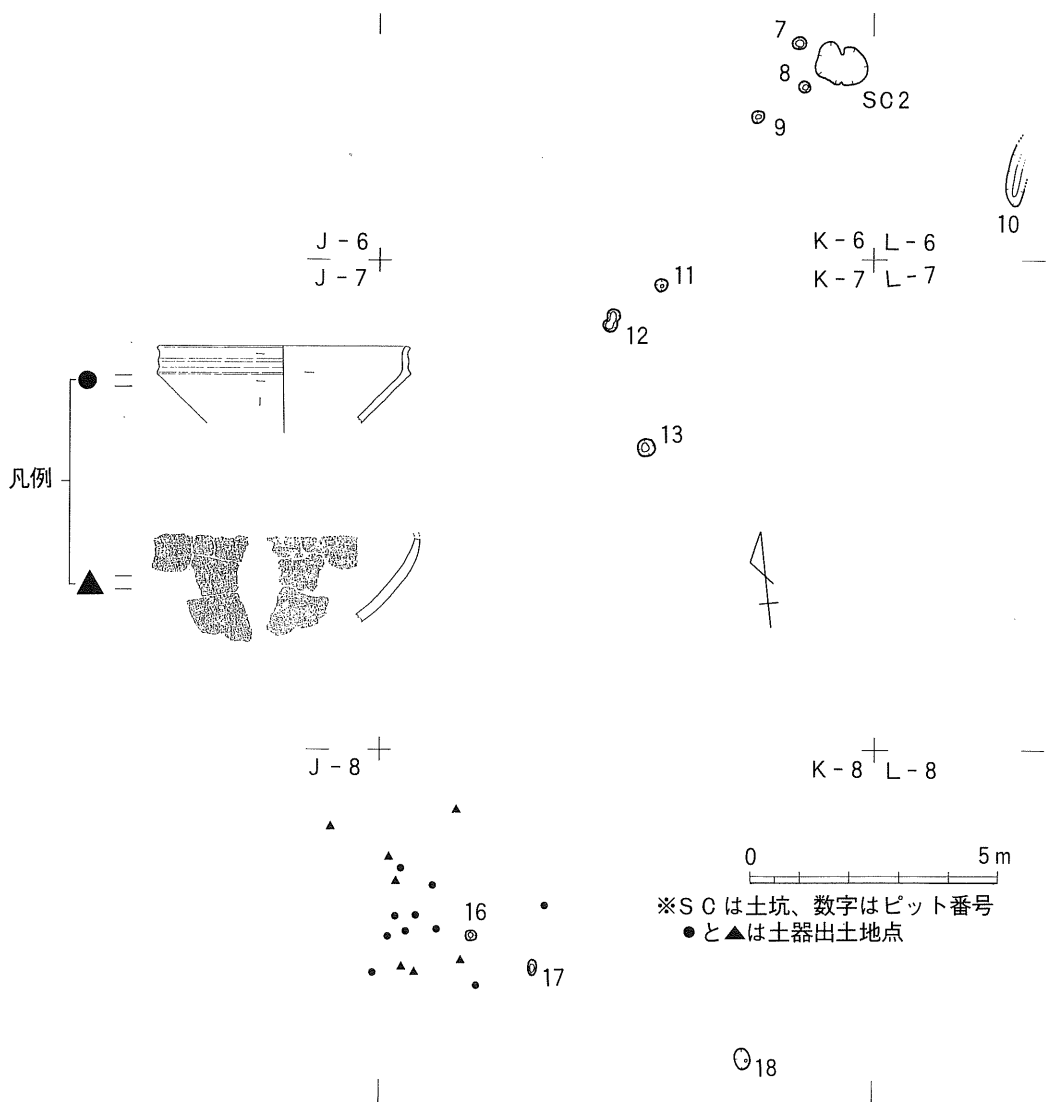
第4図 第1調査区遺構配置図

第1表 第1調査区ピット一覧表

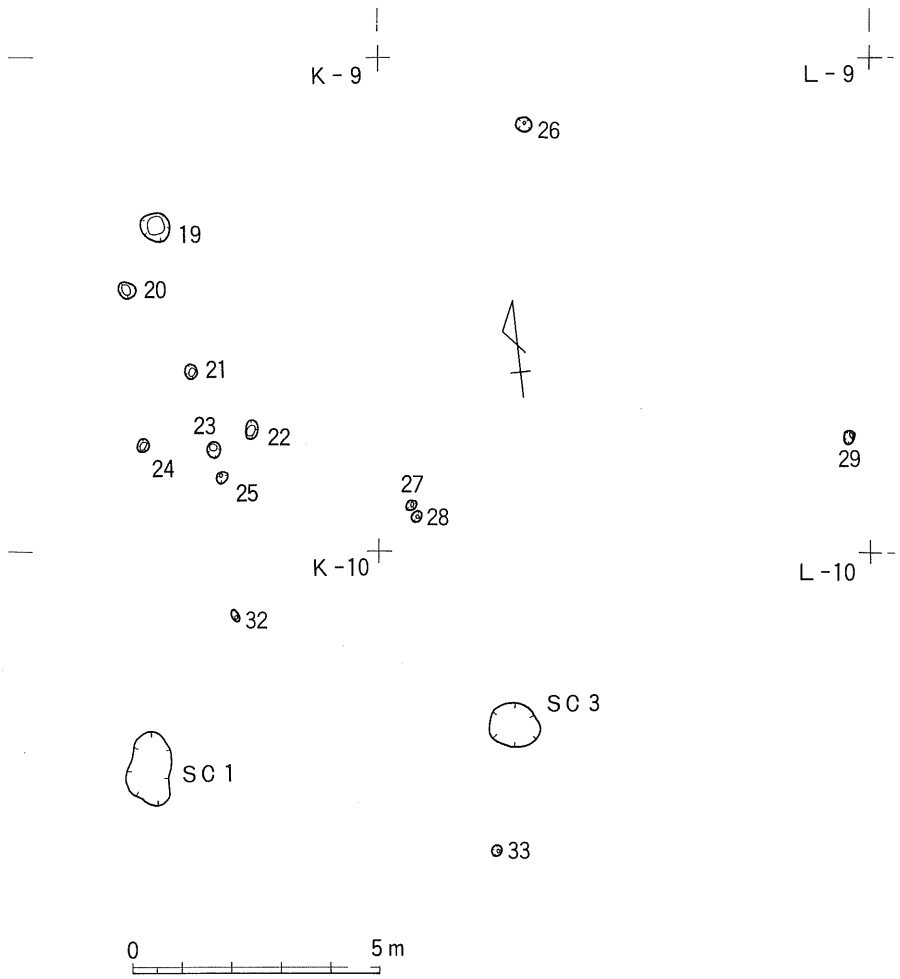
番号	区	埋土	平面形	径	深さ
1	K-4	V層	円形	直径26cm	11.5cm
2	K-4	V層	楕円形	長径36cm, 短径28cm	19cm
3	K-5	V層	円形	直径30cm	6cm
4	M-5	V層	隅丸方形	40cm×36cm	8.5cm
5	M-5	V層	楕円形	長径62cm, 短径42cm	4cm
6	M-5-6	IV層	隅丸方形	138cm×100cm	27cm
7	K-6	V層	円形	直径28cm	8cm
8	K-6	V層	円形	直径24cm	10cm
9	K-6	V層	円形	直径25cm	11.5cm
10	L-6	V層	楕円形	長径?, 短径40cm	10cm
11	K-7	V層	円形	直径26cm	18cm
12	K-7	V層	不整形	44cm×18cm	3cm
13	K-7	V層	円形	直径34cm	38cm
14	J-7	V層	円形	直径40cm	38cm
15	J-7	V層	円形	直径30cm	32cm
16	K-8	V層	円形	直径22cm	11.2cm
17	K-8	V層	楕円形	長径32cm, 短径18cm	8.4cm
18	K-8	IV層	楕円形	長径42cm, 短径32cm	14.8cm
19	K-9	IV層	円形	直径60cm	12.5cm
20	K-9	V層	円形	直径34cm	8.5cm
21	K-9	V層	円形	直径24cm	14.5cm
22	K-9	V層	楕円形	長径35cm, 短径24cm	8cm
23	K-9	V層	円形	直径28cm	11cm
24	K-9	V層	円形	直径26cm	12cm
25	K-9	V層	円形	直径24cm	16.5cm
26	L-9	V層	円形	直径28cm	12.5cm
27	L-9	V層	円形	直径18cm	16.5cm
28	L-9	V層	円形	直径20cm	36.5cm
29	L-9	V層	楕円形	長径30cm, 短径22cm	16cm
30	N-9	IV層	隅丸方形	38cm×32cm	18cm
31	N-9	IV層	楕円形	長径?, 短径36cm	32cm
32	K-10	V層	楕円形	長径26cm, 短径13cm	8.5cm
33	L-10	V層	円形	直径22cm	16.5cm
34	L-10	V層	楕円形	長径40cm, 短径30cm	10.5cm
35	I-11	V層	円形	直径30cm	5cm
36	I-10	V層	楕円形	長径25cm, 短径18cm	8cm
37	I-10	V層	円形	直径30cm	10cm
38	I-10	V層	楕円形	長径30cm, 短径16cm	11cm
39	I-10	V層	円形	直径20cm	4cm
40	J-10	V層	円形	直径32cm	10cm
41	I-11	V層	円形	直径28cm	5cm
42	J-11	V層	円形	直径22cm	5cm
43	J-11	V層	円形	直径24cm	10cm
44	L-11	V層	円形	直径28cm	12cm
45	L-11	V層	楕円形	長径70cm, 短径40cm	10.5cm
46	K-12	V層	円形	直径28cm	9.5cm
47	K-12	V層	円形	直径25cm	12.5cm

(3) その他

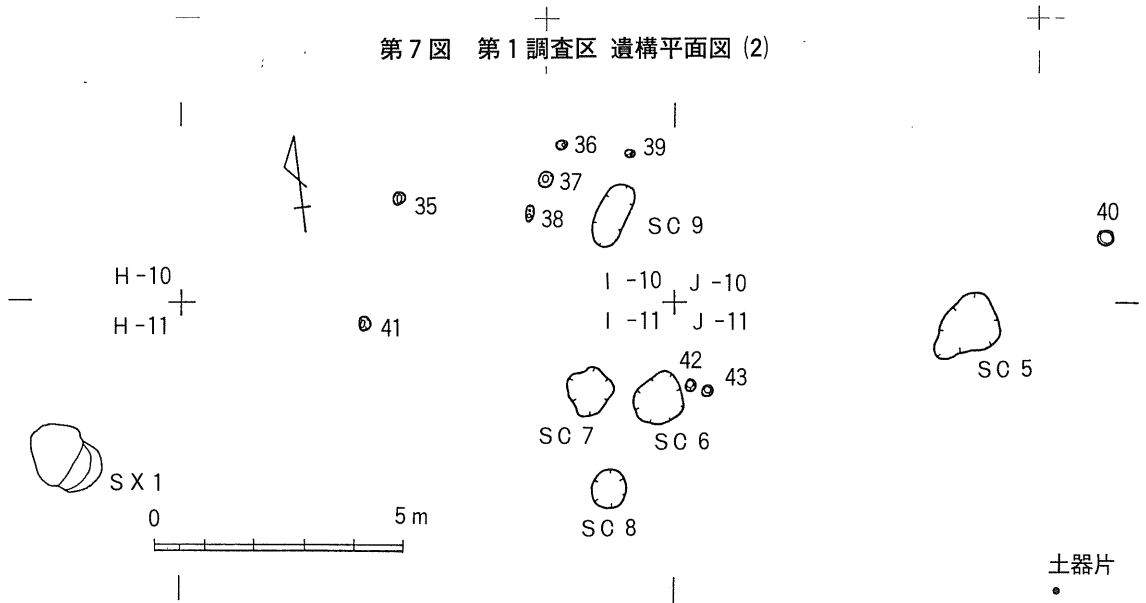
人為によるものとは認められないが、H-11区において、地層の横転現象のみられる箇所があった。SX 1としたものがそれである（第9図）。長径1.6m，短径1.25mの略楕円形の範囲で黒色土（V層）が黄色の御池降下軽石層（VI層）を挟みこんで立ち上がったような状態になっている。倒木痕の可能性はある。



第6図 第1調査区（J・K・L-6・7・8区）遺構平面図（1）

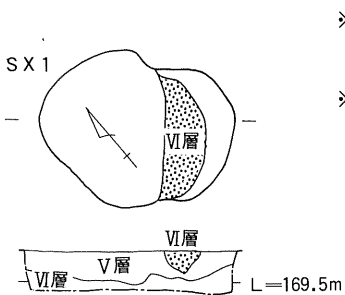
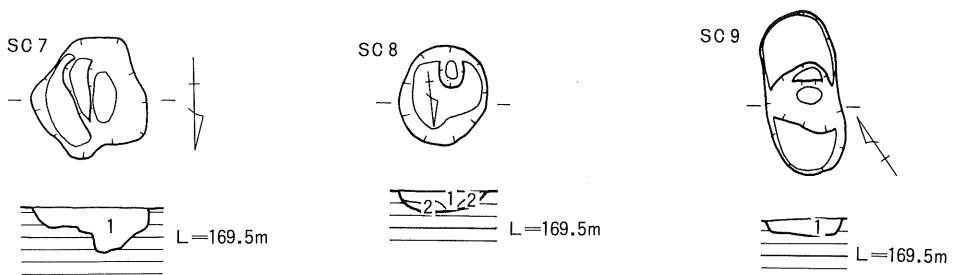
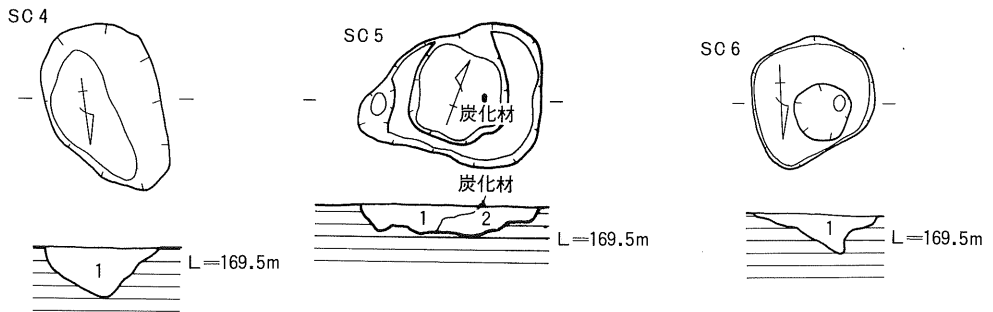
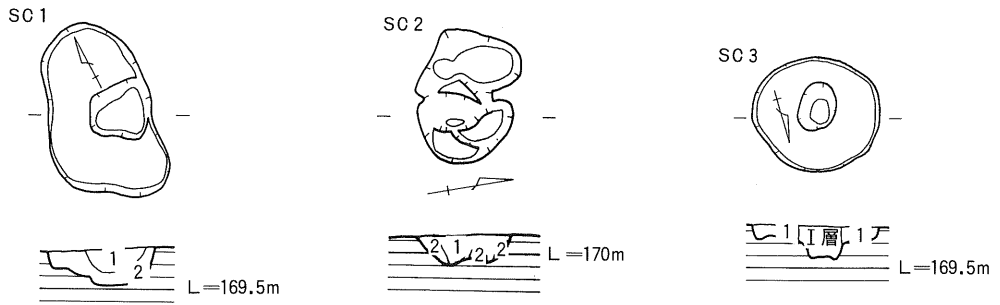


第7図 第1調査区 遺構平面図(2)



※SCは土坑、SXは地層横転、数字はピット番号。
●は第11図10の土器出土地点

第8図 第1調査区 遺構平面図(3)



※遺構内堆積土
 1：黒色粘質シルト（黄色パミス含む）
 2：黒色粘質シルト（黄色パミス多く含む）
 ※なおオーマ数字は基本層序番号に対応する。



第9図 第1調査区 遺構実測図

4. 遺物

遺物はすべて第1調査区から出土したものである。

(1) 土器

1～9は同一個体と考えられる。K-8区のV層中において、小破片が集中して見つかった。図上で破片をつなげて復元すると、直線的に胴部が外傾し、口縁部が直立する浅鉢形の器形が推定され、器壁は薄く、器面は内外ともによく研磨されている。口縁部には2条の凹線がめぐる。11は上半部を欠くが、外面にススが付着しており、深鉢形土器と推定される。1～9の浅鉢形土器と同一地点の同じ層から出土しており、両者は同時期のセットを成すものと考えられる。10と12も深鉢形土器の胴部破片であろう。1～12は縄文時代後期後葉に位置づけられる。

13は外面が板状の工具によってナデられており、焼き上がりも堅緻な印象を受ける。文様等の特徴がつかめないため、時間的位置づけについては苦慮するが、胎土・色調等は都城盆地における弥生時代の土器に最もよく似ている。

(2) 石器

14は、L-5区のV層から出土したカクセン石安山岩を利用した石器である。両端を折損しており、全体形は判然としないが、実測図下の側縁部に加工痕ないし使用痕と思われる剥離がみられる。刃部の形状から石鎌などの機能が推定できる。現存の横の長さ^{註7}が10cm、幅が7cm、厚さが2cmである。なお重量は186gである。これ以外に同地区の同層中からは、砂岩製の剥片が一点見つかった。

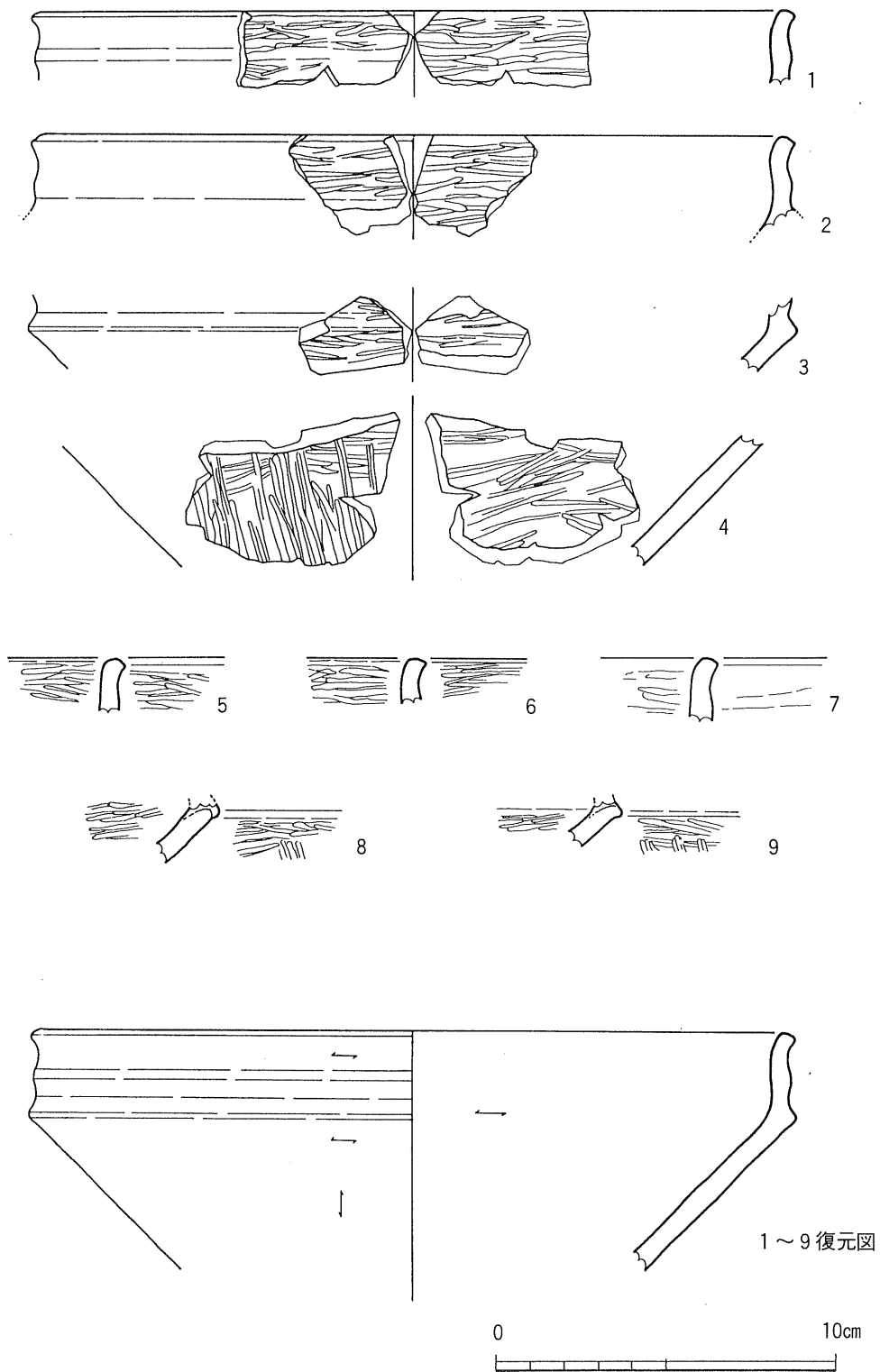
第2表 第1調査区出土土器観察表

番号	出土地点	層	器種	色調	胎土	調整	備考
1	K-8	V層	浅鉢形	外=赤橙色・橙色 内=橙色・灰オリーブ色	チャウ石	外=ヨコ方向のミガキ 内=ヨコ方向のミガキ	1～9は同一個体 No15
2	K-8	V層	浅鉢形	外=にぶい橙色 内=暗褐色	セキエイ チャウ石	外=ヨコ方向のミガキ 内=ヨコ方向のミガキ	No12
3	K-8	V層	浅鉢形	外=暗褐色 内=黒色	チャウ石	外=ヨコ方向のミガキ 内=ヨコ方向のミガキ	
4	K-8	V層	浅鉢形	外=褐色 内=暗褐色	チャウ石	外=上半はヨコ方向のミガキ 下半はタテ方向のミガキ 内=ヨコ・ナナム方向のミガキ	No9・10
5	K-8	V層	浅鉢形	外=暗褐色 内=黒色	チャウ石	外=ヨコ方向のミガキ 内=ヨコ方向のミガキ	No12
6	K-8	V層	浅鉢形	外=暗褐色 内=黒色	チャウ石	外=ヨコ方向のミガキ 内=ヨコ方向のミガキ	No6
7	K-8	V層	浅鉢形	外=褐色 内=褐色	チャウ石	外=剥落している 内=ヨコ方向のミガキ	No9
8	K-8	V層	浅鉢形	外=褐色 内=暗褐色	チャウ石	外=上半はヨコ方向のミガキ 下半はタテ方向のミガキ 内=ヨコ方向のミガキ	
9	K-8	V層	浅鉢形	外=暗褐色 内=黒色	チャウ石	外=上半はヨコ方向のミガキ 下半はタテ方向のミガキ 内=ヨコ方向のミガキ	
10	J-11	V層	深鉢形?	外=淡橙色 内=橙色	カクセン石 チャウ石	外=ていねいなナデ 内=ナデ	No21
11	K-8	V層	深鉢形	外=褐色 内=褐灰色	チャウ石	外=上半はヨコ方向のていねいなナデ 下半はタテ方向のミガキ 内=ナデ	外面にスス付着 No7・17
12	O-11	V層	深鉢形?	外=橙色 内=灰色	カクセン石 チャウ石	外=ナデ 内=ナデ	No24
13	L-5	IV層	甕形?	外=淡褐色 内=浅黄色	セキエイ チャウ石	外=板状工具によるタテ方向のナデ 内=ナデ	

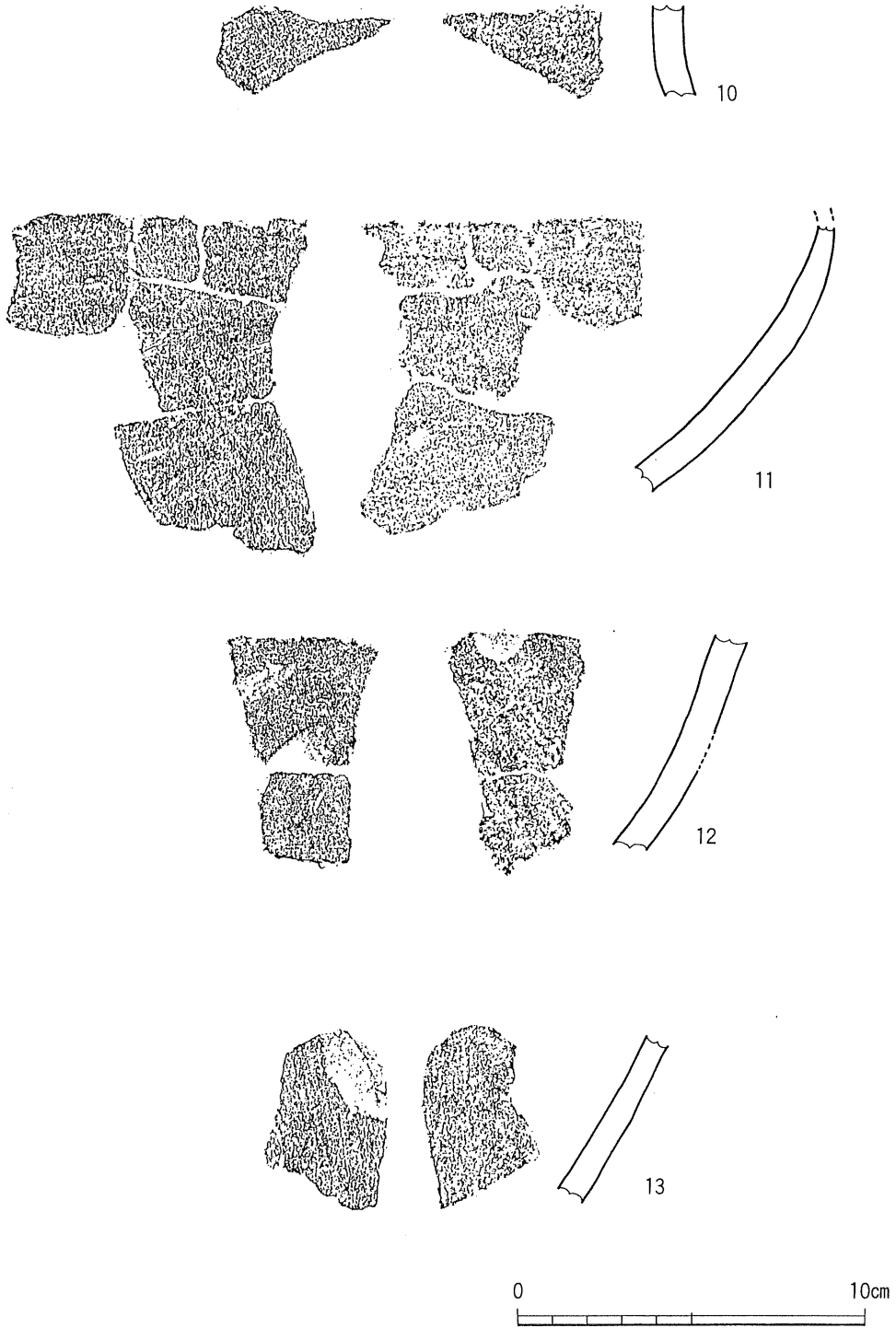
※胎土には肉眼で観察できた特徴的な鉱物をあげた。

色調・調整は外面と内面に分けて記載した。

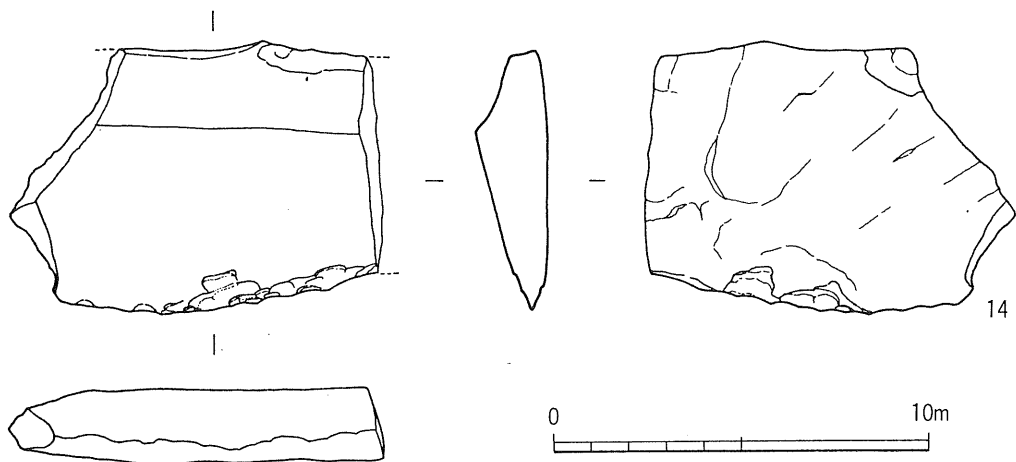
備考欄の番号は調査時の遺物取り上げ番号。



第10図 第1調査区 遺物実測図(1)



第11図 第1調査区 遺物実測図(2)



第12図 第1調査区 遺物実測図(3)

第4章 まとめ

1. 土器について

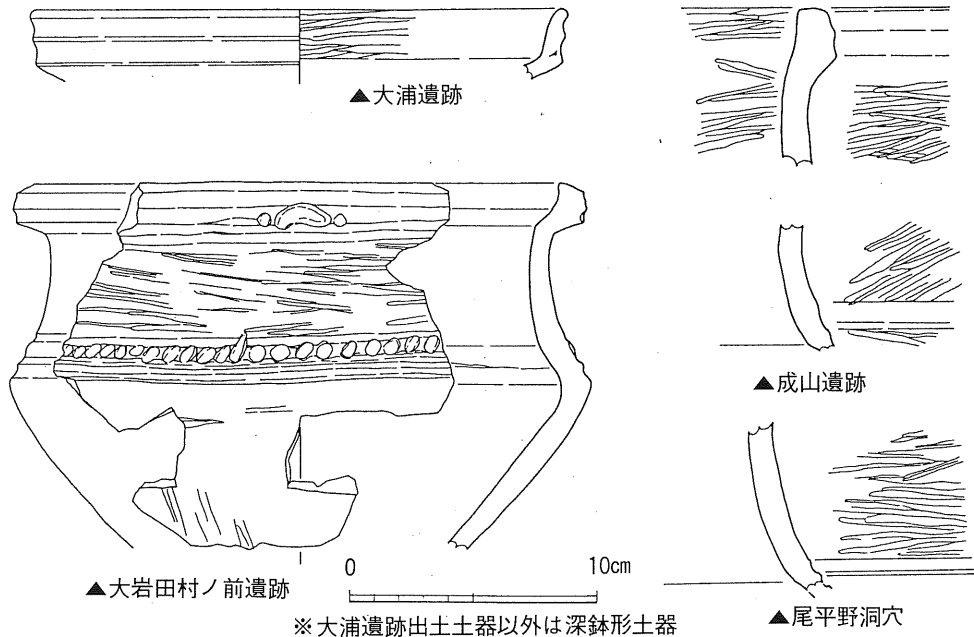
第1調査区のV層から出土した土器の中で、同一個体と判断される1～9は、図上で浅鉢形土器に復元することができたが、口縁部の断面形とその外面に施された凹線文などの特徴から三万田式土器^{註8}に該当する。また、同一地点から出土した11は、煮沸容器の深鉢形土器と推定され、前者の浅鉢形土器とセットと考えられる。さて、三万田式土器の分類と編年については諸説があるが、後期から晩期をつなぐ、黒色磨研土器様式に属し、縄文時代後期後葉に位置づけられるという見方は大方の一致するところであろう。黒色磨研土器様式の浅鉢形土器^{註10}については広域に同タイプのもので分布する様相が認められるが、深鉢形土器は地域ごとに変化がみられるようである。三万田式土器期でも、東南部九州（宮崎県南部・鹿児島県東部）の有文深鉢形土器は、西北部・中部九州のものとは異なっていることが、近年の資料の蓄積で明らかとなってきている。（→第13図）

2. 遺跡の立地と性格について

植物珪酸体の分析結果によれば、V層堆積時・縄文時代後期後葉の当該地の植生はススキ属などが繁茂しており、比較的開かれた環境であったことが判明している（附篇参照）。

本遺跡の立地については、第2章で述べたように、水の得にくい台地の内陸部に位置している。それにもかかわらず、V層からは土器の出土がみられ、中には人為的なものと判定しがいのあるものがあるが、当該期の土坑やピットなどの遺構が確認された。竪穴住居跡が見つからないために、居住空間的な様相は認められないが、ここでなんらかの営みが行われたことは明らかである。同じくV層から出土した石鎌状の石器（14）が、土壤中に残されていたススキ属を刈り取るために用いられたのか、あるいは栽培植物を刈り取るためのものかは判然としないが、ともかく、当該期に生活領域として台地の内陸部が利用されていた点は注目すべきであろう。なお、IV層（黒色粘質シルト層）の中位から下位にかけては、イネの植物珪酸体が検出さ

れており、稲作（陸稲）が行われていた可能性が指摘されている（附篇参照）。IV層は都城盆地において、おおむね奈良時代から室町時代の包含層に比定されており、V層堆積時の縄文時代後期後葉と同様に、台地の中央部の土地利用が進んだものと考えられる。これは、農耕^{註11}という食糧生産手段の獲得によるものであろう。

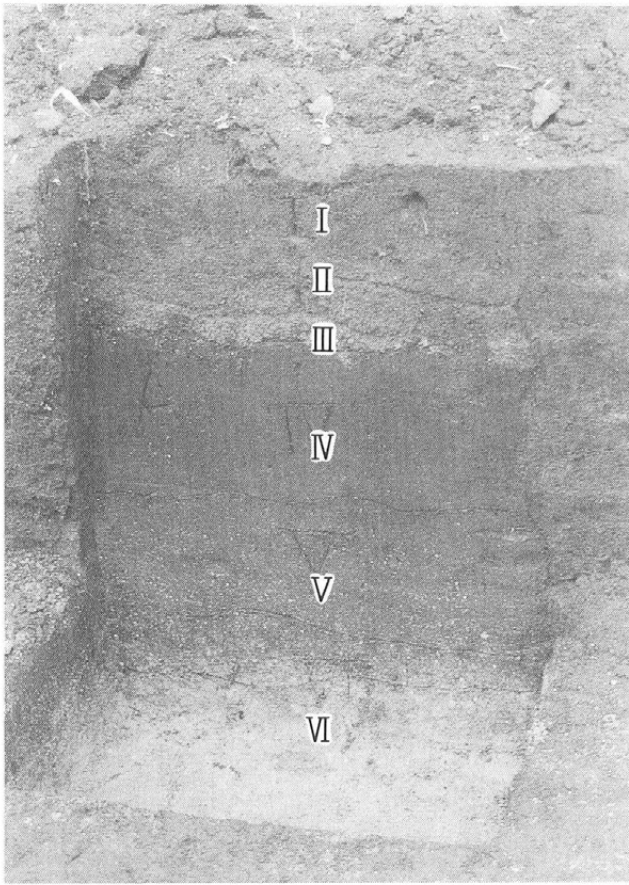


第13図 都城市内出土の三万田式期の土器

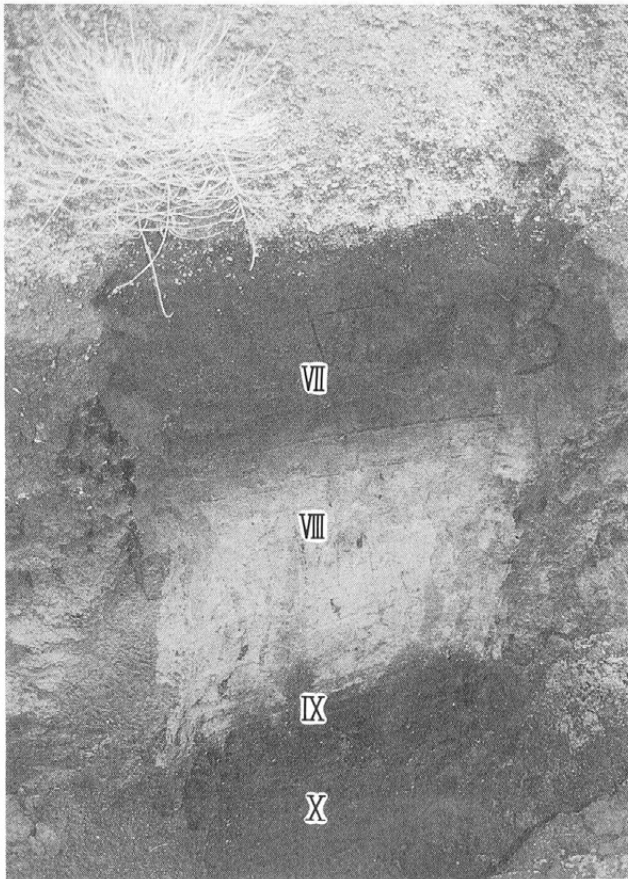
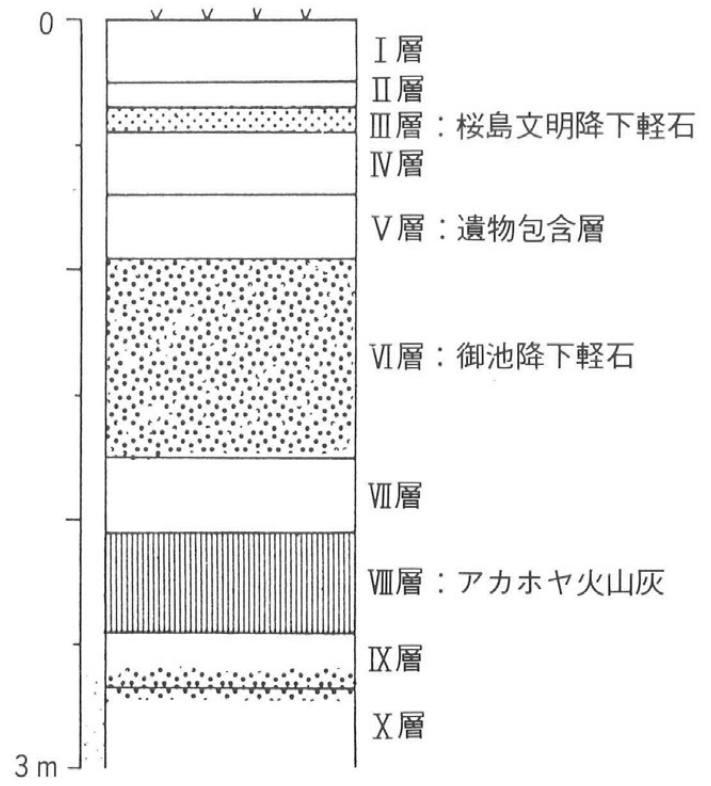
註

- 註1. 矢部喜多夫編 1986 『都城市遺跡詳細分布調査報告書（市内中央部）』都城市文化財調査報告書第5集 都城市教育委員会
- 註2. 福山博之 1978 「桜島火山の地質」『地質学雑誌』84
- 註3. 重永卓爾 1991 「桜島に起源を有する文明Tephraの年次について」『大岩田村ノ前遺跡発掘調査報告書』都城市文化財調査報告書第14集 都城市教育委員会
- 註4. 桑野幸夫・郷原保真・松井建 1959 「大隅半島の地質」『資源研彙報』49
- 註5. 町田洋 1977 『火山灰は語る』蒼樹書房
町田洋・新井房夫 1978 「南九州鬼界カルデラから噴出した広域テフラーアカホヤ火山灰ー」『第4紀研究』17
- 註6. 新東晃一 1986 「周辺科学との関連」『鹿児島考古』第20号
- 註7. 高木正文 1980 「九州縄文時代の収穫用石器ー打製石庖丁と打製石鎌についてー」『鏡山猛先生古稀記念 古文化論攷』
- 註8. 小林久雄 1939 「九州の縄文土器」『人類学・先史学講座』11
- 註9. 富田敏一、宮内克己、沢下孝信らの研究がある。
- 註10. 島津義昭 1989 「黒色磨研土器様式」『縄文土器大観』4 小学館
- 註11. 同じような現象は、鹿児島県の十三塚原台地でも指摘されている。そこでは旧石器時代から縄文時代にかけては、水の得やすい台地の縁辺部に遺跡が立地し、弥生時代から歴史時代にかけては生活領域が縁辺部はもとより、台地全体へひろがるという傾向が看取されている。（河口貞徳 1980 「総括」『石峰遺跡』『鹿児島県埋蔵文化財調査報告書』12）

版 图



▲ A 地点土層断面



▲ B 地点土層断面

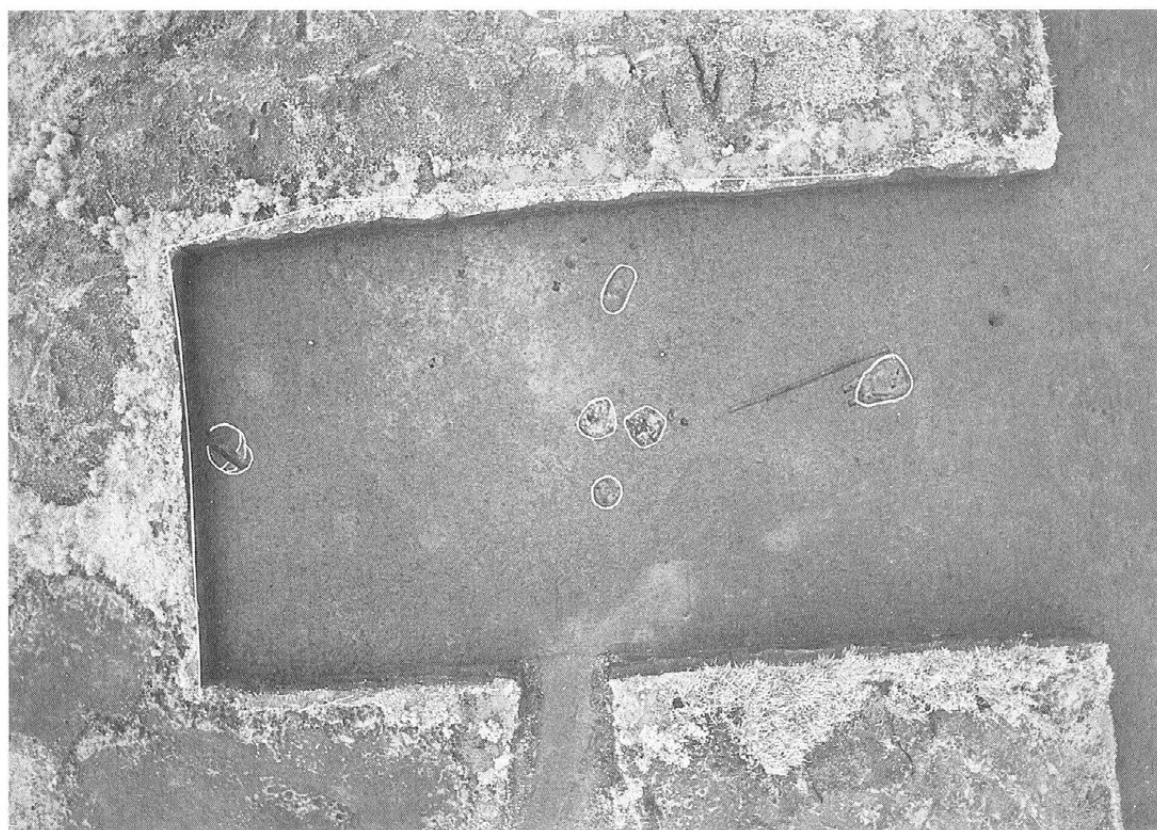


▲ 植物珪酸体分析のための土壌採集状況
B 地点 西より 人物は杉山氏

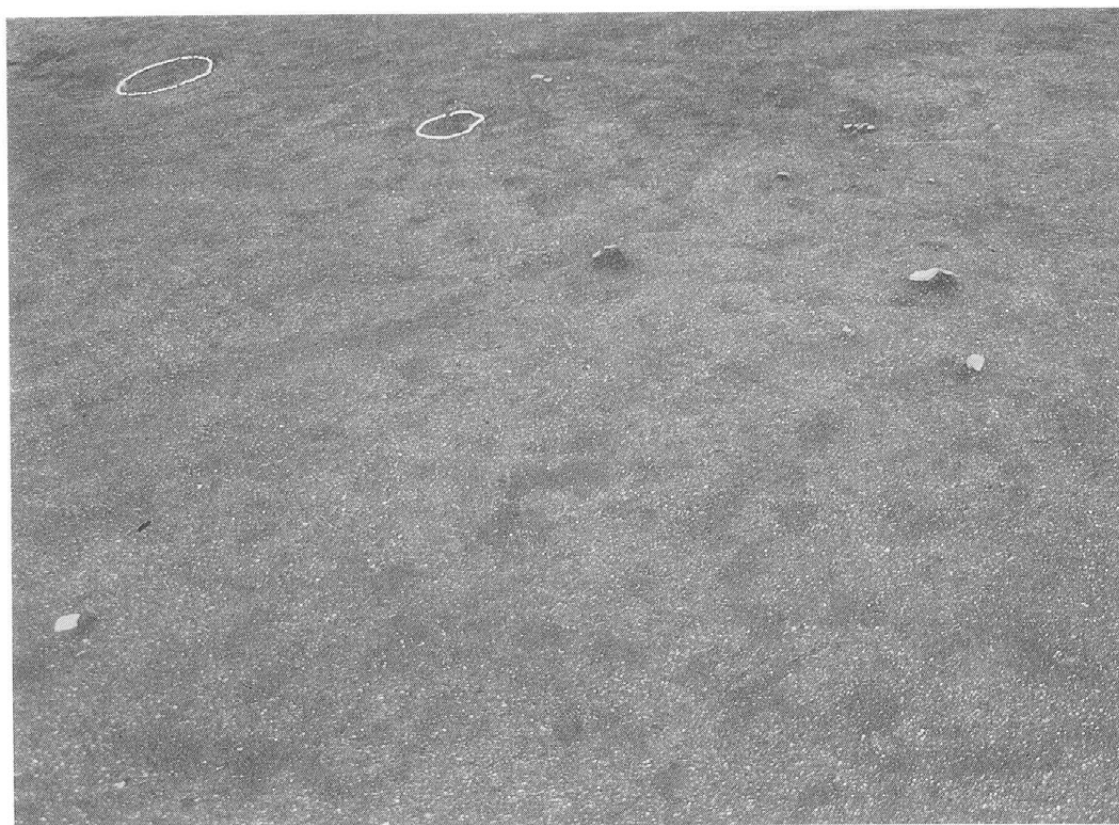
土層断面写真および模式図



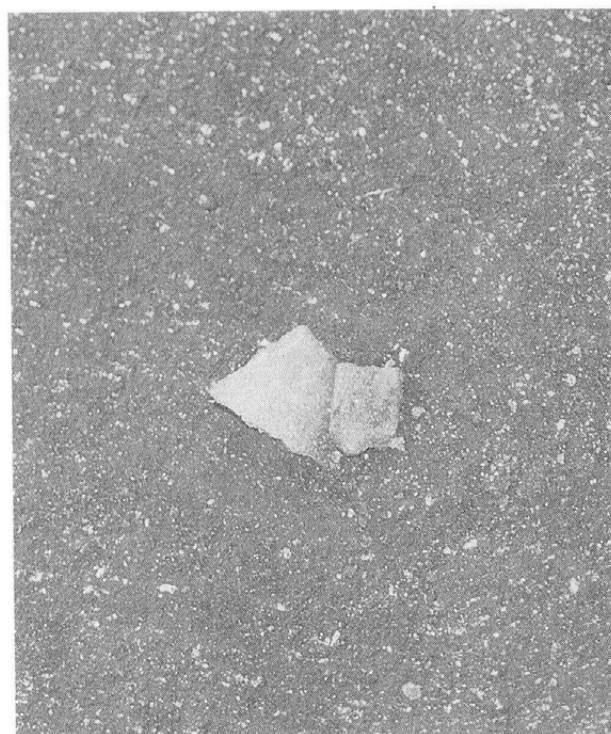
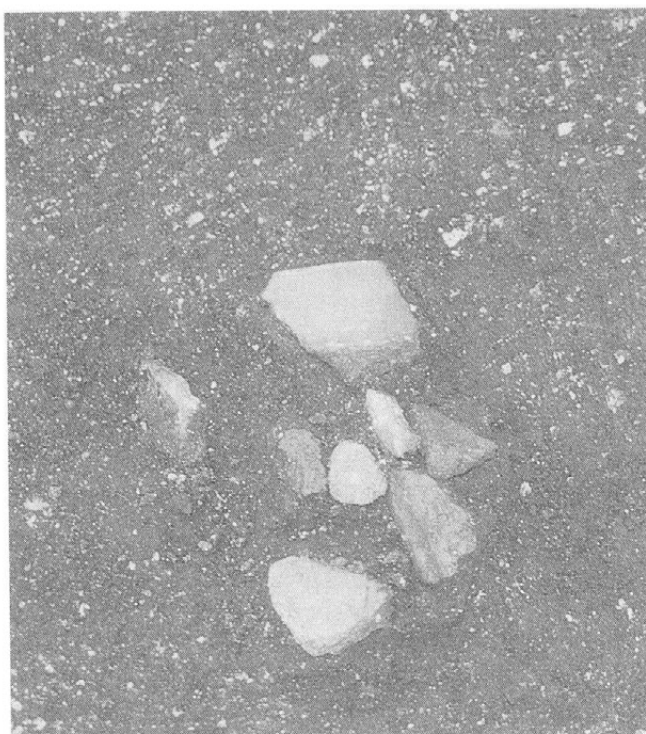
(1) 遺跡全景 (北東上空から)



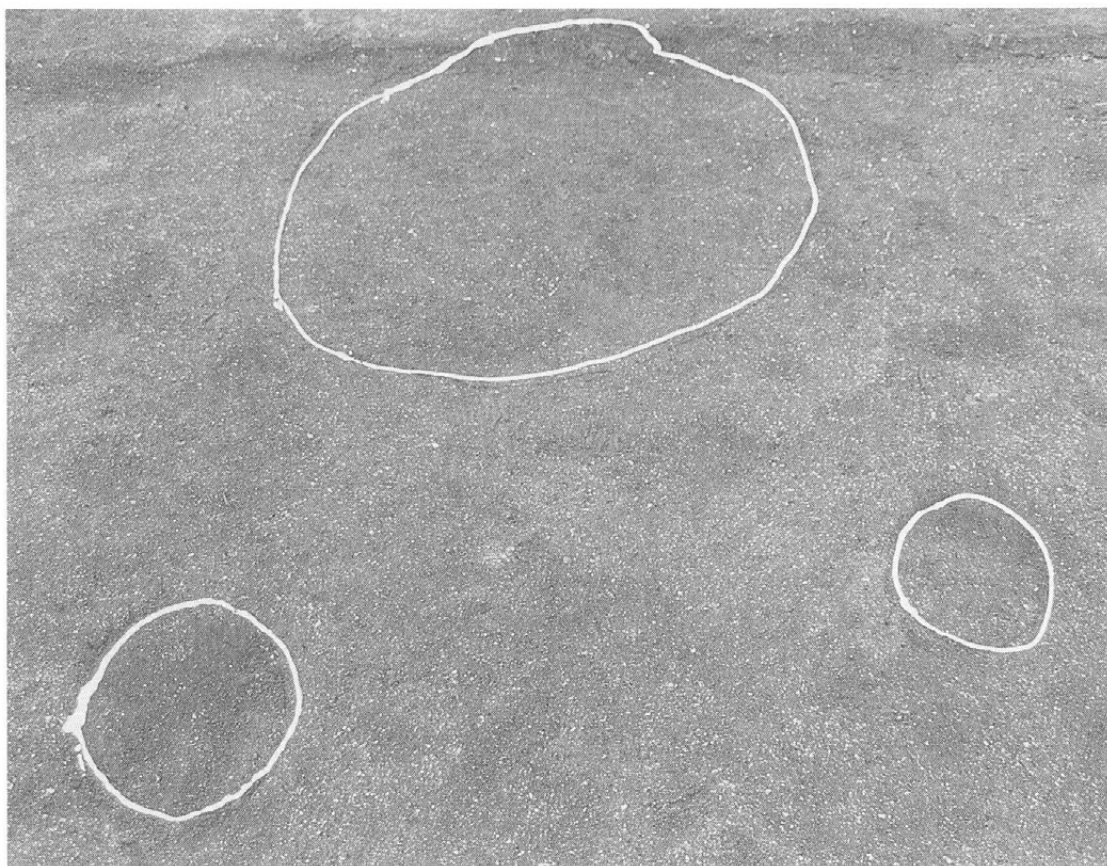
(2) 第1調査区(H・I・J -10・11区) 遺構完掘状況



(1) 第1調査区(K-8区)遺物出土状況(北から)



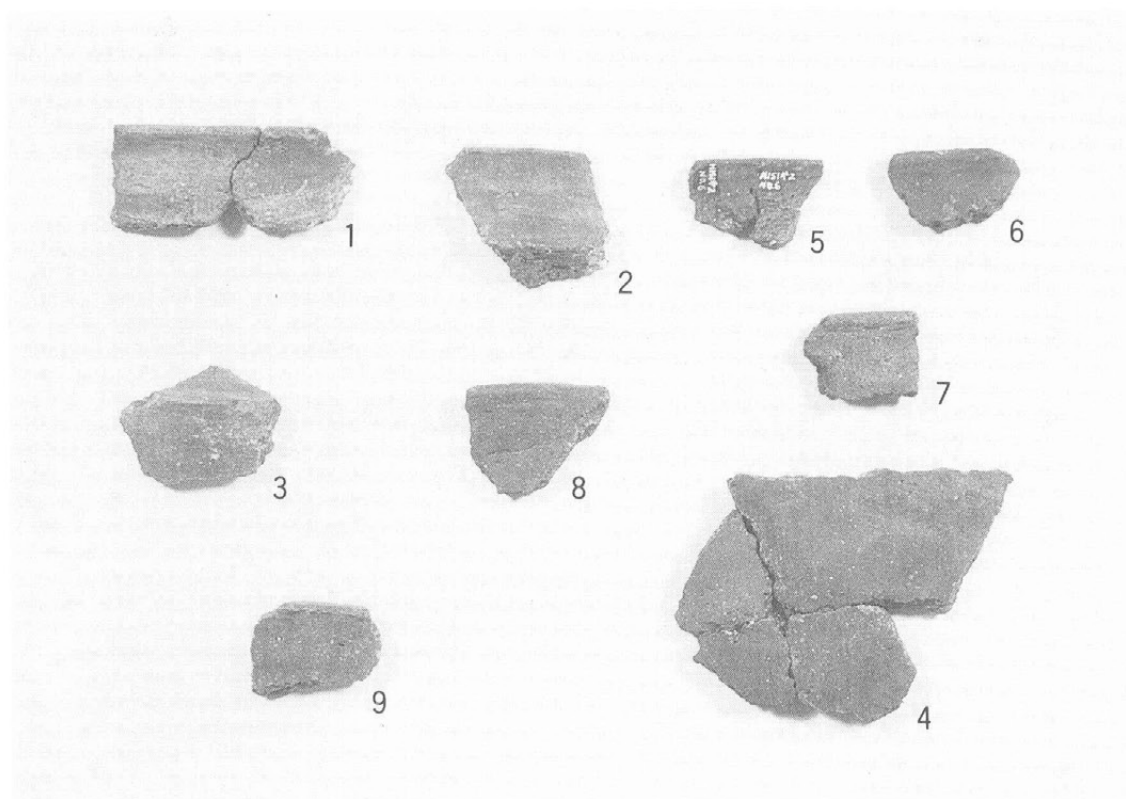
(2) 第1調査区(K-8区)浅鉢形土器出土状況



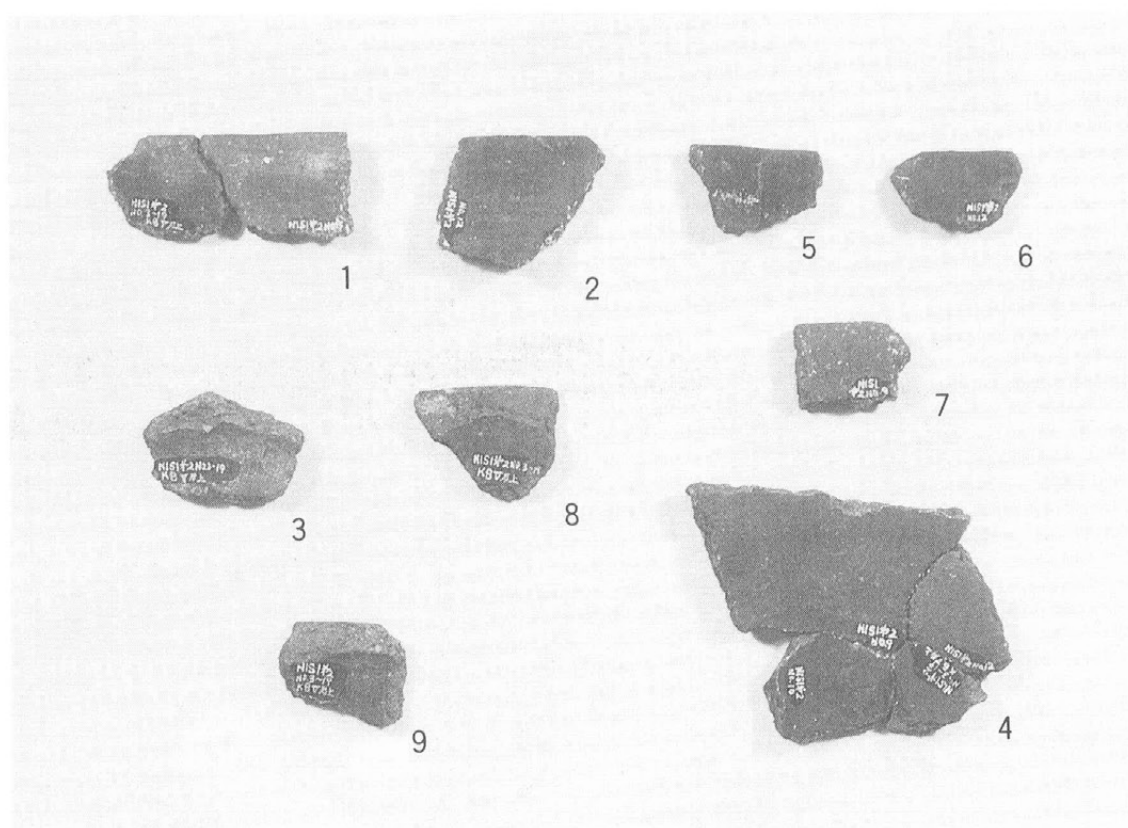
(1) 土坑SC2 上面確認状況 (西から)



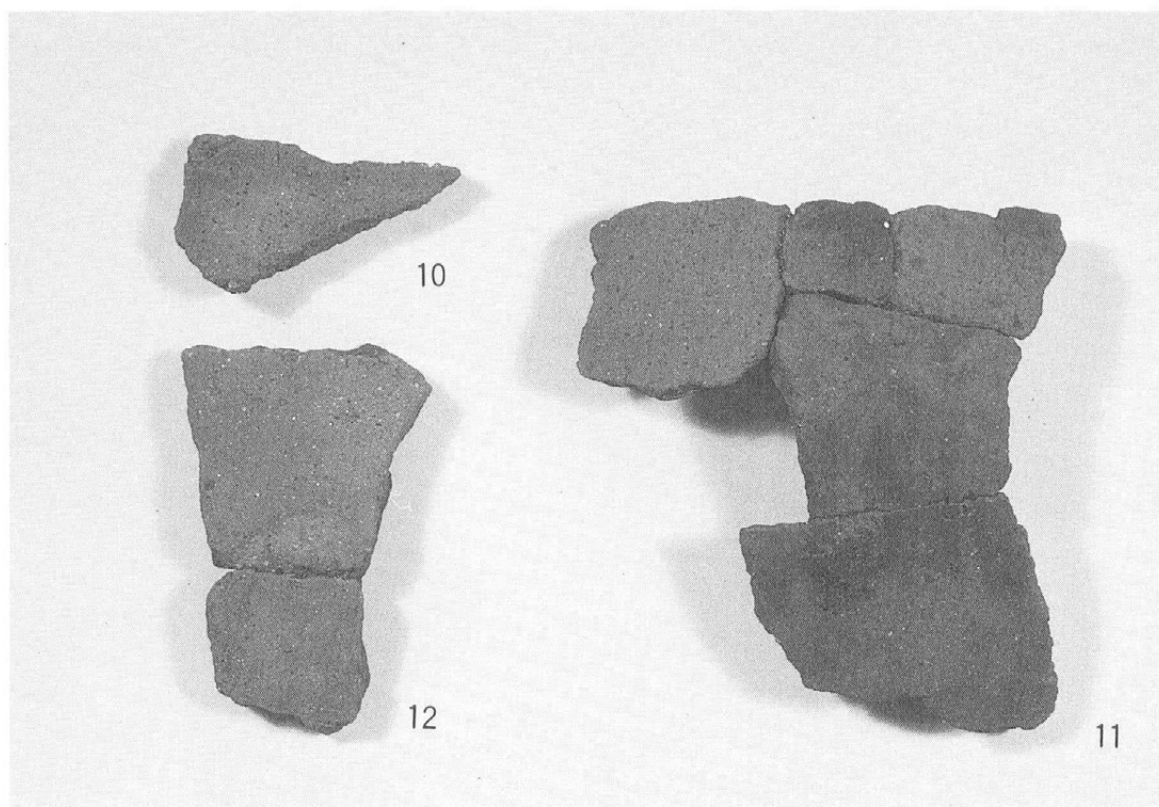
(2) 土坑SC2 完掘状況 (西から)



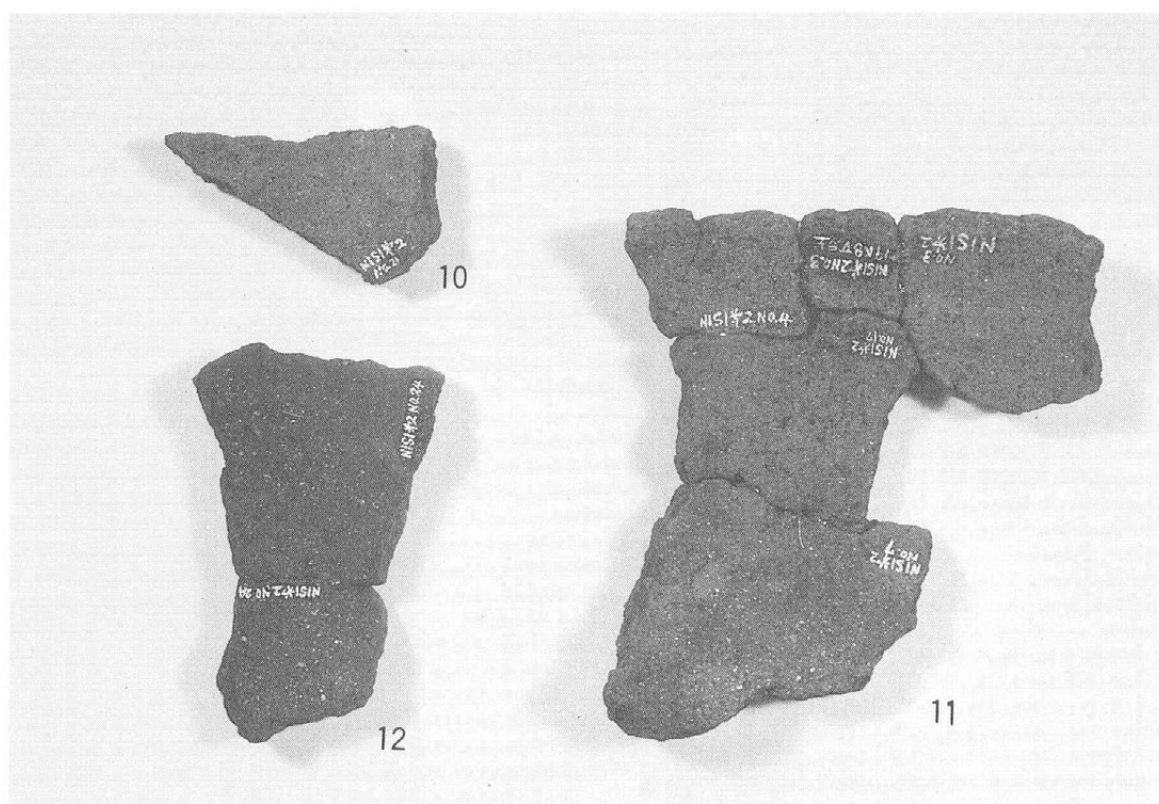
(1) 浅鉢形土器(1~9)外面



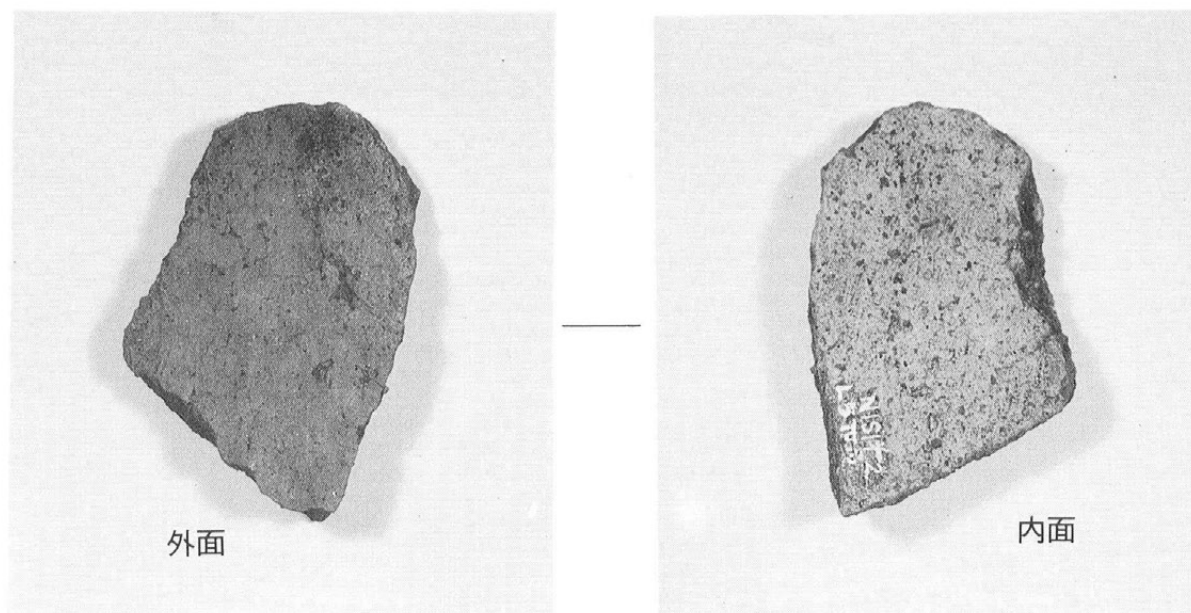
(2) 浅鉢形土器(1~9)内面



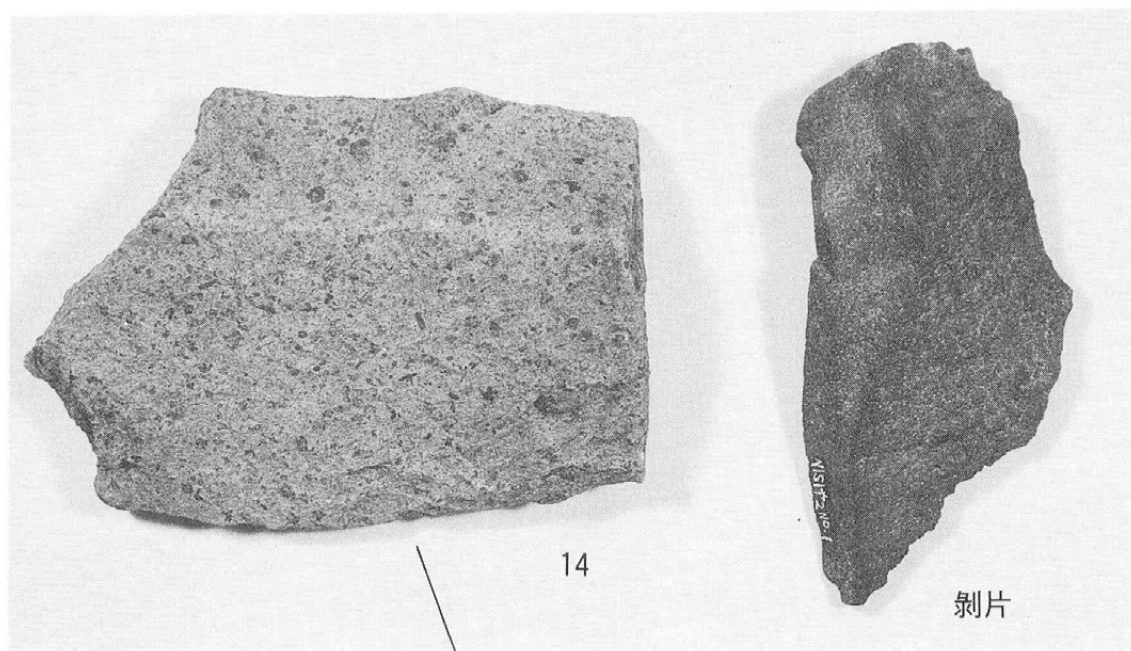
(1) 深鉢形土器(10~12)外面



(2) 深鉢形土器(10~12)内面



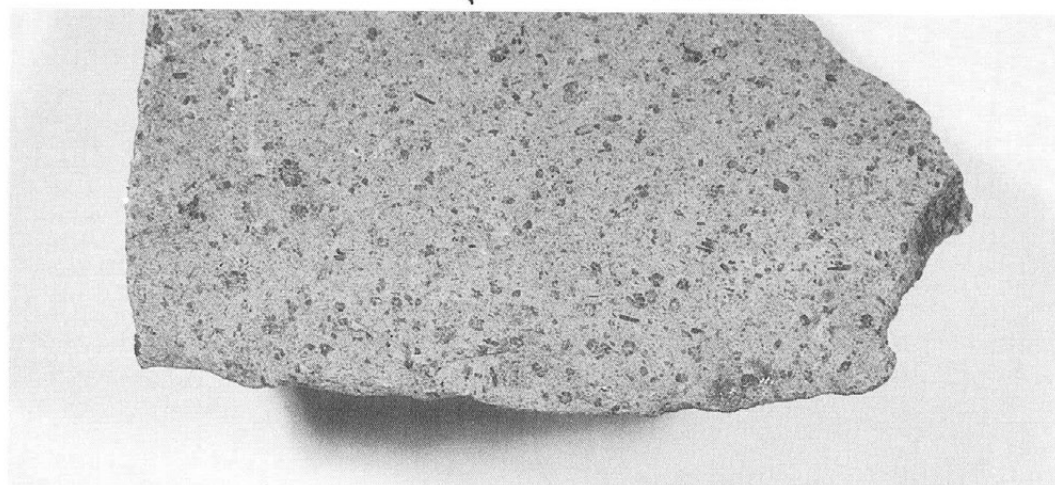
(1) 土器(13)



14

剥片

刃部拡大



(2) 石器(14)および剥片

附 篇

西原第2遺跡における植物珪酸体分析調査報告

古 環 境 研 究 所

西原第2遺跡における植物珪酸体分析調査報告

1. はじめに

この調査は、植物珪酸体分析を用いて、西原第2遺跡におけるイネ科栽培植物の検討、および古植生と古環境の推定を試みたものである。

2. 試料

1991年5月30日に現地調査を行った。調査地点は、A地点とB地点の2地点である。調査区の土層はI層～X層に分層された。このうち、III層は桜島-文明軽石(Sz-III)、VI層は霧島-御池軽石(Kr-M)、VIII層は鬼界アカホヤ火山灰(K-Ah)であり、各テフラの下層などには黒色土壌(黒ボク土)が形成されている。試料は、これらの黒色土壌を中心に、各層ごとにおよそ10cmで採取した。試料数は計9点である。

3. 分析法

植物珪酸体の抽出と定量は、「プラント・オパール定量分析法(藤原, 1976)」をもとに、次の手順で行った。

- (1) 試料土の絶乾(105℃・24時間)
- (2) 試料土約1gを秤量, ガラスビーズ添加(直径約40 μ m, 約0.02g)
※電子分析天秤により1万分の1gの精度で秤量
- (3) 電気炉灰化法による脱有機物処理
- (4) 超音波による分散(300w・42KHz・10分間)
- (5) 沈底法による微粒子(20 μ m以下)除去, 乾燥
- (6) 封入剤(オイキット)中に分散, プレパラート作成
- (7) 検鏡・計数

同定は、機動細胞珪酸体由来する植物珪酸体をおもな対象とし、400倍の偏光顕微鏡下で行った。計数は、ガラスビーズ個数が400以上になるまで行った。これはほぼプレパラート1枚分の精査に相当する。試料1gあたりのガラスビーズ個数に、計数された植物珪酸体とガラスビーズ個数の比率をかけて、試料1g中の植物珪酸体個数を求めた。

また、この値に試料の仮比重(1.0と仮定)と各植物の換算係数(機動細胞珪酸体1個あたりの植物体乾重, 単位: 10^{-5} g)をかけて、単位面積で層厚1cmあたりの植物体生産量を算出した。換算係数は、イネは赤米, ウシクサ族はススキの値を用いた。その値は、それぞれ2.94(種実重は1.03), 1.24である(杉山・藤原, 1987)。タケ亜科については数種の平均値を用いて葉身重を算出した。ネザサ節は0.24, クマザサ属(ミヤコザサ節以外)は0.22である(杉山, 1987)。

4. 分析結果

分析試料から検出された植物珪酸体の分類群は次のとおりである。イネ, ウシクサ族(スス

キ属やチガヤ属などが含まれる), タケ亜科のA1aタイプ (ネザサ節など), B1タイプ (クマザサ属など), B1'タイプ (クマザサ属?), その他, 給源不明のAタイプ (キビ族類似), Bタイプ (ウシクサ族類似), Cタイプ (ウシクサ族類似, 大型), Dタイプ (くさび型), 表皮毛起源, 茎部起源, 地下茎部起源, 棒状珪酸体, その他 (未分類) である。なお, タケ亜科の細分は杉山 (1987) によった。また, 樹木起源の植物珪酸体は全試料を通してまったく検出されなかった。巻末に各分類群の顕微鏡写真を示す。以上の分類群について定量を行い, その結果を表1, 表2および図1に示した。

5. 考察

(1) イネ科栽培植物の検討

植物珪酸体分析で同定される分類群うち, 栽培植物が含まれるものには, イネをはじめ, キビ族 (ヒエなどが含まれる) やムギ類, ジュズダマ属 (ハトムギが含まれる) などがある。このうち, 本遺跡で検出されたのはイネのみである。

イネは, A地点のIV層中位~下位で検出された。植物珪酸体密度は700個/gと低い値であるが, IV層上位ではまったく検出されないことから, 上層から後代のものが混入した危険性は考えにくい。したがって, IV層中位~下位の時期に同地点もしくはその周辺で稲作が行われていた可能性が考えられる。

なお, イネ科栽培植物の中には未検討のものもあるため, 不明としたものの中にも栽培種に由来するものが含まれている可能性が考えられる。これらの分類群の給源植物の究明については今後の課題としたい。

(2) 古植生および古環境の推定

桜島-文明軽石 (Sz-III) 直下のIV層から鬼界アカホヤ火山灰 (K-Ah) 下層のX層までのうち, テフラ層を除くIV層, V層, VII層, IX, X層について分析を行った。これらは, いずれも有機質の黒色土壌 (黒ボク土) である。以下に, 各層における植物珪酸体の検出状況, およびその結果から推定される古植生および古環境について述べる。

最下位のX層では, タケ亜科B1タイプ (クマザサ属など) や棒状珪酸体が比較的高い密度で検出され, ウシクサ族 (ススキ属など) も見られた。このことから, 同層の時期はクマザサ属を主体とし, ススキ属なども見られるイネ科植生が継続されていたものと推定される。

その後, 鬼界アカホヤ火山灰 (K-Ah) 直下のIX層ではタケ亜科B1タイプは減少し, かわってタケ亜科A1aタイプ (ネザサ節など) の増加傾向が認められた。ネザサ節はクマザサ属よりも比較的温暖なところに生育していることから, この時期に寒冷から温暖への気候変化があった可能性が考えられる。

霧島-御池軽石 (Kr-M) 直下のVII層では, タケ亜科A1aタイプ (ネザサ節など) やタケ亜科 (その他), 棒状珪酸体などが非常に高い密度で検出された。また, ウシクサ族や不明Bタイプ (ウシクサ族類似) など比較的高い密度で検出された。ウシクサ族にはススキ属やチガヤ属, サトウキビ属などが含まれるが, 植物珪酸体の形状からここで検出されたものは, その

ほとんどがススキ属に由来するものと考えられる。また、不明Bタイプとしたものの中にもススキ属が含まれている可能性があり、棒状珪酸体もその大半がススキ属の結合組織細胞に由来するものと考えられる。

これらのことから、同層の時期はネザサ節やススキ属を主体とするイネ科植生が継続されたものと推定される。なお、これらの分類群は林床では生育しにくいことから、当時の遺跡周辺は森林で覆われたような状況ではなく、これらの植物が生育するような比較的開かれた環境であったものと推定される。

霧島-御池軽石直上のV層（縄文時代後期の遺物包含層）では、タケ亜科は著しく減少しており、ほとんど見られない。これに対してウシクサ族（ススキ属など）はⅦ層と同様に比較的高い密度で検出された。霧島-御池軽石の堆積によって当時の植生は一時的に壊滅的な打撃を受けたものと考えられるが、ススキ属は比較的短期間で再生し繁茂したものと推定される。

桜島-文明軽石（Sz-Ⅲ）直下のⅣ層では、ウシクサ族（ススキ属など）や不明Bタイプ（ウシクサ族類似）、棒状珪酸体がそれぞれ大幅に増加している。前述のように、これらの分類群はそのほとんどがススキ属に由来するものと考えられる。また、前節で述べたように同層中位～下位ではイネが検出されており、同層最上部ではタケ亜科のAlaタイプ（ネザサ節など）が急激に増加している。これらのことから、同層ではおおむねススキ属などを主体とするイネ科植生が継続されていたものと考えられ、同層最上部ではネザサ節などのタケ亜科も多く見られるようになったものと推定される。なお、これらの分類群は比較的乾いた土壌条件のところ生育していることから、ここで稲作が行われていたとすると、それは畑作（陸稲）によるものと考えられる。

6. まとめ

桜島-文明軽石直下層（Ⅳ層）から鬼界アカホヤ火山灰下層（Ⅹ層）までの黒色土壌（黒ボク土）について分析を行った。

その結果、Ⅳ層中位～下位では稲作（陸稲）の可能性が認められた。また、黒色土壌の有機物の主な給源植物は次表のように推定された。

表3 黒色土壌における有機物の給源植物の推定

層位	主な給源植物	備考
Ⅳ層最上部	ススキ属>ネザサ節	桜島-文明軽石直下
Ⅳ層	ススキ属	
Ⅴ層	ススキ属	縄文時代後期
Ⅶ層	ネザサ節>ススキ属	霧島-御池軽石直下
Ⅸ層	ネザサ節>クマザサ属	鬼界アカホヤ火山灰直下
Ⅹ層	クマザサ属, ススキ属	

以上のように、黒色土壌（黒ボク土）の堆積当時はススキ属やネザサ節、クマザサ属などのイネ科植物が繁茂しており、土壌中に多量の有機物が供給されたものと推定される。

なお、これらの植物はその有用性から燃料や道具、住居の建築材などとして盛んに利用されていたものと考えられる。また、ネザサ節やクマザサ属は、鹿などの草食動物の食料としても重要な位置を占めていたものと考えられる。

参考文献

- 杉山真二. 1987. タケ亜科植物の機動細胞珪酸体. 富士竹類植物園報告, 第31号:70-83.
- 杉山真二・藤原宏志. 1987. 川口市赤山陣屋跡遺跡におけるプラント・オパール分析. 赤山-古環境編一. 川口市遺跡調査会報告, 第10集, 281-298.
- 藤原宏志. 1976. プラント・オパール分析法の基礎的研究(1) -数種イネ科栽培植物の珪酸体標本と定量分析法-. 考古学と自然科学, 9:15-29.
- 藤原宏志. 1979. プラント・オパール分析法の基礎的研究(3) -福岡・板付遺跡(夜臼式)水田および群馬・日高遺跡(弥生時代)水田におけるイネ(*O. sativa* L.)生産総量の推定-. 考古学と自然科学, 12:29-41.
- 藤原宏志・杉山真二. 1984. プラント・オパール分析法の基礎的研究(5) -プラント・オパール分析による水田址の探査-. 考古学と自然科学, 17:73-85.

表1 西原第2遺跡における植物珪酸体分析結果

(単位：×100個/g)

分類群	A 地 点					B 地 点			
	IV-1	IV-2	IV-3	V-1	V-2	VII-1	VII-3	IX-2	X-2
イネ科									
イネ		7	7						
ウシクサ族 (ススキ属など)	431	563	374	219	131	192	188	38	69
タケ亜科									
A1aタイプ (ネザサ節など)	362	66	30	7	20	650	463	218	14
B1タイプ (クマザサ属など)	14	7	30	58	7	96	51	143	363
B1'タイプ (クマザサ属?)					59	30	29	30	27
その他	195	37	90	109	26	480	441	413	144
不明等									
Aタイプ (キビ族類似)	42	37		7	13	30	7		
Bタイプ (ウシクサ族類似)	313	366	224	197	79	325	325	218	185
Cタイプ (Bタイプの大型)	28			7	7	22	14	15	7
Dタイプ (くさび型)		15		7		7			
表皮毛起源	56	44	15	51	20	7	7	23	14
茎部起源	28	15	7	22	7		14		34
地下茎部起源	7								
棒状珪酸体	661	446	254	284	171	834	419	375	377
その他	181	205	120	182	46	229	130	143	219
植物珪酸体総数	2,315	1,806	1,151	1,151	584	3,303	2,505	2,016	1,884

表2 西原第2遺跡におけるおもな植物の推定生産量

(単位：kg/m²・cm)

分類群	A 地 点					B 地 点			
	IV-1	IV-2	IV-3	V-1	V-2	VII-1	VII-3	IX-2	X-2
イネ科									
イネ		0.22	0.22						
ウシクサ族 (ススキ属など)	5.35	6.98	4.63	2.71	1.63	2.38	2.33	0.47	0.85
タケ亜科									
A1aタイプ (ネザサ節など)	1.74	0.32	0.14	0.03	0.09	3.12	2.22	1.05	0.07
B1タイプ (クマザサ属など)	0.03	0.02	0.07	0.13	0.01	0.21	0.11	0.31	0.80

西原第2遺跡から検出された植物珪酸体の顕微鏡写真

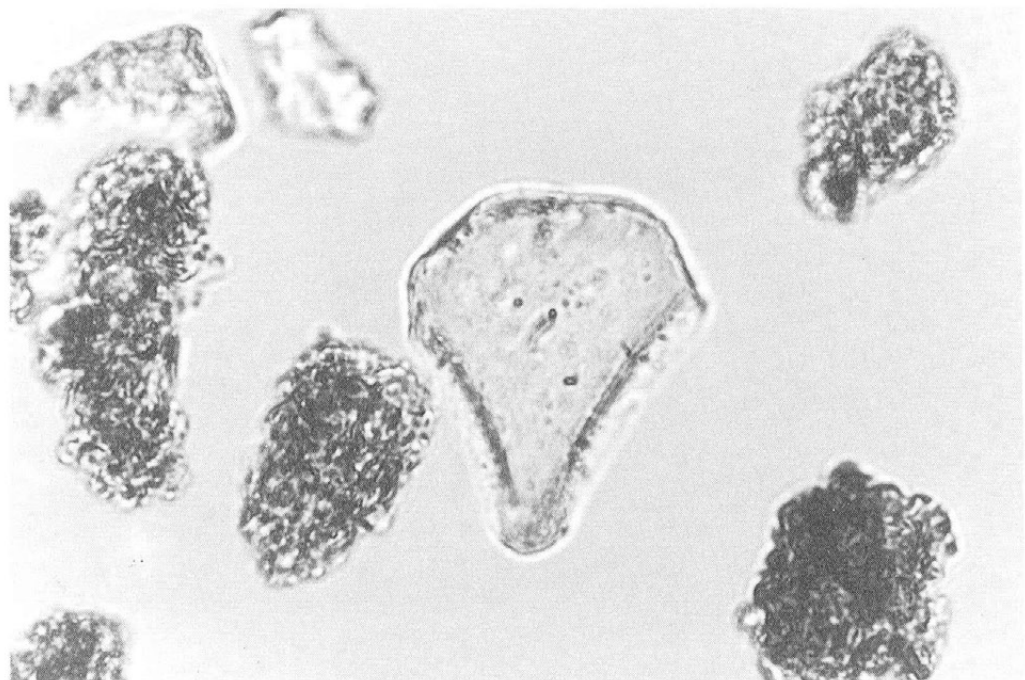
(倍率はすべて400倍)

1 イネ



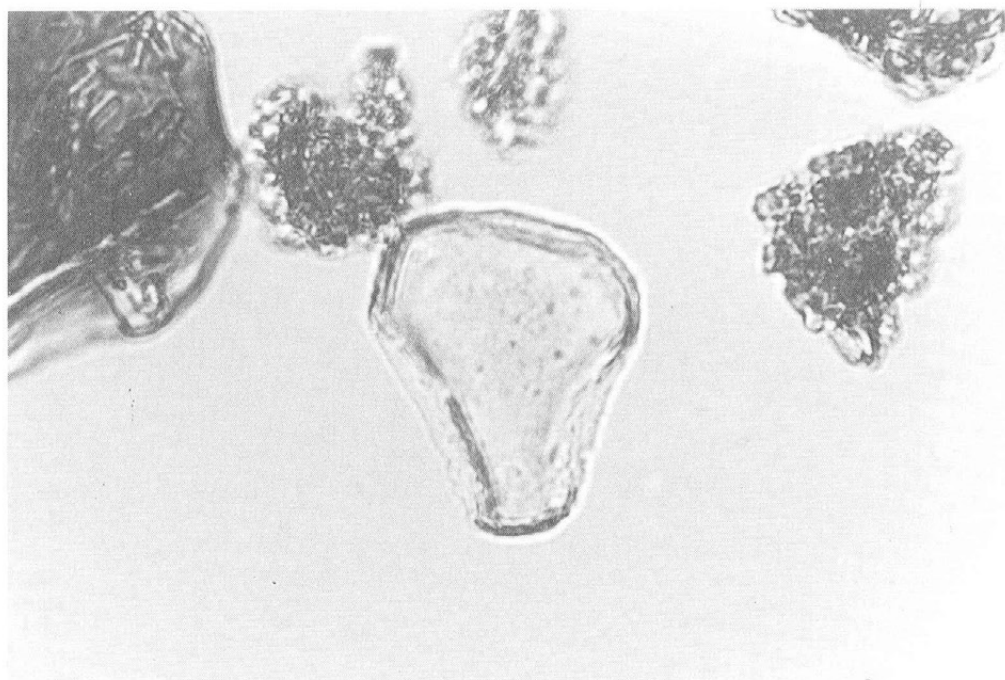
試料名
IV-3

2 ウシクサ族
(ススキ属など)



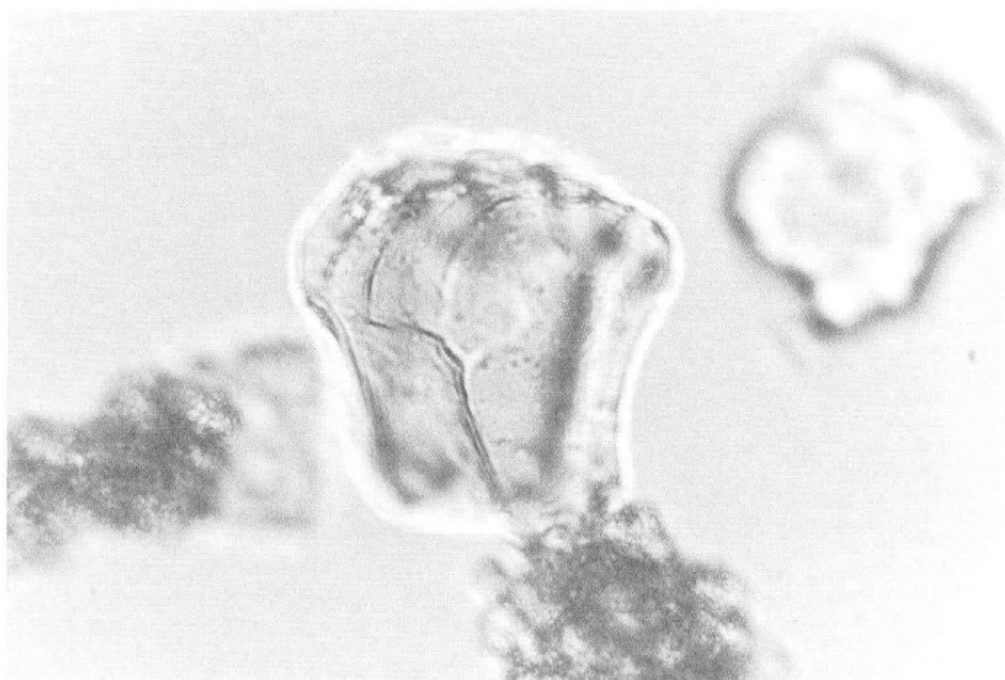
試料名
IV-1

3 ウシクサ族
(ススキ属など)



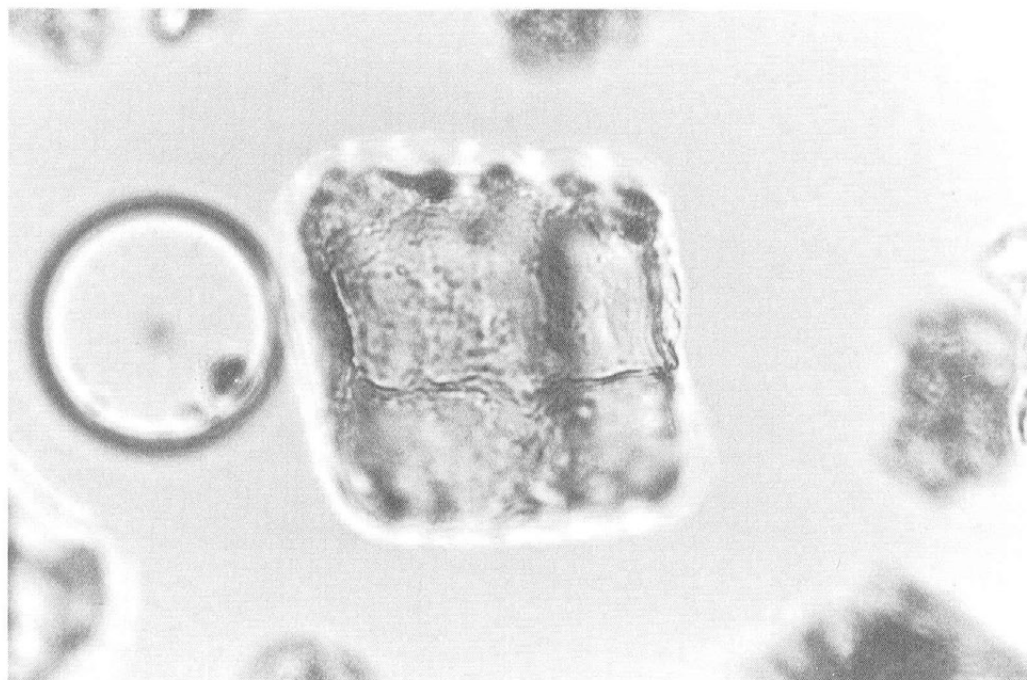
試料名
IV-1

4 タケ亜科 A1a タイプ
(ネザサ節など)



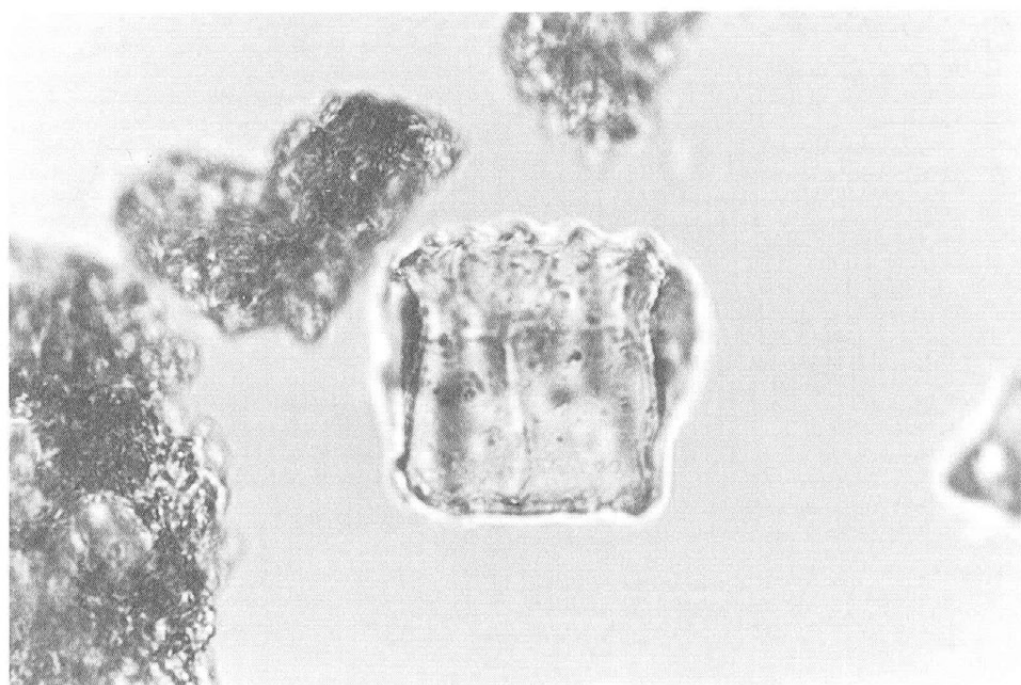
試料名
IV-1

5 タケ亜科 A1a タイプ
(ネザサ節など)



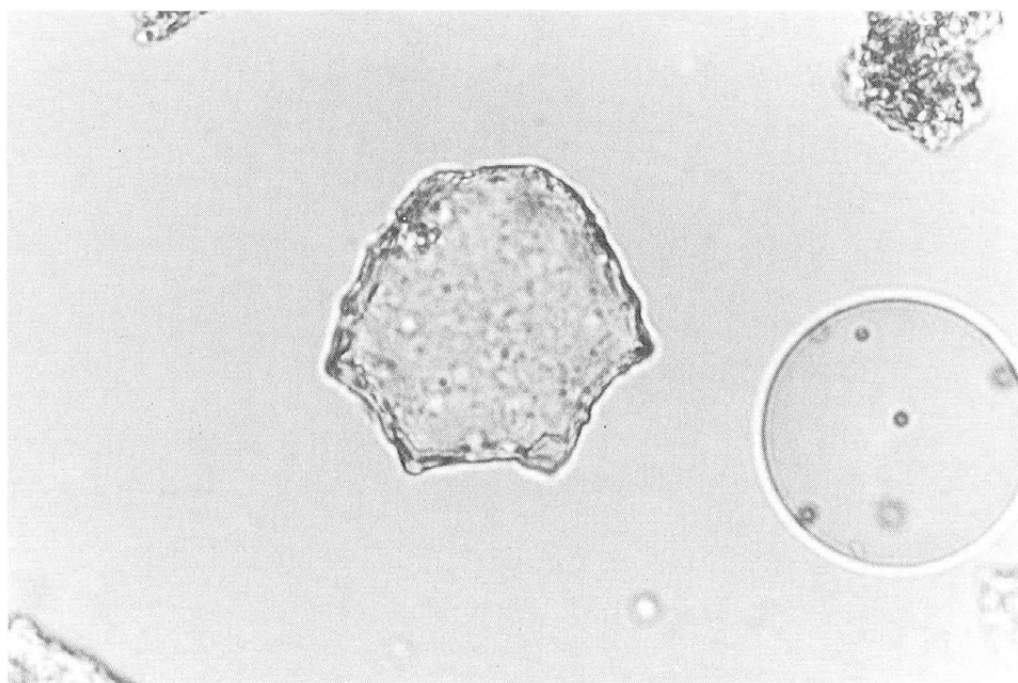
試料名
IV-1

6 タケ亜科 A1a タイプ
(ネザサ節など)



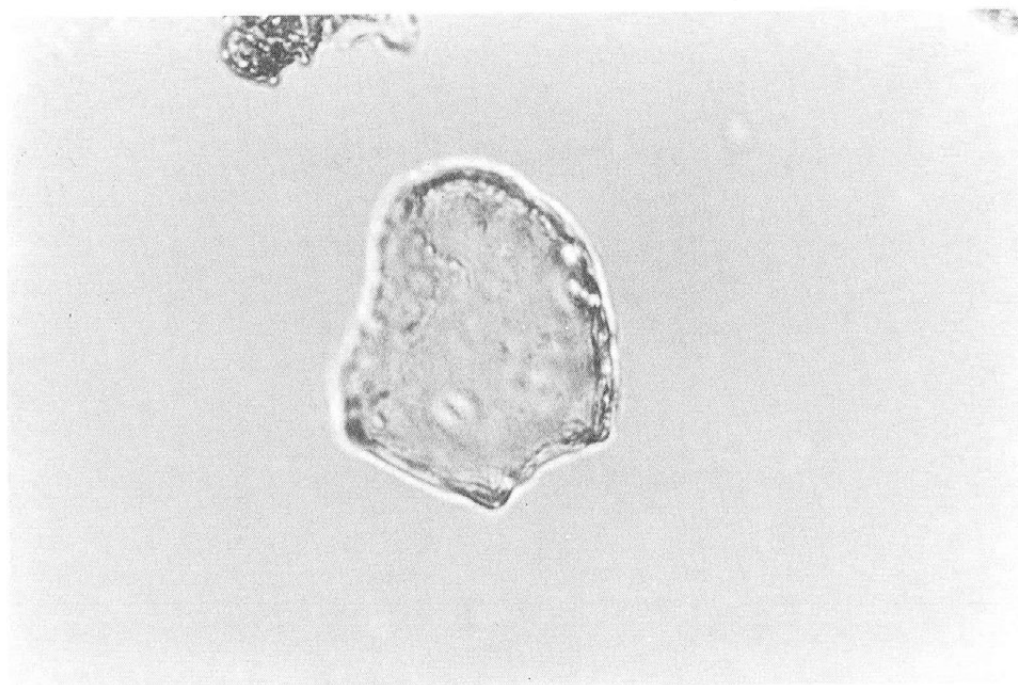
試料名
IV-3

7 タケ亜科 B1 タイプ
(クマザサ属)



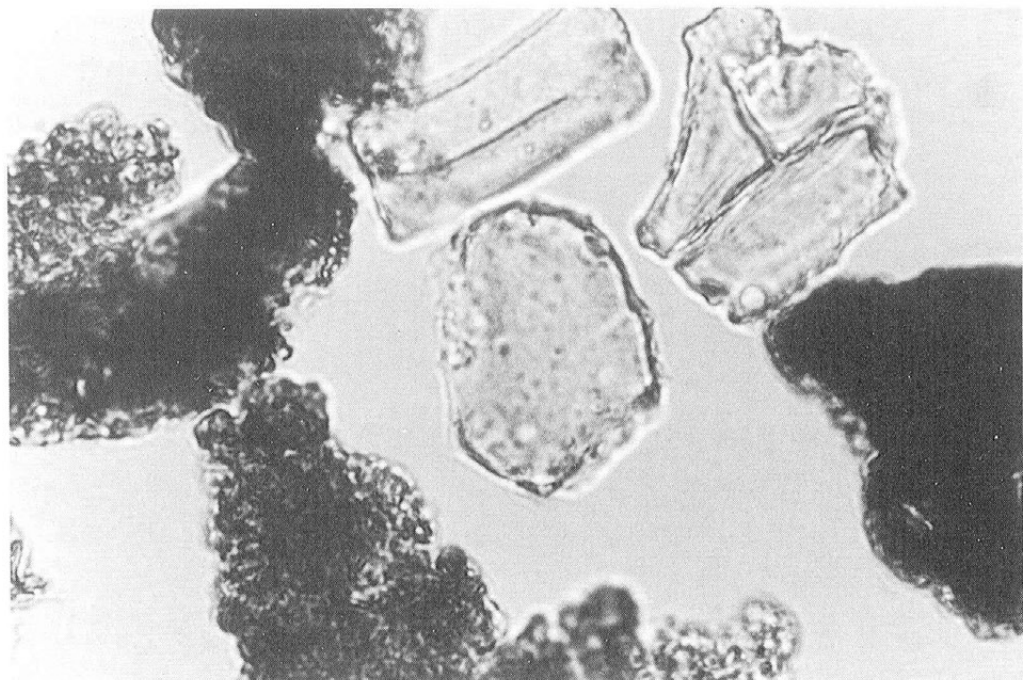
試料名
V-1

8 タケ亜科 B1 タイプ
(クマザサ属)



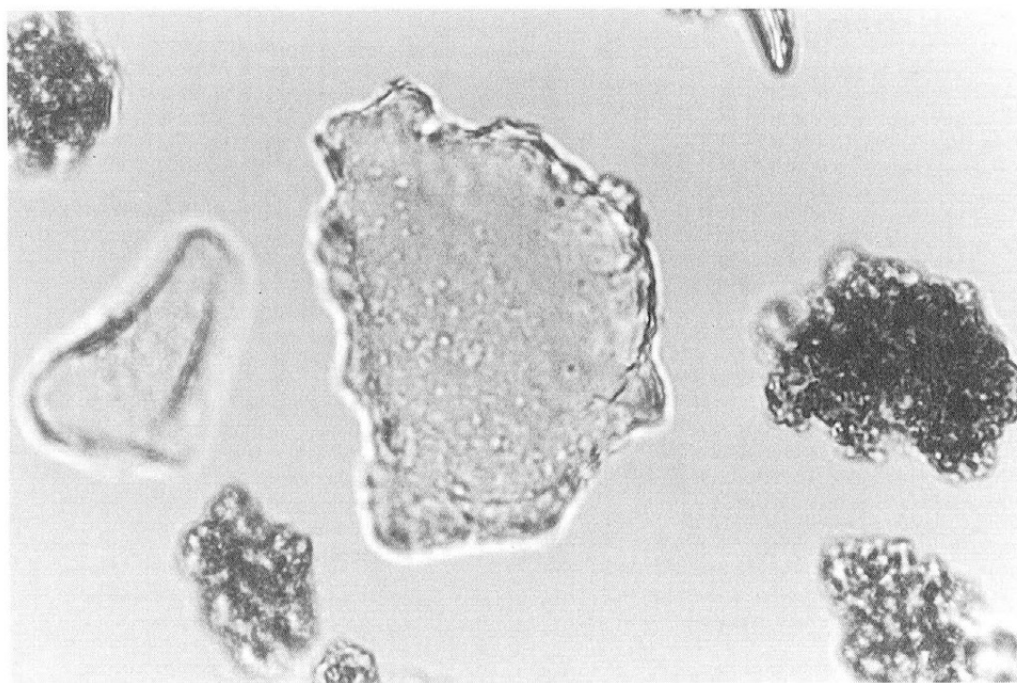
試料名
V-1

9 タケ亜科 B1 タイプ
(クマザサ属)



試料名
IV-1

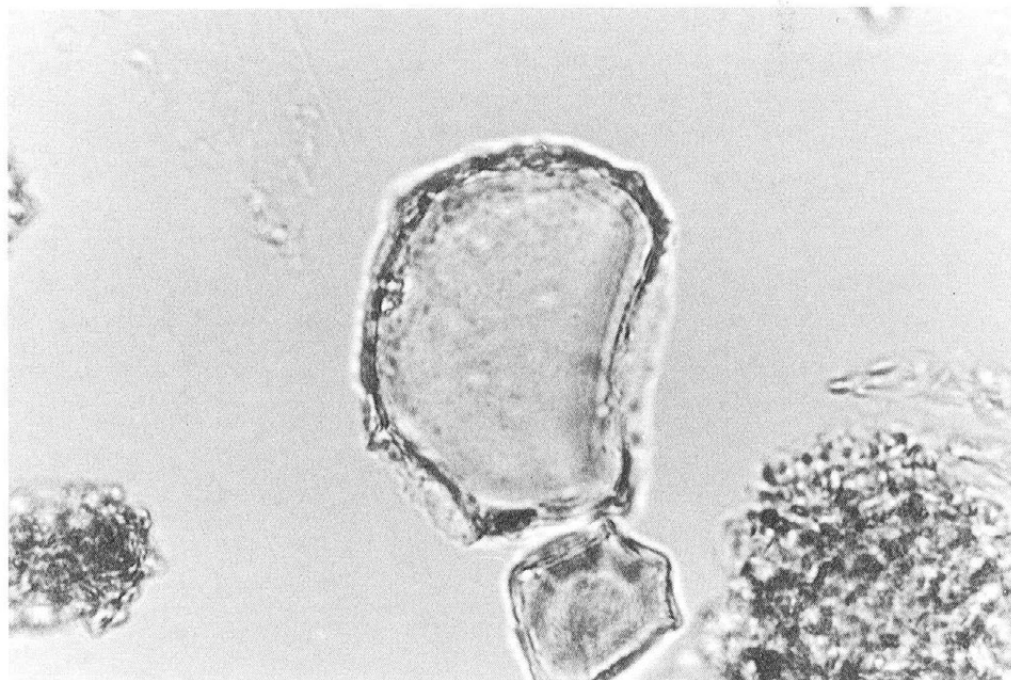
10 タケ亜科 B1' タイプ
(クマザサ属?)



試料名
IV-1

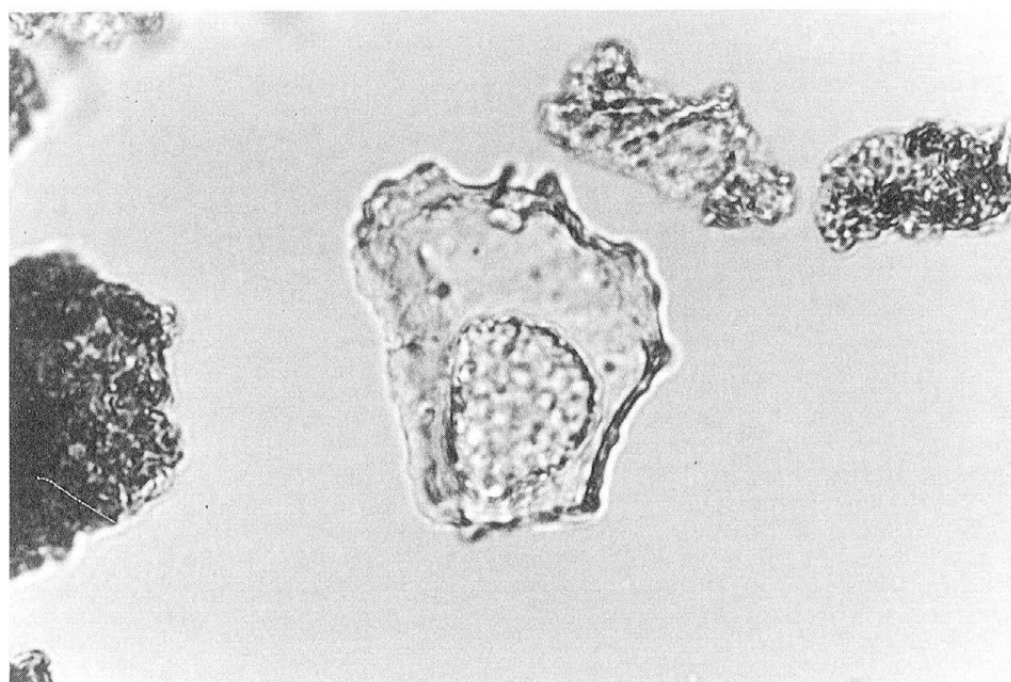
11 タケ亜科 B1' タイプ
(クマザサ属?)

試料名
V-2

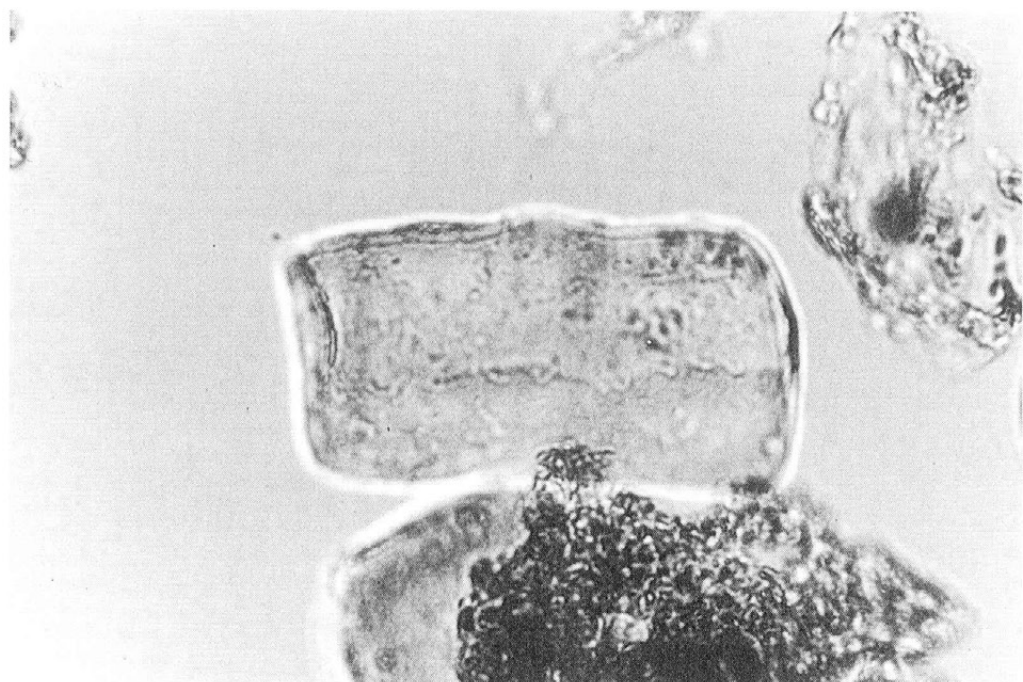


12 タケ亜科 B1' タイプ
(クマザサ属?)

試料名
V-2

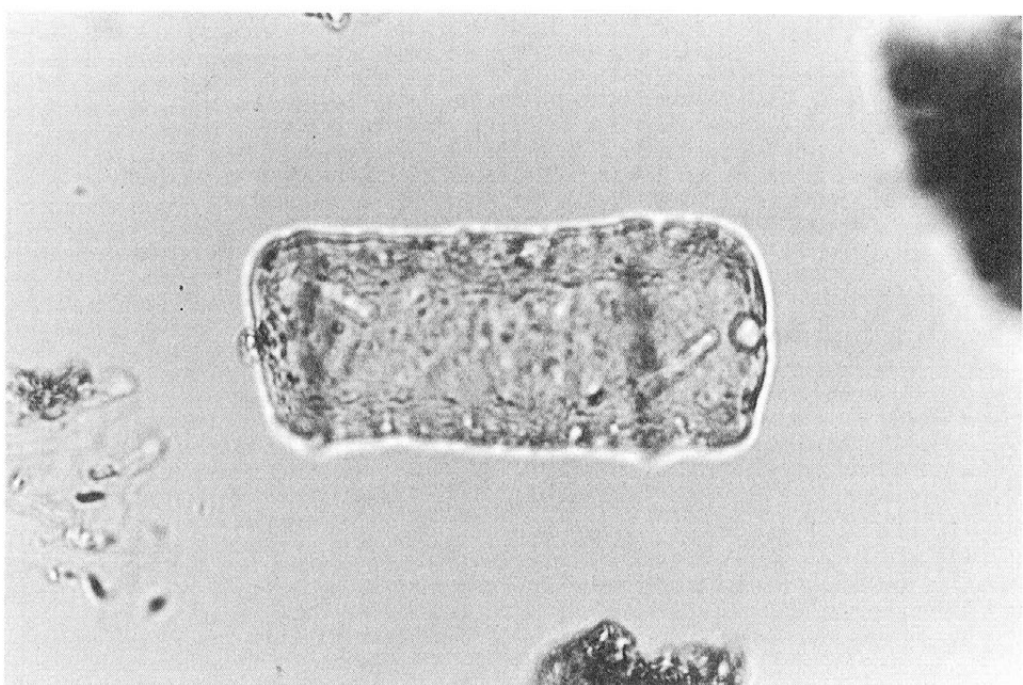


13 不明 A タイプ
(キビ族類似)



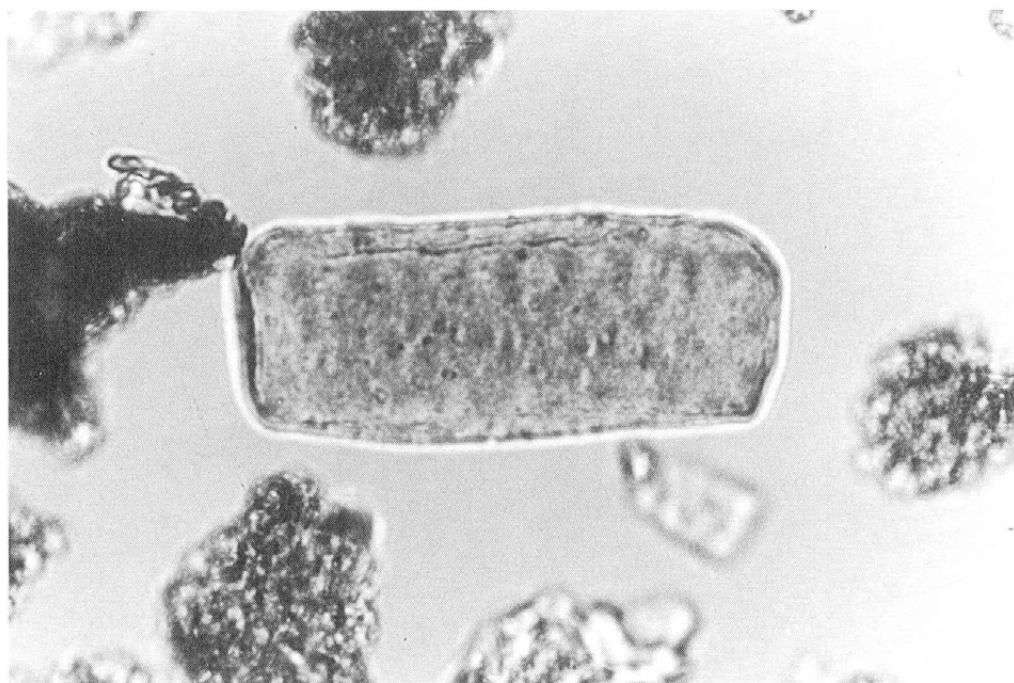
試料名
V-2

14 不明 A タイプ
(キビ族類似)



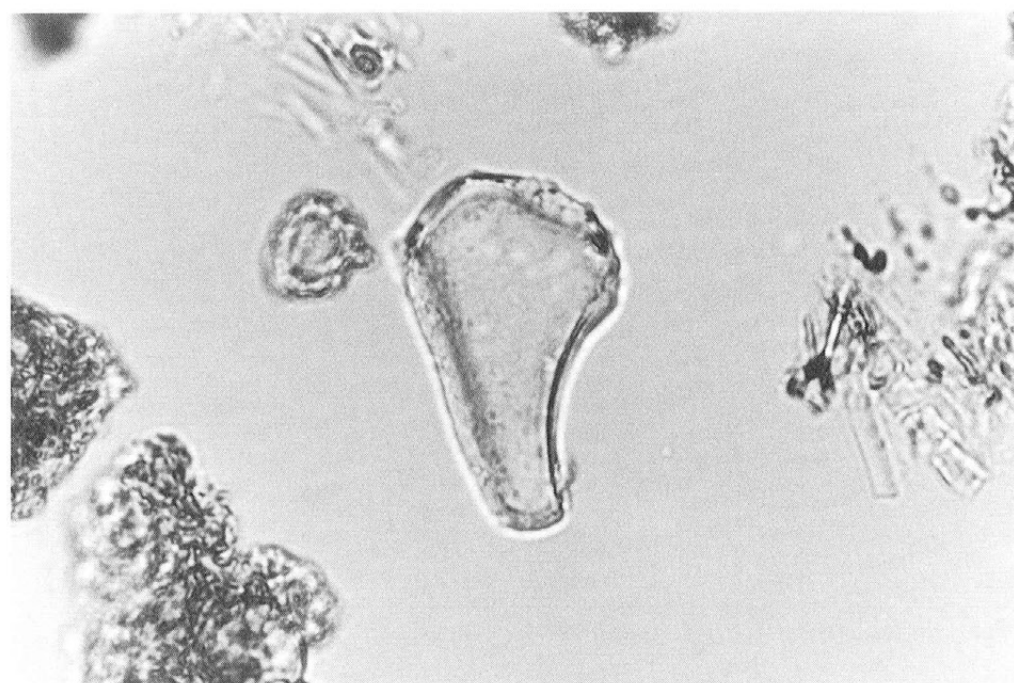
試料名
V-2

15 不明 A タイプ
(キビ族類似)



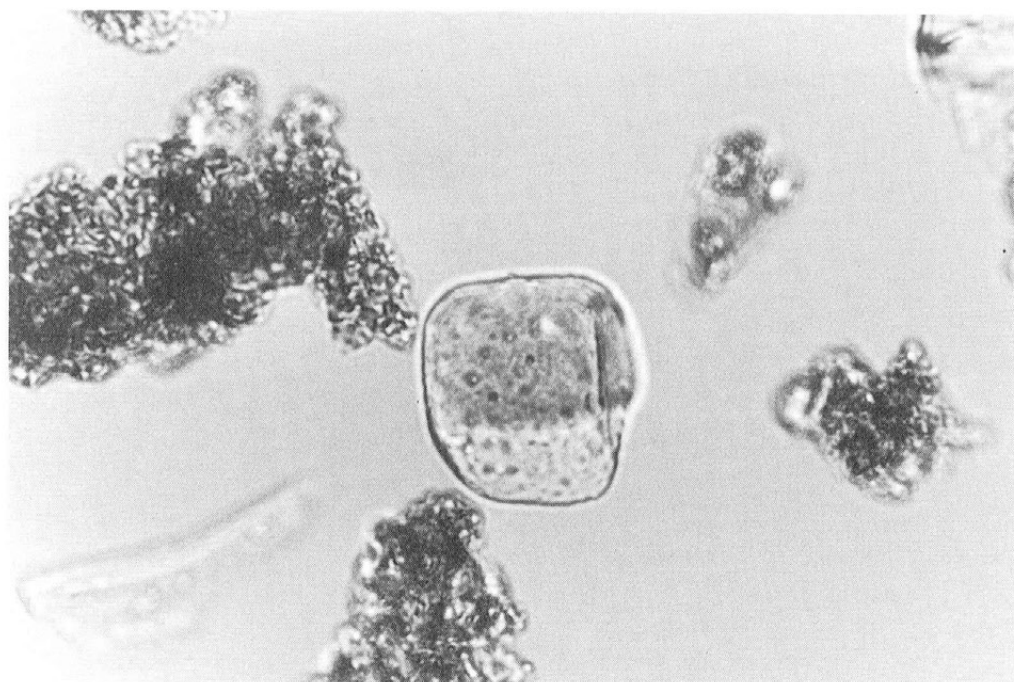
試料名
IV-1

16 不明 B タイプ
(ウシクサ族類似)



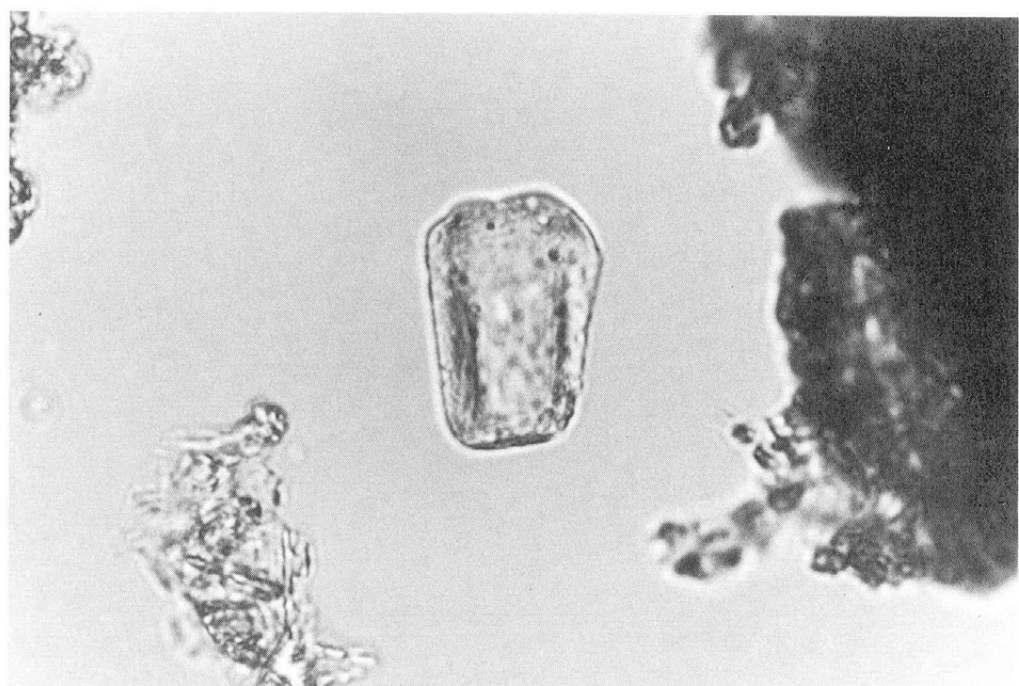
試料名
V-2

17 不明 B タイプ
(ウシクサ族類似)



試料名
IV-1

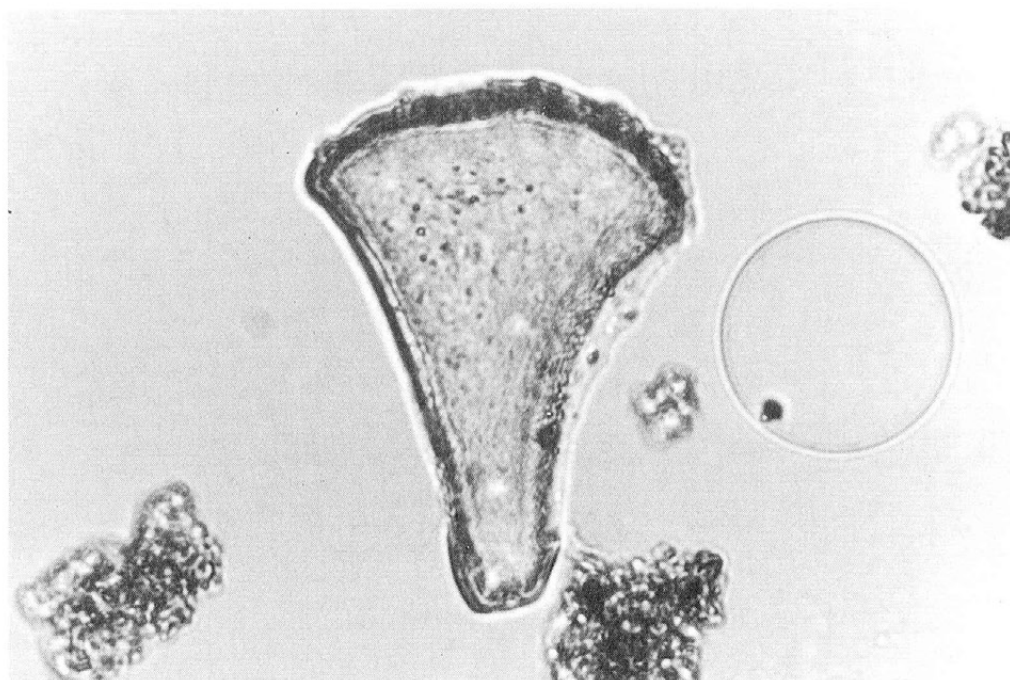
18 不明 B タイプ
(ウシクサ族類似)



試料名
V-2

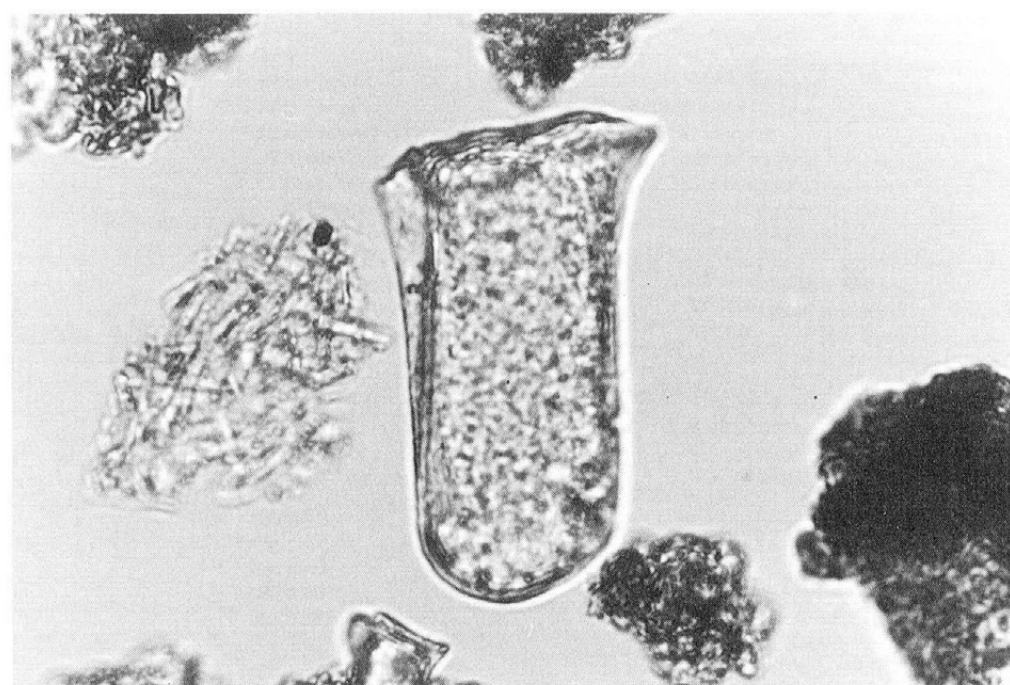
19 不明Cタイプ
(ウシクサ族類似, 大型)

試料名
IV-1

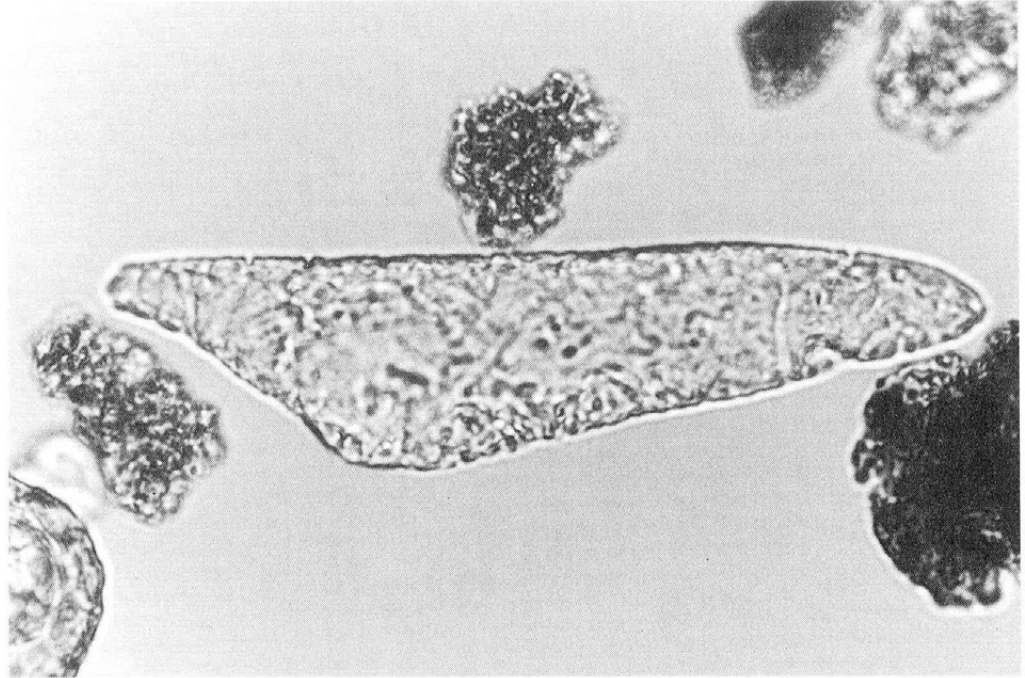


20 不明Dタイプ
(くさび型)

試料名
IV-1

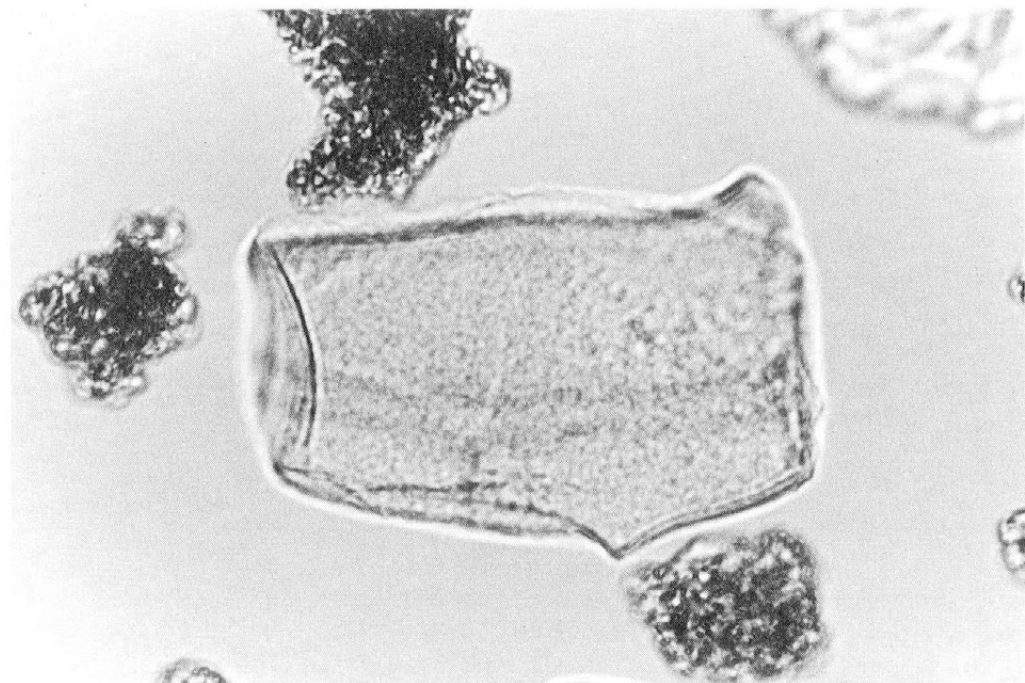


21 表皮毛起源



試料名
IV-1

22 イネ科の茎部起源



試料名
IV-1

23 棒状珪酸体



試料名
IV-1

24 棒状珪酸体



試料名
IV-1

Ⅲ 築池地下式横穴墓1991-1号

例 言

1. 本書は、築池地区消防団車庫建築に伴う築池地下式横穴墓1991-1号発掘調査の報告である。
2. 調査主体は、都城市教育委員会、期間は平成3年1月29日から2月2日までである。
3. 出土人骨について、長崎大学医学部解剖学第2教室より玉稿を賜った。
4. 本書に使用した方位は、磁北で、レベルは海拔絶対高である。
5. 現場の実測では、栗畑光博氏の協力を得た。
6. 本書の執筆・編集は都城市教育委員会文化課主事矢部喜多夫が行った。
7. 出土遺物（人骨を除く）と調査記録は都城市立図書館内文化財整理作業室に保管している。

1. 調査に至る経緯.

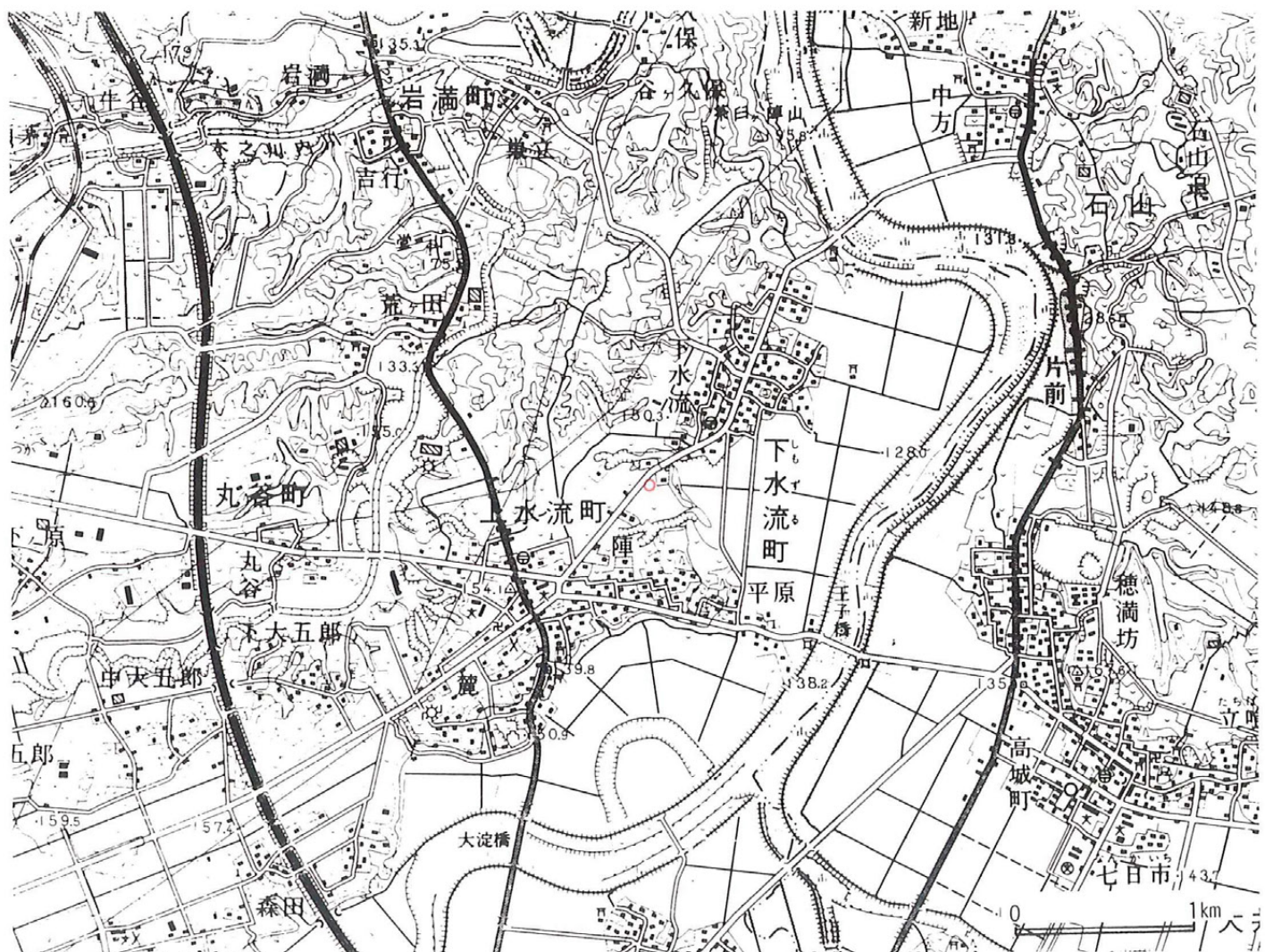
都城市下水流町は、県指定志和池村古墳群と地下式横穴墓が点在する地域である。今回報告する地下式横穴墓は、都城市消防本部（都城市建築課執行）による地区消防団車庫建築（工事期間平成2年12月26日～平成3年3月25日）床掘り作業中の平成3年1月27日に発見された。床掘りは地表面より深さ80cm程掘下げており、玄室南側の天井部が破壊・崩落し、人骨の一部が露見した状況であった。同日午後、連絡を受け現場に赴き、地下式と確認し工事の中断を申入れた。

平成3年1月31日付で都城市から遺跡発見の通知が提出された。発掘調査は同年1月29日より2月2日（5日間）まで実施し、記録保存の措置を講じた。また、敷地内には「田」の字状に幅60cm深さ100cm前後床掘りされており、発見された1基以外に地下式の出土はなかった。今回発見調査した地下式横穴墓を築池地下式横穴墓1991-1号と呼称する。

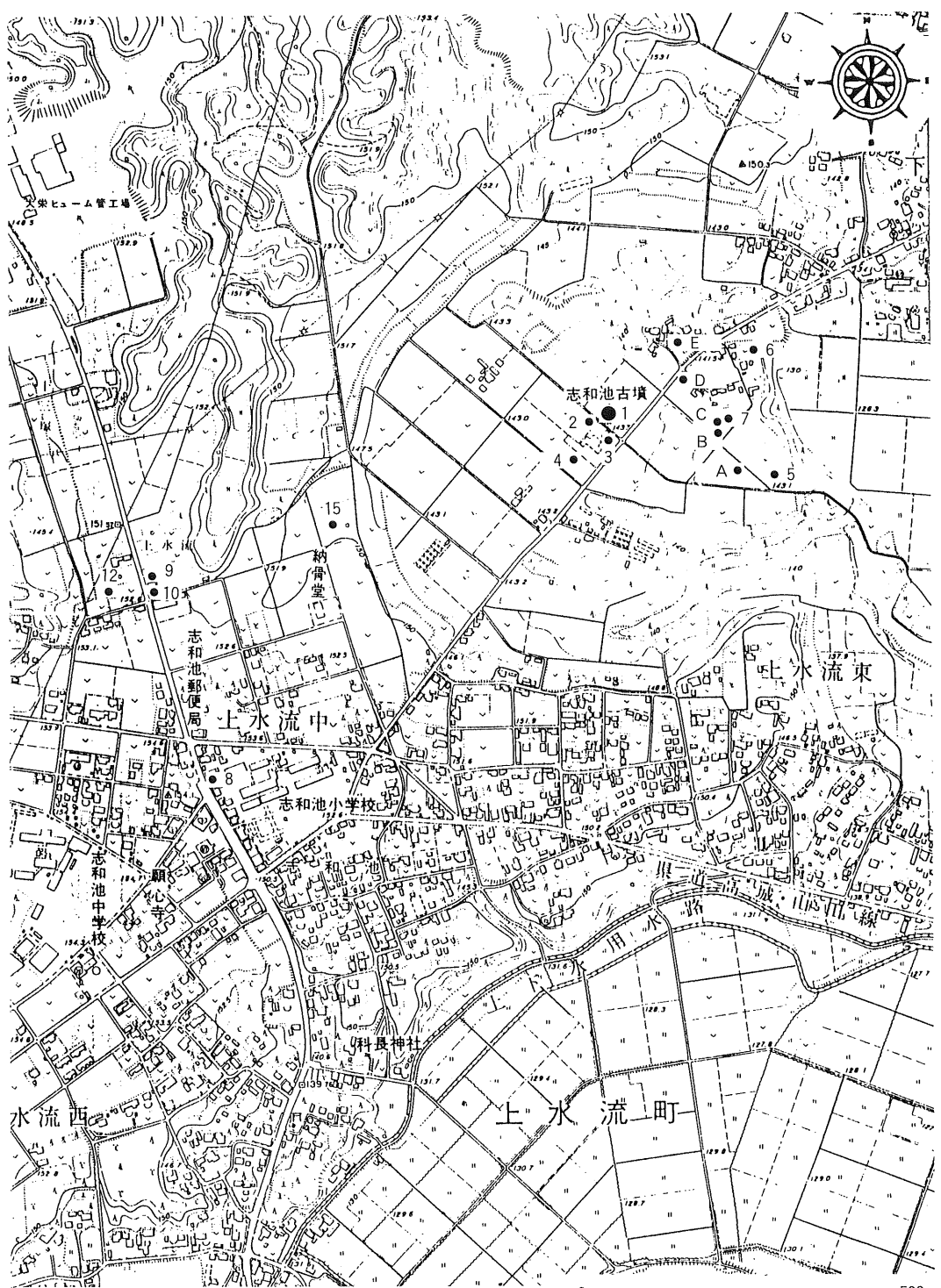
2. 遺跡の位置と環境

築池地下式横穴墓群は都城市下水流町に所在する。

都城市下水流町は、霧島山系の東端裾野に位置し、高城町と高崎町に隣接している。東の

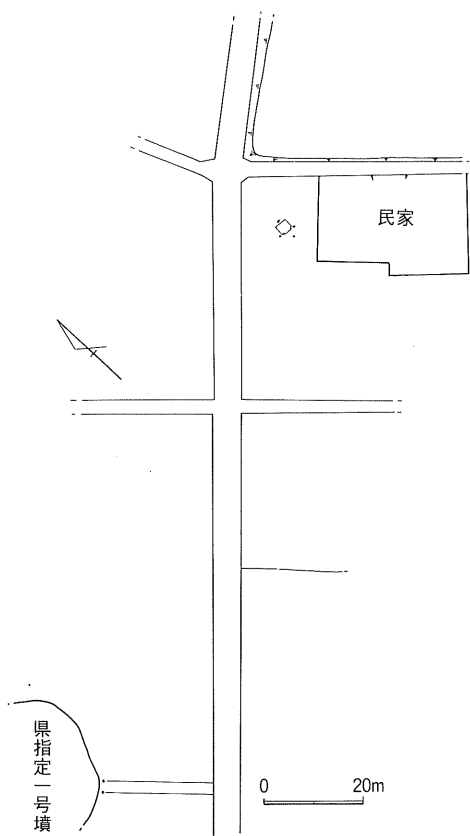


第1図 築池地下式横穴墓1991-1号位置図

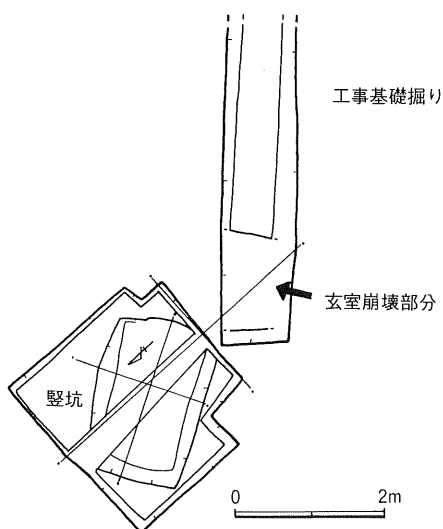


1～10・12-県指定志和池村古墳(1-前方後円墳、2～6・8～10・12-円墳、7-地下式横穴墓)
 A-地下式横穴墓52-1号、B-地下式横穴墓53-1号、C-地下式横穴墓59-1号、D-地下式横穴墓1991-1号
 E-伝 S52.4発見の地下式横穴墓(52-2号)

第2図 県指定古墳・地下式横穴墓分布図



第3図 試掘トレンチ配置図



第4図 試掘トレンチ

高城町との境には大淀川，北の高崎町との境には高崎川，西には丸谷川と大きく周囲を河川に囲まれている。築池地下式横穴墓群は下水流町の東側，大淀川西岸の水田地帯せまる台地標高約150mに位置している。水田面との比高差はおおよそ10mである。また，同台地には志和池村古墳群（前方後円墳1基，円墳10基，地下式横穴墓1基）が県指定となっている。築池地下式横穴墓は，過去昭和48年，52年，53年，59年にそれぞれ1基ずつ発掘調査が行われており，今回が5基目である。

3. 調査の内容

(1)概要

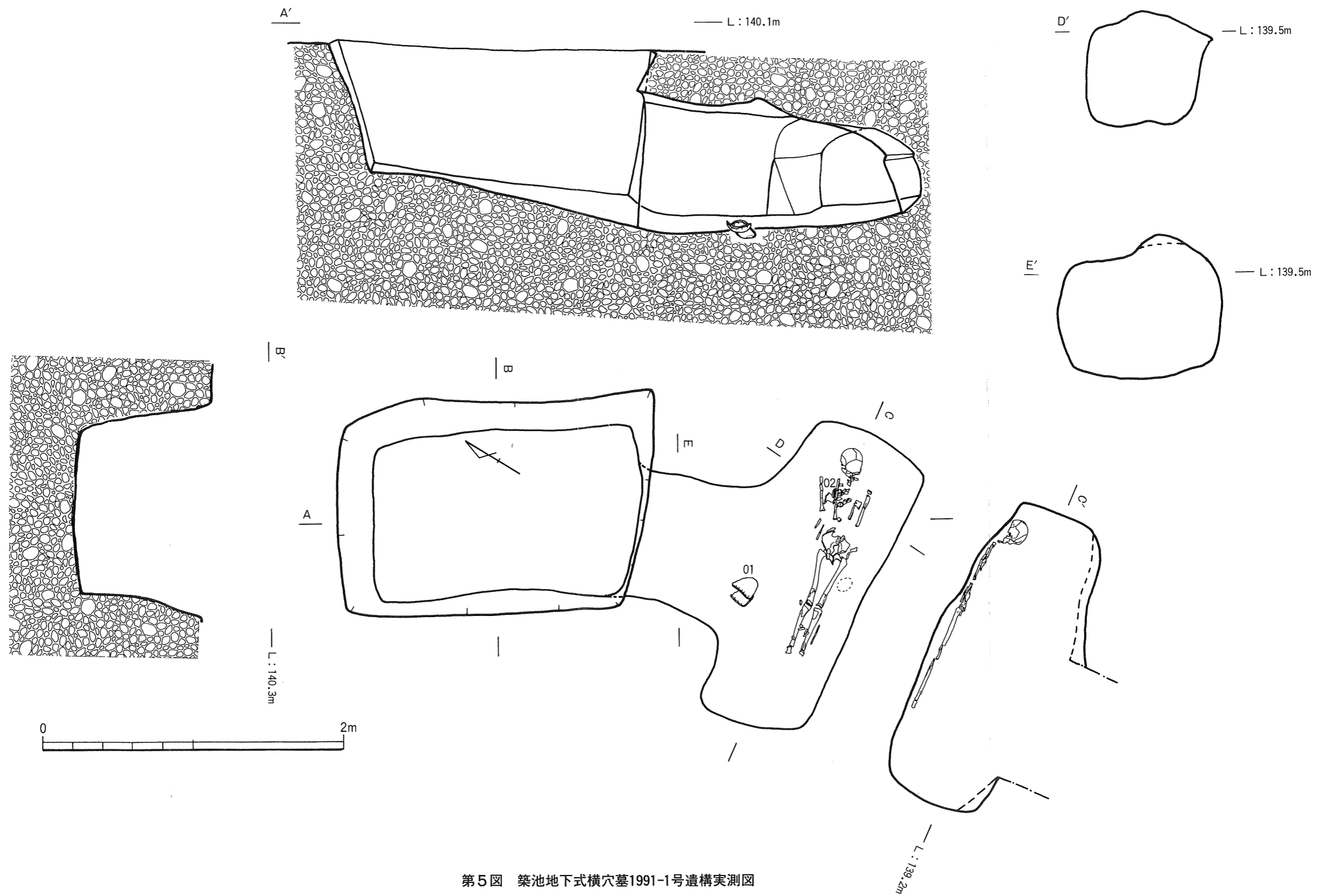
調査は玄室南側天井部の崩落により，竪坑部の方向が玄室より推定することができたため，まず，2.4m×1.6mの方形状のトレンチを設定し，竪坑部を確認することとした。

土層観察用ベルトを地表面から南北方向に設定し，地表下70cm程で竪坑部を検出した。検出した竪坑の主軸と土層観察用ベルトが30°程ずれたが，そのまま竪坑を掘り下げることにした。また，玄室内の崩土を取り除く作業も並行して行った。除去後，1体分の人骨が出土し，残存状態も良好であった。人骨の実測，取り上げと鑑定については長崎大学医学部解剖学第2教室に依頼した。

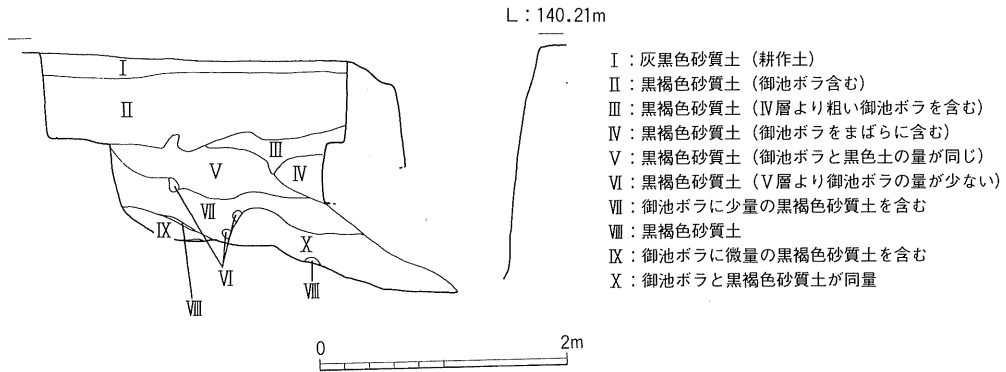
また，遺跡の基本層序は第1層灰黒土砂質土（耕作土），第2層黒褐色砂質土（御池ボラを少量含む）第3層明黒褐色砂質土（御池ボラも上層より多く含む）＜漸移層＞，第4層御池ボラ層である。

(2)築池地下式横穴墓1991-1号

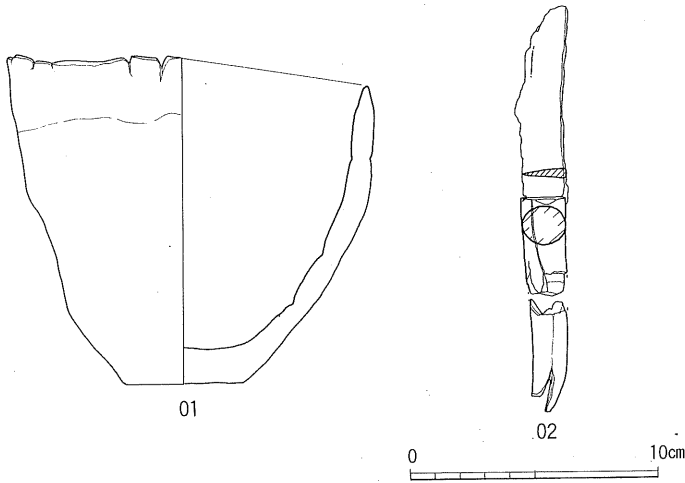
1991-1号の竪坑は，検出面で南北208cm×東西130cm，床面180cm×108cm，深度が羨門部115cm，奥壁部85cmを測る方形プランであ



第5图 築池地下式横穴墓1991-1号遺構実測図



第6図 竖坑土層断面図



第7図 出土遺物実測図

る。竖坑の主軸方向と羨道・玄室のそれとが 30° ずれている。言い換えると、竖坑南壁にうがかれた羨門部は南壁の西側コーナーに偏っている。竖坑の土層観察用のセクションは羨道・玄室の主軸方向に一致しているため、竖坑部の主軸とはずれを生じている。竖坑の埋土は、基本的には第2層黒褐色砂質土により充填され、御池ボラの混入の度合いにより土層を細分している。羨門部の閉塞については確認できなかったが、竖坑内の埋土が堰を切ったように遠くほど薄く広く流れ込んでいたため、地下式構築時には何等かの閉塞が施されていたと思われる。羨道は長さ70cm、最大幅80cm、高さ(玄室側)72cmを数える。玄室は長軸(東西方向)210cm、短軸90~70cmの方形で両袖形を呈し、玄室奥壁(南壁)に庇状の段を有している。天井部は最大高推定100cmで形態は庇状の有段の状況から家形と思われるが、粒子の粗い御池ボラ層内構築のため推定の域を越えない。

(3)遺物

人骨 頭蓋骨を東にした仰臥伸展の壮年女性人骨(長大医所見)1体である。工事中に崩落した土砂以外に2次的人骨の移動はなかった。頭骨顔面に朱の付着がみられ、玄室中央奥側

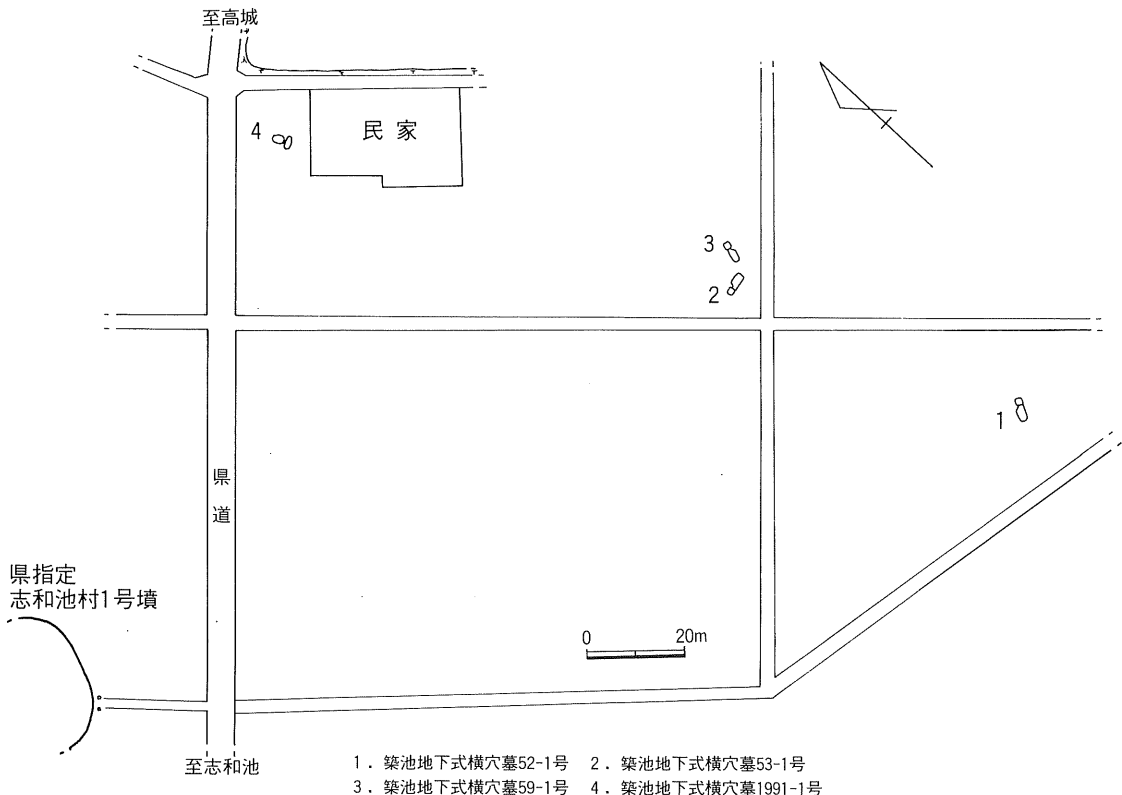
屍床面に朱の塗布されたボラが数cm四方の範囲で確認できた。

土師器鉢 (01) 玄室入口部に基礎掘り工事により崩落した土砂で押しつぶされた状態で出土した。口径14.5cm, 底径4.6cm, 器高最大13cm, 最小11.8cmを測る。器形はいびつで輪積み痕を残す。外部は不定方向のナデで, 内面は部分的に斜めのハケメを施す。

刀子 (02) 埋葬人骨の胸部に刃先が西南西に向いた状態で出土した。全長(推定)16.3cm, 刃部長7.5cm, 刃部幅1.8cmを測る。柄部は鹿角である。

4. 小結

今回で都合5基の地下式横穴墓が発掘調査された。そのなかで4基の地下式の分布と主軸方向は第8図のとおりである。1991-1号は平入り両袖型, 52-1号は妻入り右片袖型, 53-1号・59-1号は妻入り左片袖型である。昭和48年発掘調査の48-1号(位置不明)は副葬品の位置から平入り型ではないかと思われる。



第8図 築池地下式横穴墓配置図

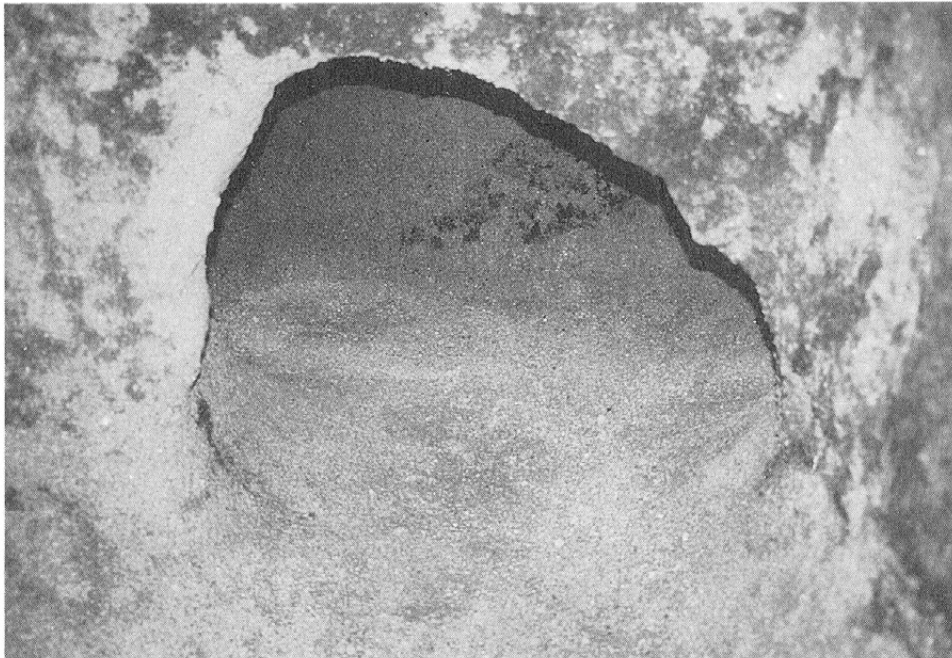
圖 版



築池地区全景



豎坑

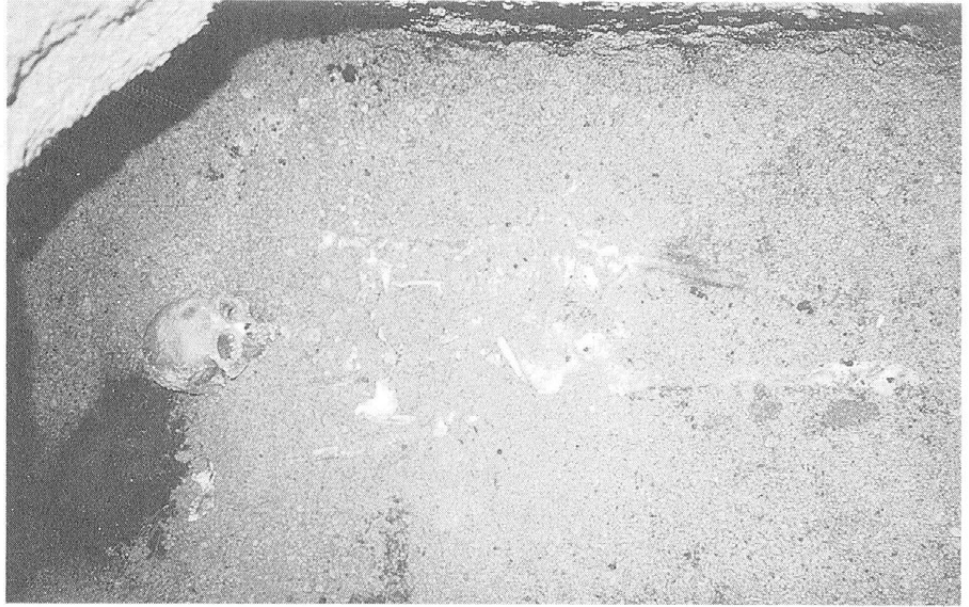


豎坑より玄室



豎坑土層断面

埋葬人骨

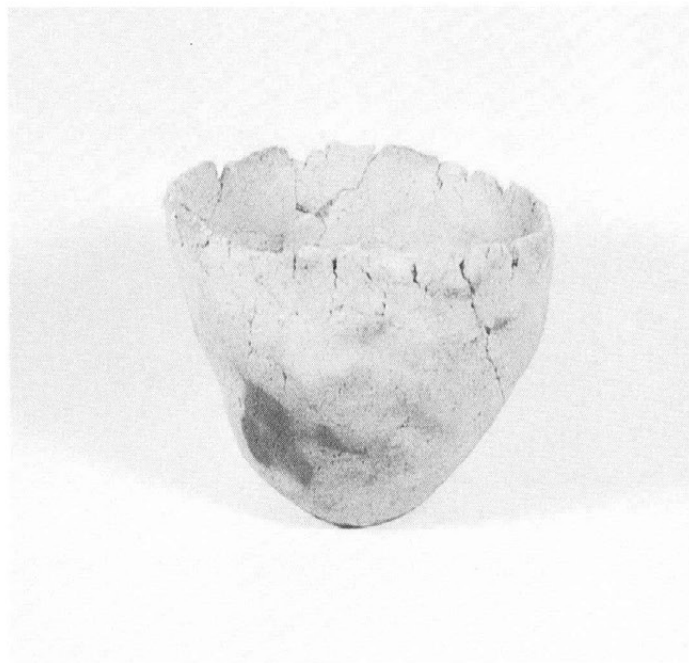


刀子出土状況

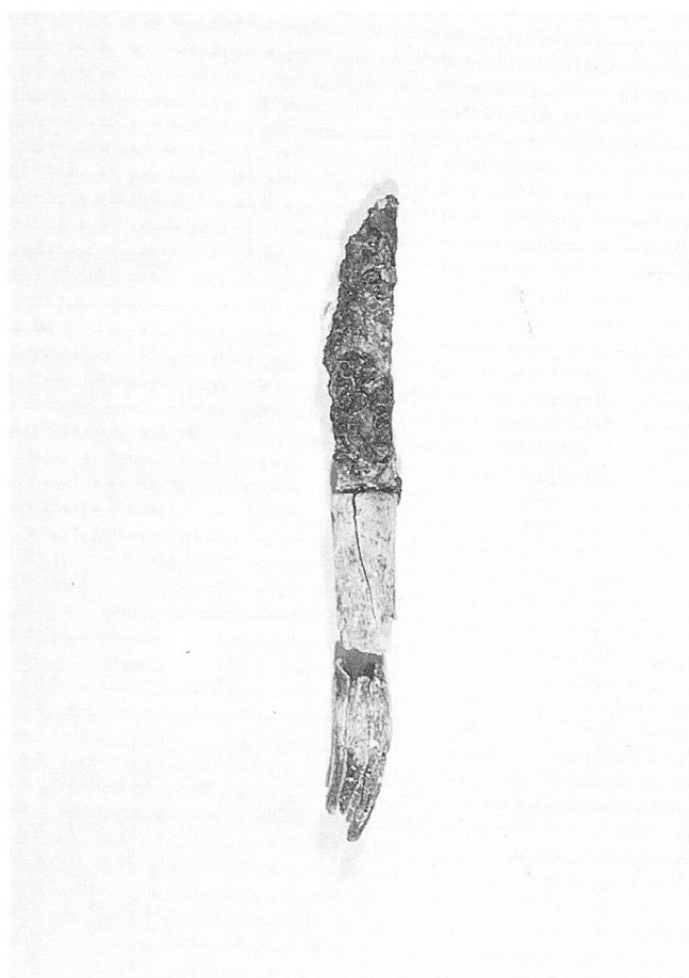


土師器出土状況





土師器



刀子

宮崎県都城市築池地下式横穴墓出土の古墳時代人骨

松下孝幸・佐伯和信

宮崎県都城市築池地下式横穴墓出土の古墳時代人骨

松下孝幸^{*}・佐伯和信^{*}

【キーワード】：宮崎県，古墳時代人骨，地下式横穴墓，短頭

はじめに

築池地下式横穴墓群は宮崎県都城市下水流に所在する周知の遺跡であるが、1991年の1月末、築池地区の消防団の詰め所を作るための基礎工事が行われた際、新たに地下式横穴墓が1基（1991-1号墓）発見された。緊急に発掘調査が行われ、玄室から比較的保存良好な人骨が1体検出された。

長崎大学医学部解剖学第二教室では、「熊襲」や「隼人」と関係の深い南九州地域の古墳時代人骨の人類学的研究を研究テーマのひとつに設定し、この地域から出土する古墳時代人骨の調査を続けている。松下（1990b）は、男性に関して南九州出土の古墳時代人骨の詳細な研究を行った結果、頭型と顔面の形態および身長に関しては地域差が存在することを明らかにし、この地域の古墳人を「南九州山間部タイプ」、「宮崎平野部Ⅰタイプ」、「宮崎平野部Ⅱタイプ」の三つのタイプに整理している。女性についてはまだ総括的研究を終えていないが、女性でも男性とほぼ平行した関係が認められるようである。

しかし、このような研究にもかかわらず、人骨の出土量はまだ研究に十分なものではなく、地域的にも偏りがあり、不明な点も多く残されたままである。

都城市からは菓子野地下式横穴墓（松下・他，1983b，小片・他，1986）から保存良好な古墳時代人骨が発掘され、その特徴が明らかにされている。本人骨によって本市での例数を追加することができた。人骨の計測や人類学的観察を行い興味ある所見を得たので、その結果を報告しておきたい。

資 料

本地下式横穴墓の1991年の調査で出土した人骨1体の人骨で、その残存部分は図2に示すとおりである。

*Takayuki MATSUSHITA, Kazunobu SAIKI

Department of Anatomy, Nagasaki University School of Medicine

〔長崎大学医学部解剖学第二教室〕

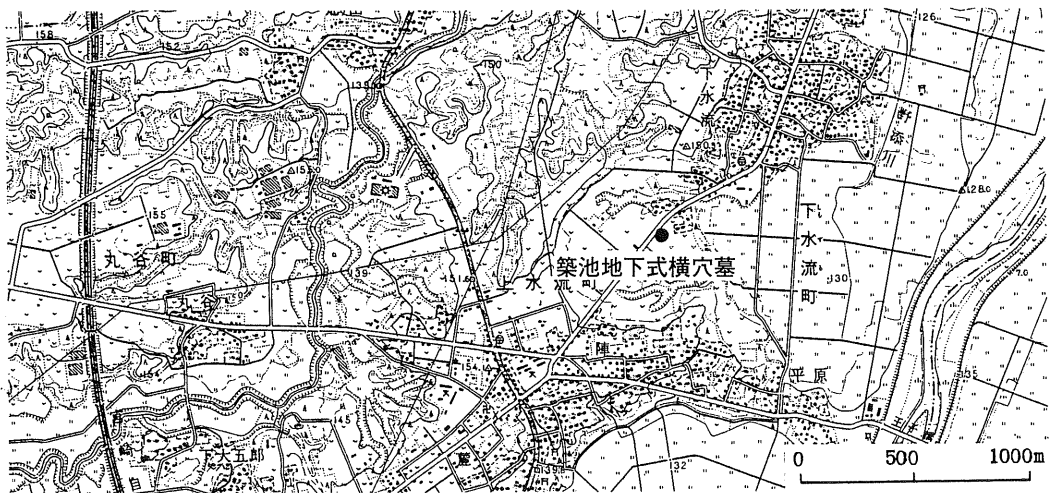
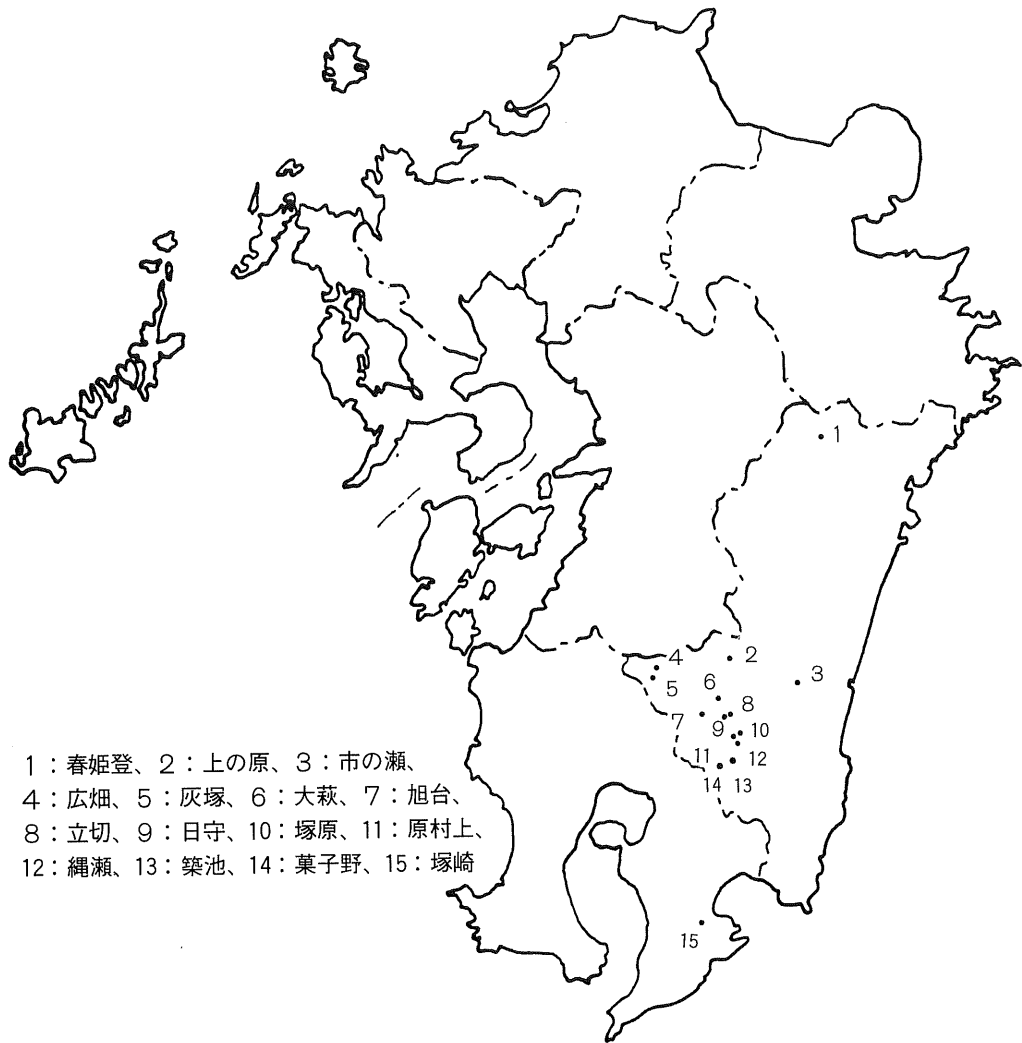


図1. 遺跡の位置 (Fig.1. Location of the Chikuike Tumuli No.1991-1, Miyakonojo City, Miyazaki Prefecture)

人骨は成人骨で、後述している所見から壮年の女性骨と推定される。

この人骨は、考古学的所見より、古墳時代に属する人骨である。

計測方法は、Martin-Saller (1957) によったが、一部はHowells (1973) の方法で計測した。また、脛骨の横径はオリビエの方法で計測し、鼻根部については鈴木 (1963) と松下ら (1983) の方法で、歯は藤田 (1949) の方法で小山田 (長崎大学歯学部口腔第一解剖) が計測し、齶歯の観察も小山田が行った。

所 見

各人骨の残存部は図2に示すとおりである。また、各骨の計測値は文末に一括して掲げた。

1991-1号人骨 (女性, 壮年)

1. 頭蓋

(1) 脳頭蓋

後頭骨を一部欠損している以外はほぼ完全である。外後頭隆起部はやや発達しているが上項線は不明瞭である。乳様突起はやや小さい。外耳道は両側とも観察できたが、両側とも前壁に軽度の骨腫が認められる。縫合は、三主縫合はいずれも外板は開離している。内板については矢状縫合は開離しているが、冠状縫合とラムダ縫合では一部癒合が認められる。

脳頭蓋の計測値は、頭蓋最大長が170mm、頭蓋最大幅は136mmであるが、バジオン・ブレグマ高は計測できない。頭蓋長幅示数は80.00となり、頭型はbrachykran (短頭型) に属している。また、頭蓋水平周は493mm、横弧長は284mm、正中矢状弧長は335mmで、頭蓋の径はやや小さい。

ところで、本例は短頭型ではあるが、その下限に位置しており、その短頭性は強いものではない。本市の菓子野古墳人の頭蓋長幅示数は76.70で、築池古墳人とは異なった頭型をしている。本市の古墳人女性で頭型が明らかなものはわずか2例のみで、短頭型と中頭型がそれぞれ1例ずつで、まだ本市の特徴を指摘できる状況ではない。また、短頭型を示すものは本例の他に、市ノ瀬古墳人と原村上古墳人のみで、その他の例はいずれも中頭型である。筆者等は女性でも短頭型を最も強く示す地域のひとつは宮崎市周辺 (平野部) と考えている。都城市から短頭を示す例が今回見られたが、その程度は弱いもので、今のところこの考えを訂正する必要はないだろうと考えている。

(2) 顔面頭蓋

顔面頭蓋は左右の頬骨弓を欠損している以外はほぼ完全である。眉上弓の隆起は弱く、前頭結節の発達良好である。鼻根部はやや扁平で、鼻骨は長く、低い。

顔面頭蓋の計測値は、頬骨弓幅が132mm、中顔幅は98mm、顔高は114mm、上顔高は68mmで、顔示数は86.36(K)、116.33(V)、上顔示数は51.52(K)、69.39(V)となり、高径がやや高い。

眼窩幅は41mm (右)、40mm (左)、眼窩高は33mm (右)、32mm (左) で、眼窩示数は80.49 (右)、80.00 (左) となり、両側ともmesokonch (中眼窩) に属している。

鼻幅は25mm、鼻高は53mmで、鼻示数は47.17となり、mesorrhin（中鼻）に属している。

鼻根部の計測値は、前眼窩間幅が20mm、鼻根横弧長は24mm、鼻根彎曲示数は83.33となり、鼻根部での鼻骨の鼻骨間縫合へ向かう隆起はやや強いが、鼻骨そのものの顔前面方向への隆起は弱い。两眼窩幅は97mmで、眼窩間示数は20.62となり、鼻根部はやや狭い。鼻骨最小幅は8mmで、前頭突起水平傾斜角は114度を示し、前頭突起の向きは前額方向である。鼻根角は160度、鼻根陥凹示数は8.00で、鼻の高さはきわめて低い。

側面角は、全側面角が85度、鼻側面角が90度、歯槽側面角は72度で、弱い歯槽性突顎の傾向が認められる。

下顎体の高径は低く、下顎枝は幅広く、下顎切痕は浅い。

ところで、頬骨弓幅と中顔幅はやや広いがその程度は著しいものではない。一方、顔高と上顔高は南九州地域の古墳人としては高い方に属し、特に上顔高はかなり高い方である。従って、顔示数と上顔示数も大きな値となり、このように大きな値は南九州地域の古墳人としては初めてである。高径が高い傾向は鼻部でもみられ、鼻高は高く、鼻示数は南九州地域の古墳人としてはかなり小さな値を示している。

2. 歯

上下両顎には歯が釘植していた。残存歯と歯槽の状態を歯式で示すと、次のとおりである。

$M_3M_2M_1P_2P_1C I_2 I_1$	$I_1 I_2 C P_1 P_2 M_1 M_2 M_3$
$M_2M_1P_2P_1C I_2 I_1$	$I_1 I_2 C P_1 P_2 M_1 M_2 M_3$

上顎右側の第三大臼歯は歯槽内に埋伏したままであり、上顎の右側の側切歯と犬歯の間には開存する歯槽が存在することから、過剰歯が存在したようである。なお、下顎右側の第三大臼歯も未萌出の可能性が強い。

咬耗度はBrocaの1～2度である。なお、風習的抜歯の痕跡は認められない。また、歯の咬合形式は鉗子状咬合である。

3. 四肢骨

(1) 上肢骨

左側の肩甲骨、両側の鎖骨と上腕骨が残存していた。

①鎖骨

鎖骨は著しく細い。

②上腕骨

骨体の径が著しく小さいが、三角筋粗面の発達はやや良好である。計測はほとんど不可能である。骨体最小周は47mm（左）で、細い。

(2) 下肢骨

両側の寛骨、大腿骨、脛骨が残存していた。

①寛骨

大坐骨切痕の角度は大きく、耳状面前溝が認められる。

②大腿骨

粗線はやや良好で、骨体上部は扁平である。

計測値は、骨体中央矢状径が25mm（右）、24mm（左）、横径は23mm（右、左）で、骨体中央断面示数は108.70（右）、104.35（左）となり、骨体両側面はやや後方へ発達している。骨体中央周は75mm（右、左）で、骨体は細い。また、上骨体断面示数は74.07（右、左）となり、骨体上部はかなり扁平である。

③脛骨

骨体は細いが、ヒラメ筋線の発達は良好で、骨体の断面形は右側はヘリチカのⅣ型、左側はⅡ型を呈している。

計測値は、中央最大径が26mm（右、左）、中央横径は18mm（右）、17mm（左）で、中央断面示数は69.23（右）、65.38（左）となり、骨体は古墳人としては扁平である。骨体周は71mm（右）、70mm（左）で、骨体は細い。

4. 性別・年齢

性別は、大坐骨切痕の角度が大きいことからや、女性と推定した。年齢は、三主縫合の大部分が内外両板とも開離していることから、壮年と考えられる。

要 約

宮崎県都城市下水流に所在する築池地下式横穴墓群のうちの1基（1991-1号墓）の発掘調査が行われ、玄室から比較的保存良好な人骨が1体検出された。人骨の計測や人類学的観察を行い、次の結果を得た。

1. 1991年の調査で出土した人骨は1体で、この人骨は壮年の女性骨である。
2. この人骨は、考古学的所見より、古墳時代に属する人骨である。
3. 頭蓋長幅示数は80.00となり、短頭型に属している。
4. 顔面には南九州地域の古墳人としては、高顔傾向が認められる。また、鼻根部はやや扁平で、鼻骨の隆起はきわめて弱い。弱い歯槽性突顎の傾向が認められる。
5. 四肢骨は一様に細く、大腿骨体上部と脛骨体には扁平性が認められる。
6. 顔面部には赤色顔料が付着していた。
7. 過剰歯が認められる。また、風習的抜歯の痕跡は認められないが、両側に軽度の外耳道骨腫が存在する。

謝 辞

摺筆するにあたり、本研究と発表の機会を与えていただいた都城市教育委員会文化課の先生方に感謝致します。

参考文献

1. 藤田恒太郎, 1949, 歯の計測基準について。人類学雑誌, 61:27-32.
2. Howells.w.w,1974: Cranial Variation in Man. Peabody Museum Papers, vol.67.
3. Martin-Saller, 1957: Lehrbuch der Anthropologie. Bd.1. Gustav Fisher Verlag, Stuttgart : 429-597.
4. 松下孝幸, 1981a: 日守地下式古墳出土の人骨。日守地下式古墳群発掘調査 (55-1-4号) (宮崎県文化財調査報告書23) : 169-178, 182-183.
5. 松下孝幸, 1981b: 宮崎県上の原地下式古墳出土の人骨。上の原地下式古墳群発掘調査 (宮崎県文化財調査報告書24) : 114-129.
6. 松下孝幸, 分部哲秋, 1982a: 宮崎県国富町本庄28号地下式古墳出土の人骨。宮崎考古, 8:16-20.
7. 松下孝幸, 分部哲秋, 石田肇, 佐熊正史, 1982b: 鹿児島県諏訪野地下式土壙3号出土の人骨。諏訪野地下式土壙3号 (大口市埋蔵文化財調査報告書2) : 11-15.
8. 松下孝幸, 石田肇, 佐熊正史, 1983a: 鹿児島県成川遺跡出土の古墳時代人骨。成川遺跡 (鹿児島県埋蔵文化財調査報告書24) : 236-261.
9. 松下孝幸, 野田耕一, 1983b. : 宮崎県高原町旭台地下式横穴出土の古墳時代人骨。宮崎県文化財調査報告書, 26:78-107.
10. 松下孝幸, 分部哲秋, 石田肇, 1983c: 宮崎県都城市菓子野地下式横穴出土の古墳時代人骨。都城・中之城跡, 菓子野地下式横穴 (都城市文化財調査報告書3) : 105-145.
11. 松下孝幸, 分部哲秋, 石田肇, 内藤芳篤, 永井昌文, 1983d: 山口県豊浦郡豊北町土井ヶ浜遺跡出土の人骨。土井ヶ浜遺跡第7次発掘調査概報 (豊北町埋蔵文化財調査報告2) : 19-30
12. 松下孝幸, 1984a: 宮崎県野尻町大萩地下式横穴出土の古墳時代人骨。宮崎県文化財調査報告書, 第27集:53-111.
13. 松下孝幸, 1984b: 宮崎市跡江横穴出土の古墳時代人骨。宮崎考古, 第九号:34-48.
14. 松下孝幸, 1984c: 川内市横岡古墳Ⅶ号出土の古墳時代人骨。外川江遺跡・横岡古墳高城川河川改修工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 (鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書(30)) : 142-146.
15. 松下孝幸, 1984 d: 鹿児島県大隅半島の古墳時代人骨。鹿児島考古, 第18号:171-181.
16. 松下孝幸, 1984 e: 鹿児島県大口市諏訪野地下式土壙5号墳出土の古墳時代人骨。諏訪野地下式土壙5号 (鹿児島県大口市埋蔵文化財発掘調査報告書3) : 15-28.
17. 松下孝幸, 中谷昭二, 1986a: 宮崎県国富町市の瀬地下式横穴墓群出土の古墳時代人骨。国富町文化財資料, 第4集:145-185.
18. 松下孝幸, 1986b: 鹿児島県申良町岡崎古墳群1号地下式横穴墳出土の古墳時代人骨。岡崎4号墳・1号地下式横穴 (申良町埋蔵文化財発掘調査報告書(1)) 付篇:1-16.
19. 松下孝幸, 1987: 鹿児島県高山町塚崎古墳群出土の古墳時代人骨。鹿児島考古。第21集:

57-70.

20. 松下孝幸, 1988: 宮崎県高崎町出土の古墳時代人骨。高崎町文化財調査報告書, 第1集: 57-158.
21. 松下孝幸, 1989a: 宮崎県高崎町の古墳時代人骨。宮崎考古。石川恒太郎先生米寿記念特集号上巻: 90-117.
22. 松下孝幸, 分部哲秋, 1989b: 宮崎市柿木原地下式横穴墓出土の古墳時代人骨。柿木原地下式横穴墓56-1号・江田原第1遺跡(宮崎市文化財調査報告書): 13-30.
23. 松下孝幸, 1990a: 鹿児島県宮の上地下式横穴墓出土の古墳時代人骨。宮崎考古24: 49-67.
24. 松下孝幸, 1990b: 南九州地域における古墳時代人骨の人類学的研究。長崎医学雑誌, 65(4): 781-804.
25. 内藤芳篤, 1973: 灰塚地下式横穴人骨。灰塚遺跡(九州縦貫自動車道埋蔵文化財調査報告(2)): 72-77.
26. 内藤芳篤, 1974: 人骨とその埋葬方法。大萩遺跡(1)(瀬戸ノ口地区特殊農地保全整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告): 55-62.
27. 小片丘彦, 川路則友, 峰和治, 山本美代子, 岡本満子, 1986: 宮崎県菓子野地下式横穴出土の人骨。都城市文化財調査報告書, 第4集: 47-66.
28. 佐伯和信・松下孝幸・折原義行・小山田常一, 1991: 宮崎県えびの市広畑遺跡出土の古墳時代人骨。広畑遺跡(えびの市文化財調査報告書第7集): 1-66.
29. 鈴木 尚, 1963: 日本人の骨。岩波書店, 東京。

表1 脳頭蓋計測値 (mm) (Calvaria)

	築池 1991-1 女性
1. 頭蓋最大長	170
8. 頭蓋最大幅	136
17. バジオン・プレグマ高	—
8/1 頭蓋長幅示数	80.00
17/1 頭蓋長高示数	—
17/8 頭蓋幅高示数	—
頭蓋モズルス	—
5. 頭蓋底長	—
9. 最小前頭幅	85
10. 最大前頭幅	111
11. 両耳幅	125
12. 最大後頭幅	106
13. 乳突幅	—
7. 大後頭孔長	—
16. 大後頭孔幅	—
16/7 大後頭示数	—
23. 頭蓋水平周	493
24. 横弧長	284
25. 正中矢状弧長	335
26. 正中矢状前頭弧長	116
27. 正中矢状頭頂弧長	121
28. 正中矢状後頭弧長	98
29. 正中矢状前頭弦長	102
30. 正中矢状頭頂弦長	107
31. 正中矢状後頭弦長	81
29/26 矢状前頭示数	87.93
30/27 矢状頭頂示数	88.43
31/28 矢状後頭示数	82.65
Vertex Rad.	109
Nasion Rad.	91
Subsp. Rad.	91
Prosth. Rad.	99

表2 顔面頭蓋計測値 (mm, 度) (Facial skeleton)

	築池 1991-1 女性
40. 顔長	—
41. 側顔長	73
42. 下顔長	—
43. 上顔幅	101
45. 頬骨弓幅	132
46. 中顔幅	98
47. 顔高	114
48. 上顔高	68
47/45 顔示数 (K)	86.36
48/45 上顔示数 (K)	51.52
47/46 顔示数 (V)	116.33
48/46 上顔示数 (V)	69.39
顔面モズルス	—
50. 前眼窩間幅	20
44. 両眼窩幅	97
50/44 眼窩間示数	20.62
51. 眼窩幅(右)	41
(左)	40
52. 眼窩高(右)	33
(左)	32
52/51 眼窩示数(右)	80.49
(左)	80.00
54. 鼻幅	25
55. 鼻高	53
54/55 鼻示数	47.17
55.(1) 梨状口高	26
56. 鼻骨長	29
57. 鼻骨最小幅	8
57.(1) 鼻骨最大幅	15
60. 上顎齒槽長	52
61. 上顎齒槽幅	61
62. 口蓋長	47
63. 口蓋幅	39
64. 口蓋高	10
61/60 上顎齒槽示数	117.31
63/62 口蓋示数	82.98
64/63 口蓋高示数	25.64
72. 全側面角	85
73. 鼻側面角	90
74. 齒槽側面角	72

表3 鼻根部計測値 (mm, 度) (Nasal root)

	築池
	1991-1
	女性
50. 前眼窩間幅	20
鼻根橫弧長	24
鼻根彎曲示數	83.33
57. 鼻骨最小幅	8
44. 两眼窩幅	97
50/44 眼窩間示數	20.62
前頭突起上幅(右)	7
(左)	6
前頭突起水平傾斜角	114
G-N 投影距離	0
鼻根角	160
G-R 距離	37
垂線高	3
鼻根陷凹示數	8.11

表4 下顎骨計測値 (mm, 度) (Mandible)

	築池
	1991-1
	女性
67. 前下顎幅	46
69. オトガイ高	29
69(1). 下顎体高(右)	32
(左)	30
69(2). 下顎体高(右)	24
(左)	27
70(2). 最小枝高(右)	44
(左)	-
70(3). 下顎切痕高(右)	-
(左)	12
71. 枝幅(右)	37
(左)	-
71a. 最小枝幅(右)	37
(左)	-
71(1). 下顎切痕幅(右)	-
(左)	36
69(2)/69 下顎高示數(右)	82.76
(左)	93.10
71a/70(2) 下顎枝示數(右)	84.09
(左)	-
下顎体厚(右)	13
(左)	-

表5 鎖骨計測値 (mm) (Clavicle)

	築池
	1991-1
	女性
3. 骨体彎曲弦長(右)	84
(左)	-
4. 中央垂直徑(右)	7
(左)	7
5. 中央矢狀徑(右)	10
(左)	9
6. 中央周(右)	29
(左)	27
4/5 鎖骨斷面示數(右)	70.00
(左)	77.78

表6 上腕骨計測値 (mm) (Humerus)

	築池
	1991-1
	女性
7. 骨体最小周(右)	-
(左)	47

表7 大腿骨計測値 (mm) (Femur)

		築池
		1991-1
		女性
6.	骨体中央矢状径(右)	25
	(左)	24
7.	骨体中央横径(右)	23
	(左)	23
8.	骨体中央周(右)	75
	(左)	75
9.	骨体上横径(右)	27
	(左)	27
10.	骨体上矢状径(右)	20
	(左)	20
15.	頸垂直径(右)	29
	(左)	—
16.	頸矢状径(右)	25
	(左)	—
17.	頸周(右)	90
	(左)	—
6/7	骨体中央断面示数(右)	108.70
	(左)	104.35
10/9	上骨体断面示数(右)	74.07
	(左)	74.07

表8 脛骨計測値 (mm) (Tibia)

		築池
		1991-1
		女性
8.	中央最大径(右)	26
	(左)	26
8a.	栄養孔位最大径(右)	30
	(左)	30
9.	中央横径(右)	18
	(左)	17
9a.	栄養孔位横径(右)	21
	(左)	20
10.	骨体周(右)	71
	(左)	70
10a.	栄養孔位周(右)	81
	(左)	79
10b.	最小周(右)	—
	(左)	—
9/8	中央断面示数(右)	69.23
	(左)	65.38
9a/8a	栄養孔位断面示数(右)	70.00
	(左)	66.67

表9 形態小変異 (Non-metric crania variants)

	築池	
	1991-1	
	女性	
	右	左
1. Medial palatine canal	-	-
2. Pterygospinous foramen	-	-
3. Hypoglossal canal bridging	/	/
4. Clinoid bridging	/	/
5. Condylar canal absent	+	/
6. Foramen of Huschke (< 1mm)	-	-
7. Jugular foramen bridging	/	/
8. Precondylar tubercle	/	/
9. Supra-orbital foramen	+	-
10. Accessory infraorbital foramen	-	-
11. Zygo-facial foramen absent	-	-
12. Aural exostosis	+	+
13. Metopism		-
14. Os incae		-
15. Ossicle at the lambda		-
16. Parietal notch bone	-	-
17. Transverse zygomatic suture (< 5mm)	/	/
18. Asterionic ossicle	-	-
19. Occipitomastoid ossicle	-	-
20. Epipteric ossicle	-	-
21. Frontotemporal articulation	-	-
22. Biasterionic suture (< 10mm)	-	-
23. Mylohyoid bridging	+	-
24. Accessory mental foramen	-	/
25. Mandibular torus	-	-

{present : +, absent : -, unobservale : /}

表10 歯の計測値 (mm)

		築池 1991-1 女性		
		右	左	
類 (唇)	上顎	I ₁	6.91	6.89
		I ₂	△	5.64
		C	7.63	7.77
		P ₁	9.44	9.48
		P ₂	9.09	8.98
		M ₁	11.78	11.71
		M ₂	△	10.88
		M ₃	△	10.73
	舌 径	下顎	I ₁	5.84
		I ₂	5.94	6.26
		C	6.98	7.03
		P ₁	△	—
		P ₂	7.97	8.14
		M ₁	—	10.65
		M ₂	—	△
		M ₃	—	9.69
近 心 径		上顎	I ₁	8.22
		I ₂	△	6.43
		C	7.53	7.75
		P ₁	6.73	7.01
		P ₂	6.29	6.31
		M ₁	9.69	10.04
		M ₂	△	9.03
		M ₃	△	8.88
	下顎	I ₁	5.39	5.63
	I ₂	5.98	6.29	
	C	6.39	6.50	
	P ₁	△	—	
	P ₂	7.15	6.99	
	M ₁	—	10.93	
	M ₂	—	10.43	
	M ₃	—	10.44	

△：計測不可能

表11 齲蝕とその程度 (Caries of the teeth)

		築池 1991-1 女性	
		右	左
上顎	I ₁	○	○
	I ₂	○	○
	C	○	○
	P ₁	○	○
	P ₂	○	○
	M ₁	○	○
下顎	M ₂	/	2
	M ₃	/	○
	I ₁	○	○
下顎	I ₂	○	○
	C	○	○
	P ₁	/	/
	P ₂	○	○
	M ₁	/	○
	M ₂	/	/
	M ₃	/	2

[1~4:present, ○:absent, /:unobservable]

A Human Skeletal Remain Excavated from the Chikuike Tumuli, Miyakonojo City, Miyazaki Prefecture.

Takayuki MATSUSHITA, Kazunobu SAIKI

[Department of Anatomy, Nagasaki University School of Medicine]

Keywords : Miyazaki Pref., Kofun skeleton, tombs with an underground chamber, Female

A Human skeletal remain dating the Kofun Period were excavated from the Chikuike tumuli, tombs with an underground chamber, Miyakonojo City, Miyazaki Prefecture, in 1991.

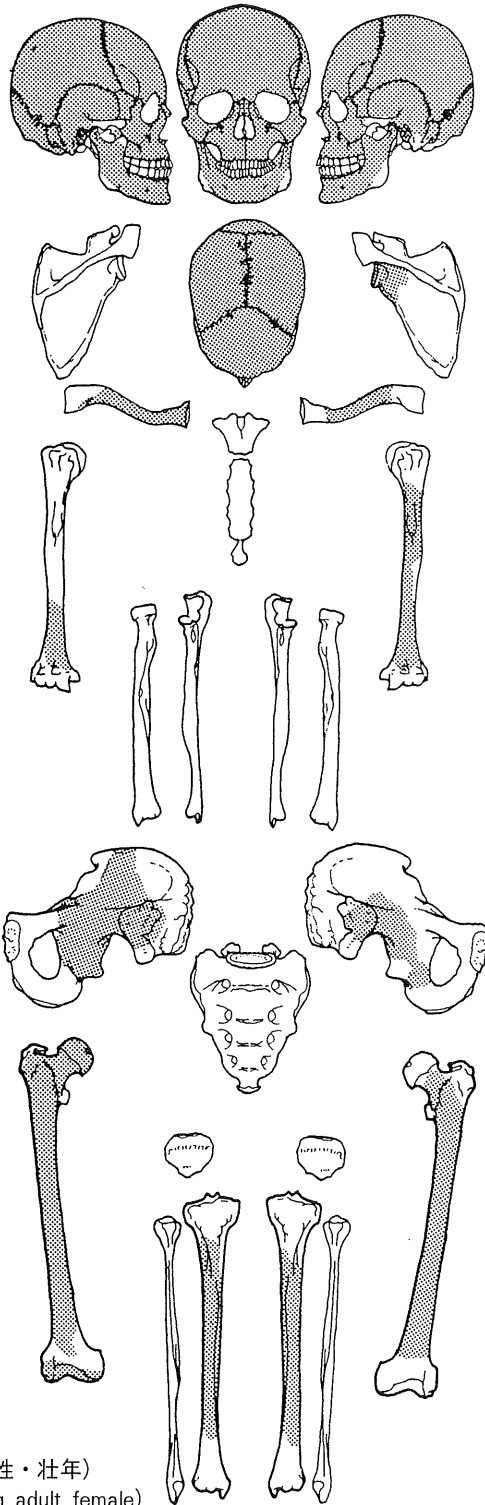
An anthropological study of the human skeletal remain was conducted.

The skeleton, 1991-1 is presumed to be of an young adult female.

The length-breadth index is [80.00], brachycranial. The zygomatic facial breadth is 132mm, the middle facial breadth is 98mm, the facial height is 114mm, the upper facial height is 68mm, the facial indices are 86.36 (K), 116.33 (V), the upper facial indices are 51.52 (K), 69.39 (V). This is skeleton has a high face as the Kofun female people in the south kyushu mountainous area.

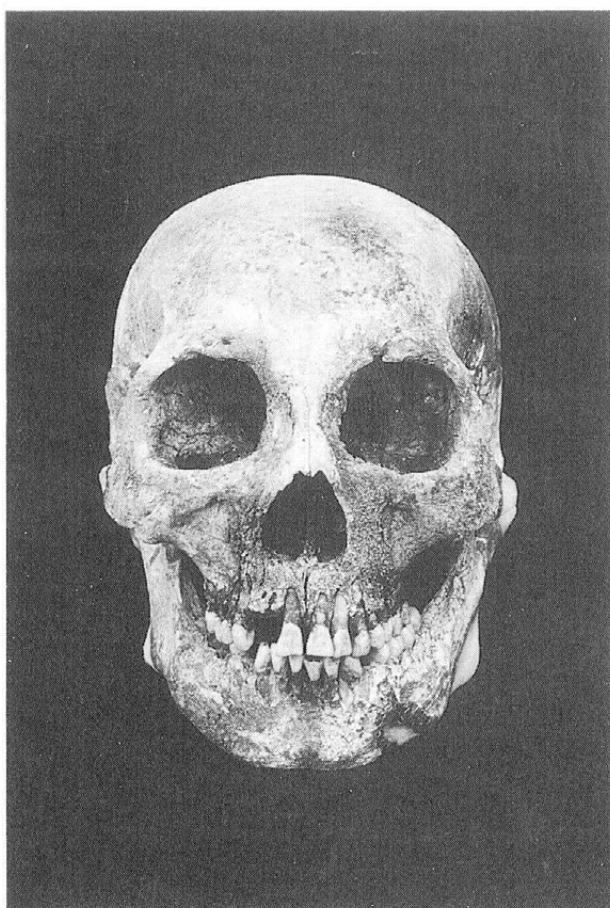
The limb bones are slender and the subtrochanteric portion of the femur is platymeric.

There are bilateral aural exostoses in this individual.

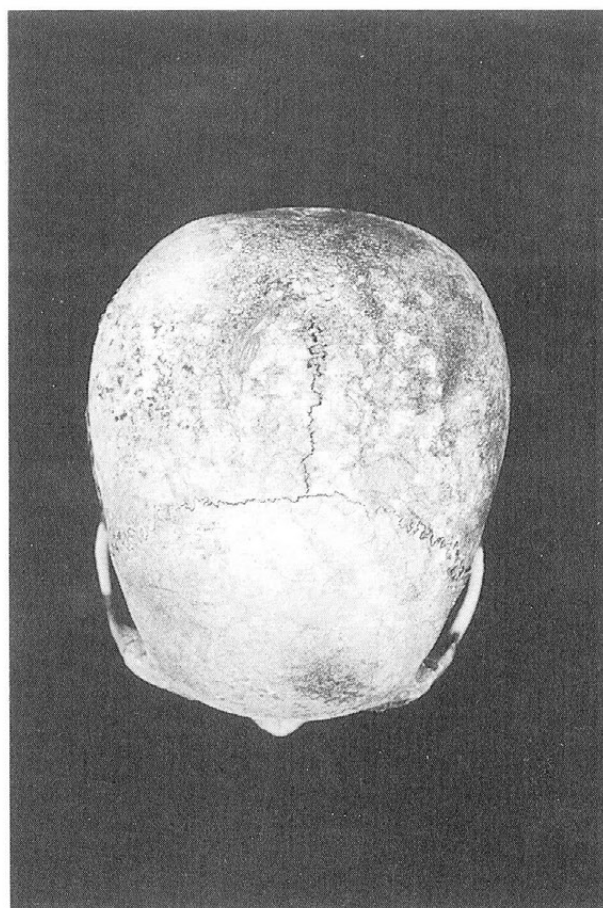


築池1991-1人骨(女性・壮年)
 (Sketeton 1991-1, young adult female)

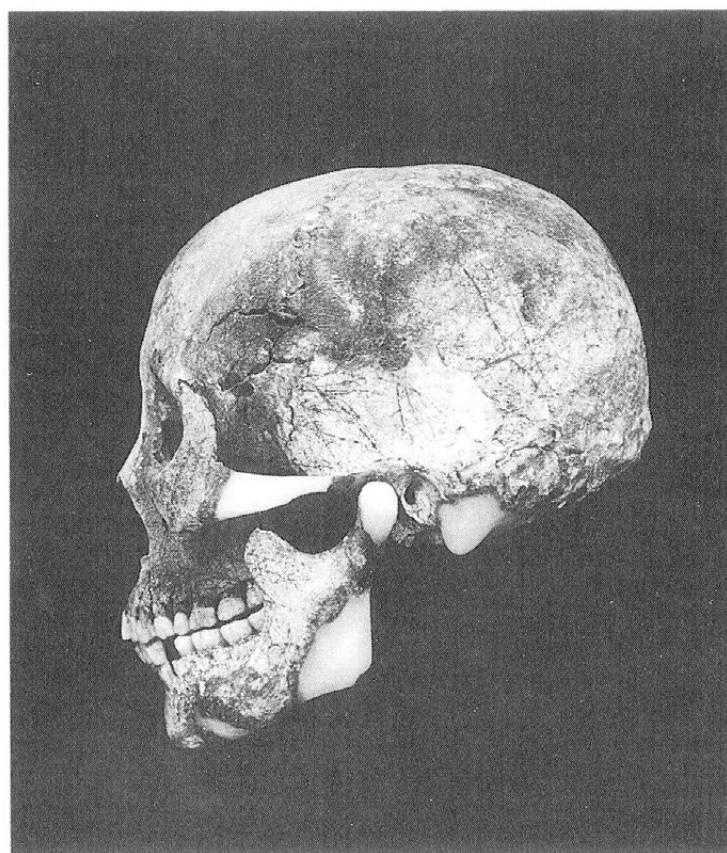
図2. 人骨の残存部、アミかけ部分
 (Fig.2. Regions of preservation of the skeleton. Shaded areas are preserved.)



頭蓋前面 (Frontal view of the skull)

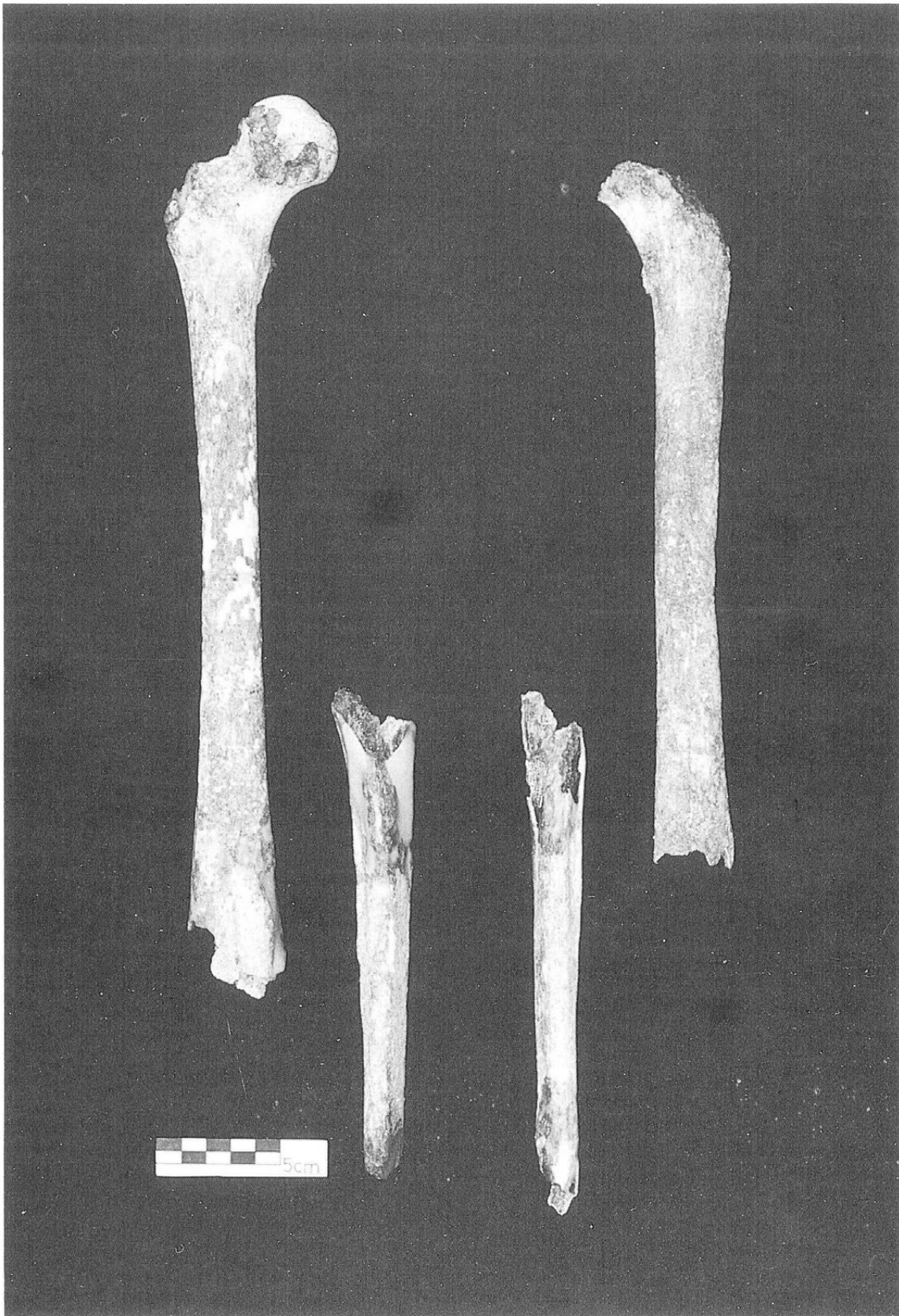


頭蓋上面 (Superior view of the skull)



頭蓋側面 (Lateral view of the skull)

築池地下式横穴墓1991-1号人骨(女性・壮年)
(Chikuike Kofun Skeleton 1991-1, young adult female)



四肢骨 (Limb bones)

築池地下式横穴墓1991-1号人骨(女性・壮年)
(Chikuike Kofun Skeleton 1991-1, young adult female)